川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十三年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一〇〇六号

日川協加盟

No. 1006

三月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東３丁目７番８号　〒584-0023
TEL 0721-25-7210　FAX 0721-25-9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町４丁目５番８号　〒103-0021
（日本橋川村ビル４F）
TEL 03-5255-5158　FAX 03-5255-5159
http://www.koki-envelope.com

自費出版　川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美研アート

〒530-0022　大阪市北区浪花町９番４号
TEL（06）6372－1178
FAX（06）6372－1196
E-mail：bikenart@wonder.ocn.ne.jp

時実新子展

小島蘭幸

―〈悪い男と心ひとつに薔薇を見た〉〈妻をころしてゆらりゆらりと訪ね来よ〉。句集「有夫恋」などで知られ「川柳界の与謝野晶子」と呼ばれた時実新子さんが亡くなってまもなく4年になる。激しい情念や生きることの哀切を真っすぐに詠んだ作品は今も新鮮で、時に読み手の心に刃を突き付ける。徳島市の徳島県立文学書道館で「川柳作家　時実新子展」が開かれている。―

これは平成23年1月29日の中国新聞朝刊に「修羅の恋真っすぐに」という見出しの、文章の一節です。更に新子さんの生い立ち、川柳との縁、徳島とのつながり等が文化欄の1／4頁にわたってカラー写真二枚と共に紹介されていました。読み終わると私の心はもう徳島一色でした。

徳島県立文学書道館は三階建ての素晴らしい会場でした。受付で入場料を払うと〈かくれんぼして花影の花になる〉美しい表紙の立派な冊子を頂きました。25歳～75歳までの新子作品、インタビュー、田辺聖子氏の寄稿、寂聴・新子対談……。盛り沢山の内容でこの冊子を頂いただけでも徳島へ来た甲斐がありました。

会場に入ると先ず新子さん愛用のドレスが目に飛び込んで来ました。藍色の美しいドレスを見つめていると、在りし日の新子さんが想像され胸が熱くなりました。雅印、愛用の品々、直筆原稿、年譜と川柳作品、写真、著書一覧の一つ一つに一人の女性川柳作家の生き様が見事なまでに息衝いています。その中で、橘高薫風先生、寺尾俊平さんとご一緒の新子さんの弾けるような笑顔の写真に、〈雨の日のダイヤル通じそうで切る〉35～45歳作品の中の一句に、鉛筆書きの直筆原稿に新子さんの真の優しさを見たようで、ほっとあたたかくなりました。

新子百句、新子さん自身の朗読もたっぷり拝聴することも出来て、とっても心豊かな一日でした。1月30日、竹原から車で往復550キロの一人旅でした。

座右の句
街角を一つ曲ればもう旅だ　（天笑）

私の句
髪を切りそれから春を謳歌する　森田麗

川柳塔　三月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「龍野・揖保川」

■巻頭言　時実新子展……小島蘭幸…（1）
良事は語り善事は聞く……小西雄々…（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…（4）
川柳塔の川柳讃歌(75)……木津川計…（47）
自選集……（48）
温故知新……（51）
水煙抄……西出楓楽選…（52）
愛染帖……新家完司選…（74）
誹風柳多留一一篇研究 67……（78）
檸檬抄「セット」……三宅保州・山本希久子共選…（80）
麻生路郎句抄……（83）

良事は語り善事は聞く

小西雄々

昭和二十三年四月、私の勤務先に文芸部が発足し、川柳の会に入会した。当時は戦後の復興へと進む中で、娯楽と言えばたまに映画を観に行き、ラジオを聞く程度であった。

川柳作句を始めて少しして、不朽洞会員であった三鴨美笑氏から川柳雑誌を渡され、初めて全国的柳誌に目を見張った。そして次号から購読し毎月投句を続け、入選句を楽しみ趣味としての川柳に大きな力となった。

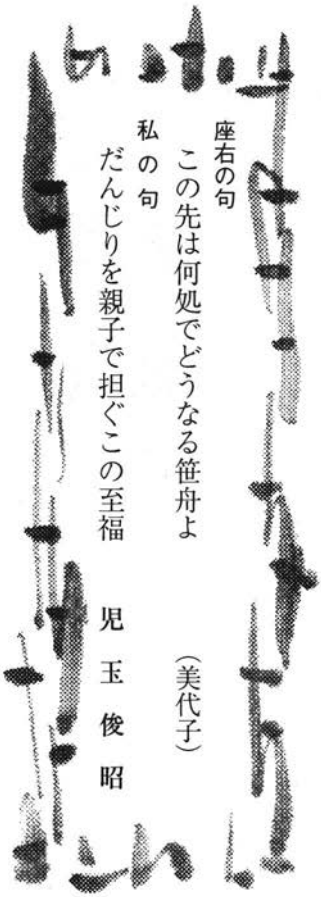
ある日、美笑氏が「路郎先生から雄々君が投句しているが、大事に育てるように…」と言われていると聞き、先生のご期待に沿うよう努力することを誓った。

最初にご挨拶したのは昭和二十六年三月の出雲川柳大会で、古武士の風格を感じた。

そして昭和三十年三月には、川柳雑誌社米子支部松露川柳会創立記念大会で、路郎先生と美笑氏と私の三人で夕食会を催した時、「地方の大会に行った時はゆっくり飲むのが一番楽しい」と喜んでいただき、終ると三人でホテルの温泉に入り、話題はつきなかった。

その後、川柳雑誌と川柳塔の大会には忙しい勤務の中、極力出席して選者を命じられた

一路集（「偶然」……宮尾みのり選……（84）
「淡い」……米澤俶子選……（84）
「そわそわ」……松山芳生選……（85）
初歩教室「ゆるい」……鈴木公弘……（86）
せんりゅう飛行船(3)……新家完司……（88）
■エッセー「米子はすっぽり雪の中」……政岡未延子……（89）
秀句鑑賞「同人吟……早川遡行……（90）
「水煙抄……川端一歩……（92）
津軽発おもしろ景色②……高瀬霜石……（93）
山本益子さん安らかに……両川洋々……（94）
■句集紹介『茹で蛙』井上勝視 著……仁部四郎……（95）
二月本社句会……（96）
各地柳壇（佳句地十選／小川てるみ）……（100）
柳界展望……（115）
三月各地句会案内……（118）
■編集後記（ひとこと／井上桂作）……朱夏・冨美子……（120）



座右の句

この先は何処でどうなる笹舟よ　（美代子）

私の句

だんじりを親子で担ぐこの至福　児玉俊昭

こともあり、光栄に存じている。

さて、路郎先生の古稀祝賀川柳大会が昭和三十二年七月七日、大阪市都島区の藤田美術館で開催され、各駅停車の夜行列車で参加した。出席者は四百名を越える盛会に驚いた。先生に「古稀祝賀川柳大会おめでとうございます」とご挨拶すると、「遠いところを有難う、頑張ってるね」と、ご返事をいただき、隣におられた葭乃先生からも「お元気でいいですね」と笑顔で言われた。鳥取県からは私と河村日満氏の二人のみ参加だった。

川柳書は図書館に行っても無く、書店で探し求めた路郎先生著の『川柳とは何か』は、昭和三十一年五月で、今も座右の書にしていることに変りはない。

先生の力説された「生命ある句を創れ」と、「川柳は人間陶冶の詩である」のスローガンは、今も私の脳裏に生き続けている。

また、先生の作品頒布の知らせを昭和四十年の一月号で知った。作品は軸・色紙・短冊であり、私は家宝にしたいと軸を申込んだが、先生のご病気で中止となり残念至極である。

川柳雑誌の不朽洞会員の投句欄は「川柳塔」で、先生の遺志で川柳雑誌の廃刊後、川柳塔に生れ変ったことを知る人も少なくなった。

あの日から長い歳月が流れ流れたが、麻生路郎先生の思い出の消えた日はありません。

川柳塔

小島蘭幸選

鳥取市　福西茶子

豪雪に暖も灯もない年の明け
下半身すっぽり雪の中にある
雪空けの筋肉痛がまだ続く
雪ダルマ造ろうなんてジョークでしょ
新聞が来ました雪の海漕いで
羽根あれば渋滞なんか怖くない

和歌山市　木本朱夏

開封をしたら明かりが点きました
ゴットンゴトン青い電車で春が着く
プランターの土をもたげる春の息
まだともうのあいだで春が背伸びする
傷口を春のことばであたためる
前髪が伸びるころには春の風

鳥取県　石谷美恵子

いつもキラキラ心に海をもっている
病人を笑わせながらリンゴ剥く
村雀うわさを点火して走る
点火したのも私で消したのもわたし
丁寧な挨拶遠いひとになり
賑やかなひとの寂しい私生活

鳥取県　伊藤寿美

坂の上の雲よ龍馬よ菜の花忌
無手勝流何も見ぬ振り知らぬ振り
頑張るな無理をするなと子の電話
終活はドナーカードに署名する
墓守りの長姉は戸籍筆頭者
逢いたい人に逢えた一〇〇〇号まつり

堺市　村上玄也

ピーポーが鳴る一斉に耳澄ます
正論と信じて主張力み過ぎ
四面楚歌中央突破試みる
献血を呼びかける娘に避けられる
大胆と鈍感なのは紙一重
怠けさえせねば亀には勝つ兎

クリンチばかりでおもしろい夫婦
ランドセルしたままできる結跏趺坐
広告塔に広告がなし鳥集く
バスの座席にフランスパンとしみじみと
欄干に雪が残っている夫婦
じっくりと春の小川を見に行こう

堺市　桒原道夫

オーソドックスがいい生 老 病 死
充分に生きたと言って死ねるかなあ
煙穴の先からもはや出ぬ煙
そういえば最後に会ったのは…病院
つらいことあるといっぽん歯が欠ける
救急車よりも身近な霊柩車

弘前市　髙瀬霜石

根性の原点だった雪下ろし
大阪の雪は園児の口に降る
啐啄の音で始まる母の愛
その時のために残しておく冗句
父と子の絆で上げるやっこ凧
必死で聴いている上司のからオケ

堺市　柿花和夫

新年新年と頑張らぬようにする
縁側であの世この世を眺めている
ふところは見えぬ程度にちらつかせ

松江市　松本文子

ばあちゃんもやるぞ花見も飲み会も
踏まないでツクシン坊が出る所
皆他人みな友達でほっとする

枚方市　海老池洋

やっと春喜ぶ梅の息遣い
画竜点睛ケーキの上にのる苺
ノウハウが列を作らすたこ焼き屋
身の程に合わせて妥協してしまう
処世術教えてくれる団子虫
どんぐりも転げて森になる野心

鳥取市　近藤佳子

川柳のお蔭米寿の屠蘇を飲む
こぞ今年娘に御節まかせきり
亡母のおしゃれ着に時どき手を通す
万年青引きよせ両膝に喝を入れ
ごま和えを母にも供え朝の贅
鈴つけた猫と寝た日を懐かしむ

黒石市　佐藤古拙

カラフルな紙面に酷い記事ばかり
寂しくて郵便受けを開けてみる
除雪車が庭先に置く雪だるま
春雨に限界村の佇まい
モノクロの記憶にポストだけ赤い
リヤカーも昭和通りにセットする

松山市　古手川　光

大晦日家のエアコンストライキ
海老蔵で大騒ぎするほど平和
カウントダウンのように聞こえる除夜の鐘
エコエコと言わず冬眠する蛙
冗談ですかたんしてる訳じゃない
この冬はにんまりしてる雪女

神戸市　両川無限

大目玉食らったような冬木立
嘘が嫌いでたっぷり花の種を蒔く
夢ばかり追ったカードのつけがくる
原因は私だったと知る騒ぎ
わたくしの器を影が確かめる
補聴器にふと出た本音拾われる

富田林市　中井アキ

注連縄の藁の辺りにある祈り
初鏡運命線に紅を足す
しなやかに娘は夢へジャンプする
風化した噂が残る去年の耳
父さんはカレー極めて自画自讃
終電車コンビニの灯に迎えられ

熊本市　永田俊子

買いたいが残り時間に聞いてみる
天下りと言うシェルターの指定席
心の捻子ゆるむを叩く除夜の鐘
両腕丸出し見てる私が風邪をひく
私利私欲内輪もめする五目飯
人情を知らぬ蜜柑の選別機

西宮市　山本義子

毎日が記念日傘寿したたかに
白鳥座に翔びたつ力溜めている
かくれんぼの好きな眼鏡は棚にいた
お小言か黄泉路の母は風の音
待たされる同士の喋る花時計
藍色は洗うほど冴え天のいろ

大阪市　川端一歩

まだ誰も歩いていない道が好き
勝ったより負けた背中にあるドラマ
日々多忙いま幸せのど真ん中
引き際の美学の足がもつれてる
妻病んで何もできない木偶の坊
春なのにわが家の暮らし冬のまま

岸和田市　岩佐ダン吉

彬という夢中になれる人がいる
九条で染めたい戦ない世界
汗いっぱい今は何にも恐くない
バランスは良い男だが影が無い
続くもの信じて石を投げてみる
老人会社長会長元市長

阪南市　森村美花

やわらかい日差しやる気を連れてくる
未練捨てざくざくざくと切る和服
就活の点滅の灯が止まらない
ひとり鍋テレビと会話してつつく
頑固やなあ七十年の積み重ね
書き初めに爆発すると書いてみる

出雲市　石倉芙佐子

優しい人優しい電話掛けてくる
大賞の重みを深く抱きしめる
八十路きて雪やこんこんでも唄う
雪兎どうやら明日は晴れそうね
ああ昔　雪の訣れもあったっけ
長靴でいずも句会も珍らしい

大阪市　吉村一風

残り物食べる妻には嘘つけぬ
目立ちたいだけど静かに暮らしたい
襟たてて重たい風とウォーキング
笑わせて健康くれる輪に混じる
老いの晩酌早よ寝ろ寝ろとせかされる
ちょっと一服しなはれ誘う畔の花

八尾市　髙杉千歩

それからを聞きたい賀状別にする
デイケアに行く人よりも三つ上
遺言を書くなら今日だ誕生日
おひとりさまスロースローで恙なし
たっぷりと自問自答で日が昏れる
就活へ二十歳の試練キー叩く

香芝市　大内朝子

生かされる命大事にして感謝
ときめきはおんな心に来た祭り
煩悩のゆらゆら揺れている微妙
木漏れ日のような愛です老いの恋
夕焼けが明日の卵を抱いている
人生は一期一会の玉手箱

大阪市　津村志華子

元気よく跳ぼうよ空は無限大
切り傷のまだ赤赤と傘寿の血
得手勝手時には齢を楯にする
人工の膝は礼儀を欠いている
気遣いが邪魔して前に進めない
ゆったりとしよう余生に限りある

橿原市　安土理恵

南天ふたつのこしていった雪うさぎ
冬の星座へそっと聞き耳たてている
語らいはモノクロがいい冬の夜
アラフォーらしいサルビアの寒い赤
もう一度咲きたい愛が発芽する
春がくるまえに整形外科へ行く

青森県　松山芳生

タバコの煙に迷い込んだ　苦悩
日記帳開いて四季の花を摘む
子の不出来宿るわたしの血を叱る
逝く雲は還らず妻の三回忌
ときどきは励ましながら泣きながら
この先は断崖になる雪ほたる

河内長野市　山岡冨美子

あれ以来自縄自縛になる誓い
腰痛に脅かされる導火線
勘違いしている笑みに逆らえぬ
はったりが通用しないキーボード
嘘のない暮らしを目指すエコバッグ
大声を出してしまった負けました

大阪市　小谷集一

ひと時を孤独と遊ぶ日向ぼこ
上向いて歩こう風を道連れに
ラグビーのボールが跳ねる自己主張
カレンダー吊るすと走り出す卯年
過ぎし日を語る妻とのティータイム
職終えてなんと気楽な無位無冠

八王子市　播本充子

記念日の雪が二人に温かい
日和見の男も髪が薄くなり
お手上げの体で拍手をしています
バランスを考えすき焼をつつく
象だって友の痛みを理解する
凡人も源氏も過去を繰り返す

松江市　川本畔

登らねば山の強さはわからない
毛糸編み小さくもつれてくる平和
親切を懐深く受け止める
大方の甘え寒晒しに遇った
すぐ笑うおせっかい屋の君である
平凡な日々を時々裏返す

寝屋川市　籠島恵子

儲け話私を狙う事はない
寝たもん勝ちあとの用事はしりません
ワンコインちょっと楽ちんしてしまう
何ごとも無い事だけが祈りです
餅花がほんのりさせてくれました
女正月お好み焼きで盛り上がる

和歌山市　福本英子

何も彼も良い方にとる三ヶ日
鑑定に出さない軸と屠蘇機嫌
戎さんの寒波に銭湯独り占め
要介護まだ下りません戎さま
子養いの年金だからまだ逝けぬ
言い訳をする時姑の瞳を外らす

豊中市　水野黒兎

冬至湯の柚子ほど温い師の笑顔
狛犬と焚火を囲む初詣
箍少し締め参拝の年男
千年の古都千年の仏さま
冬眠の脳を励ます広辞苑
卒寿の師座右の銘に夢と書く

弘前市　髙橋岳水

道草をして本物に遇うことも
宿命の雪と握手をして生きる
サバイバルレースへ掛けておく保険
蟻の穴から洩れてくるスキャンダル
生き延びるための余白を耕さん
さようなら勿忘草を届けます

弘前市　福士慕情

居睡りの時間がながくなる兎
部屋数の分だけ暦かけ替える
アナログを地デジに替える初春の風
親友の愚痴には猪口が欠かせない
湯豆腐が浮いて冷戦とけてゆく
その先を探し求める座禅堂

橿原市　居谷真理子

ノーサンキューみんなに配る笑顔など
セコンドは他人タオルをまだ投げぬ
飯を炊く匂いで招く福の神
一夜だけなら神様もお目こぼし
由緒など知らない塚を今日も掃く
美しいだけの言葉を下さった

鳥取市　倉益一瑶

その時は帰って来いと日本海
死に神も尻尾を巻いた大笑い
サプリメントまだまだ踊るつもりです
電池切れしたかゆうべの句が出ない
挑発に乗らぬあなたは大人です
その時は細い腕でもお貸しする

大阪市　熊代菜月

腹立てる気力そろそろ持て余す
衣更え母の匂いがまだ残る
真夜中のこの静けさよ淋しさよ
振り返る過去あり今も夢つづく
かにツアーまだまだ若い老人会
失敗も恐れぬ若さ娘にはあり

藤井寺市　鴨谷瑠美子

バター焼きの餅も食べてはみるものだ
二重窓他人の噂聞こえない
プラス思考へ明日から靴を履きかえる
冬の薔薇わたしに夢をくださいな
いくつものドラマ並べた植木鉢
口に出すから空空しいことになる

竹原市　岩本笑子

切り取り線ストンと夕陽落ちてゆく
花便りさあ蝋梅を活けましょう
目覚めたら正月でした雨でした
猫と暮らして猫を探しているのなり
三年の節目かガンを眠らせて
時々は忘れていいの薬飲む

三田市　上垣キヨミ

手造りのケーキはいかが写メールで
冗談が届かぬ長いながい夜
お身ぬぐいこそばゆそうな菩薩さま
若作り赦してくれぬ円い背
振り袖を見れば値ぶみをしたくなる
背広着て汗をかかない職探す

東大阪市　北村賢子

もう古稀かいやまだ古稀の道磨く
それなりに生きるこの道いとおしい
春めいてときめくこころ目を覚ます
やるせ無い心踏ん張って生きる
胸騒ぎの晴れて安堵の青い天
わくわくと春へジャンプをするこころ

大阪市　古今堂蕉子

焼肉にしてと孫たち力づく
おばあちゃん遊びましょとメール来る
もうあかん言うてる腰に言い聞かす
騙すいじめる恥しい事おまへんか
新聞種になるなあの家やとわかる
しゃべらんと聞きます今年うさぎ年

鳥取市　有沢せつ子

カレンダー期待の厚み掛けている
コンビニの棚から母の味を買う
ドラマロケ三朝の町に日が当たる
国政を論じて鍋が煮えつまる
ストレスの解消もする拭き掃除
同い年老け方の差に負けました

可児市　板山まみ子

二十年生きなはれやと余命表
卒寿までしゃっきりいたい年女
身の内に仏も鬼もいて生きる
今年こそ断捨離心鬼にして
陽の光だけで幸せ寒の入り
沈黙の中でカニ食う十二畳

出雲市　小白金房子

はなやかな水引米寿祝う新春
老いるとは生きて語れる宿浴衣
子宝を乗せて漕ぎ出す新春の海（ひ孫十一人）
一日の翼を畳む初日記
搾乳をおえて安堵の秣食う（搾乳黒牛共六〇居ます）
初セリへ子牛戻れぬ背を送る

松山市　宮尾　みのり

ラ・フランス妙に納得して食べる
干し柿の手間を拝んで召し上がれ
鳩時計賑やかだった頃を恋い
整理下手また想い出に酔うている
服を買うゆとり女は生き返る

松山市　髙橋　宏臣

深追いの夢から覚めて小半日
安眠はグレーゾーンの中に置く
暗闇をコピーしている不眠症
三面鏡にジキルとハイドもう一人
正眼の構えで鉛筆が折れる

大洲市　中居　善信

紅白へ世代の違い思いつつ
年の瀬のハローワークに成田発
物差しは一つ戦後の物ひとつ
中流意識が日本を駄目な国にした
一夜明ければ銀世界寝正月

西予市　黒田　茂代

雪原の華丹頂のバレリーナ
雪に音消されぽっかり白い闇
どの窓も消えた寒夜の雪あかり
少子化なんて何さ芽キャベツ子沢山
旅は呆け防止旅好きへの応援歌

高知市　小川　てるみ

青空へ背伸び老いてはいられない
冬らしい寒さになぜかほっとする
生かされた命おろそかには出来ぬ
買い溜めの高いマスクを笑うまい
シナリオを変えて今年のうさぎ跳び

高知市　小澤　幸泉

パソコンの全て私の恥部を見せ
真心を贈る世代が隅に生き
どなっても過去に届かぬ夢芝居
修験者のみち大山の冬を踏む
画家になり絵画となる足立美術館

唐津市　山口　高明

片道の切符で着いた東尋坊
粕汁にしょか今夜は雪予報
俗塵にまみれ建前身につける
胸の奥割って見せたい火が燃える
列島の治安近頃西部劇

唐津市　坂本　蜂朗

宝くじ当った顔をどうしよう
塩漬けの中で出会った無二の友
業務用笑顔きれいなスチュワーデス
美の極み展脳味噌が正座する
仏壇の灯も踊り出す子の帰省

唐津市　井上勝視

二人分を一人で家事の忙しさ（老妻入院　5句）
馴れぬ炊事手順も狂い日が暮れる
晩酌に相伴もなく急ピッチ
二度三度夜の戸締り火の用心
大掃除ゆっくりとする老いの暮れ

唐津市　樋口輝夫

寒風に辻の地蔵の赤頭巾
爺様が朝の茶沸かす午前五時
プライドという面倒な荷が重い
間違われ娘で通す電話口
世界一の妻だと遺影に言うてやる

熊本県　岩切康子

受診を梯し保険に感謝する
トランペット心に沁みる良いご趣味
会える日の楽しみ消した緊急オペ
夢一つも見ずに毎日恙無し
散歩の足制止するのも妻の役

札幌市　三浦強一

忘年会などはいらない物忘れ
恙無く傘寿の関所越えた春
テレビから日本中のお正月
三が日発泡酒から吟醸酒
ライバルで親友でまた悪友で

札幌市　小沢淳

熟成の歳月老いという澱み
はったりの裏に脆さが透けている
遊行期もオンリーワンにまだ望み
カタカナ語増えた浅瀬で溺れている
湯たんぽを抱いて夢見る寒の底

砂川市　大橋政良

好奇心退化の脳にむちを打つ
楢山の駅でポツンとひとり言
美しく醜く乾ききる未練
手を引かれ渡る孫の手あたたかい
居所を教えるように鈴を振る

黒石市　相馬一花

天国も地獄も知っているクルマ
プライドも胸も隠してゆく風呂屋
寝た振りをして外濠を埋めさせる
北限の猿の悩みを君知るや
前向きの姿勢崩さぬ天下り

平川市　小寺花峯

陰口を笑い飛ばした春の森
底辺を泳ぎ疲れた独り酒
笑顔には笑顔で握手虹を見る
散り際も見たいと思う赤いバラ
宝くじ明日をちょっぴり跳んでみる

後期高齢半分以上は医者通い
男性の脳を揺さぶるルノアール
院長の回診身辺整える
店頭に新鮮を置く看板だ
それにしても昔江戸までよく歩き

弘前市　須郷井蛙

降雪の予想に酌んだ早寝酒
起死回生医師にまかせて祈るのみ
癌切除死に神逃げてよみがえる
湯タンポに昭和一桁夢託す
春を待つ癒しの声よ金魚売り

弘前市　岡本花匠

屋台ではいっぱしの歌舞伎評論家
一兵卒も一筋縄でいかぬもの
日帰りの東京なぜかもの足りず
新幹線効果覿面ともゆかず
降雪に猛暑の記憶うすれゆく

弘前市　今　愁女

賀状での問いに一年後賀状で
心の中には幸せのアルバム
ふる里にUターンよりもIターン
開戦日無口な男饒舌に
共白髪老老介護自助努力

さいたま市　星野育子

野の花が広い大地で揺れる春
悩み事笑い飛ばせるものならば
思い出が沢山詰まる太い幹
手の温み残る握手に見送られ
陽当たりに椅子動かして針仕事

東京都　清原悦子

政治家のよろけ具合が許せない
外人にランク付けられ泣く和食
緑内障お金積んでも治らない
養生は杖と娘に頼り切り
せめてもの取り柄素直な良い患者

東京都　岸野あやめ

物余りそれでも並ぶ福袋
うば捨てのように個室に引きこもる
平日は熟女の天下グルメ街
へそくりを夫婦で貯める猜疑心
要領のいい割込みに舌を巻く

横浜市　菊地政勝

太陽を空中散歩から覗く
紅白の予告が煽る馬鹿騒ぎ
無駄なもの買う楽しさの福袋
話すねたみんなとっくに知っている
大晦日なにもしないと笑う老い

横浜市　小野句多留

川崎市　三浦きぬ

自画像を描こう鏡を曇らせて
亡母の齢二倍も越えて生かされて
神仏はお見通しです見栄はるな
ああ老いて先祖詣りも遙拝で
賽銭も分相応にと神の声

富山市　島ひかる

春一番吹くまで耐えている大地
母の歳越した姉妹がよくしゃべる
春彼岸風は冷たい墓参り
生命線とっくに消えている不思議
後悔の愛を歳月消してゆく

静岡県　薗田獏沓

美しい星で諍いばかりする
簡単な漢字で辞書に笑われる
メモを見て挨拶をする偉い人
嫁ぐ娘をじっと見ていた庭の桐
注連縄の太さ社を重く見せ

犬山市　吉田幸子

ばあちゃんに派手目贈っていい笑顔
プレゼントよりもお前の顔見たい
それぞれの五臓六腑に処方箋
皺くちゃになるから止めたダイエット
上り下り手すりに頼る初詣で

犬山市　関本かつ子

せっかちとのんびりで組む大掃除
新札を折って紅白見てる幸
ガソリンをきょうは満タン四円安
人脈も少々あれば事が足り
穏やかと頑固に分かれていく老後

犬山市　金子美千代

裏話あって天秤にはかけず
決めるのはわたし責任も私
おみくじも易も気になりだす迷い
違う風明日は吹くかももう寝よう
また元の静けさハレの日が終る

愛知県　早川遡行

死ぬまでは誰にも渡さないタクト
どことなく男でどことなく女
一度買うと後が煩いテレショップ
七十路の弱きを見せぬ兎跳び
一位よりブービー賞が難しい

京都市　三宅満子

捨てられたテレビが開くエコ会議
酷暑厳冬それでも人は生きて行く
元旦も頭の中は五　七　五
えべっさん小さい福を頼んます
動物園の熊が幸せとは言えぬ

雛人形まだ結婚はせぬと言う
老舗の灯消えてカレー屋ラーメン屋
贔屓されるのも能力のひとつ
時計して自分のものにする時間
袋に入れると重い羽根ぶとん

京都市　高島啓子

人の道義理怠って身を縛る
家計簿の赤字いったい誰のせい
お世辞には返事曖昧笑っとく
曖昧は窮地助けて肩も押す
仕舞いにくいものは破棄する十二月

京都市　藤井文代

凧あげる父子まぶしい散歩道
子供等は他人じゃないからややこしい
白味噌の姑の雑煮は雲の上
大助かり玉子御飯の好きな人
掃除も家事もすべて七掛け私流

京都市　西村益子

常識を次次こわす世の流れ
マイペース無難な道はすぐ探す
運命の扉は強く叩いてる
実篤のなすび素直に育ってる
健康には一病大事守ってる

京都市　坪井孝一

これからは目線とバスト上向きに
こころの灯を自分で捜す好奇心
議定書がもっとオゾンをくれと言う
花が好き人も大好き多忙なり
言葉遊び楽しむ人を募集中

京都市　桝本宏子

歳を積むほど和むほろ苦蕗の薹
たい焼きが老いてますます好きになる
燃え滾る命が走る二月堂
老い最中自分を介護する気持
日常がエクササイズで健やかに

亀岡市　井上森生

直球を投げ合う友がいてくれる
筆マメなきみの賀状がまだ来ない
曖昧さ残し妄想がひろがる
曖昧な返事に飛びついた渇き
つきあいを削り食費は減らさない

長岡京市　山田葉子

日経平均株価とわたくしの顔と
紅鮭の好きな家族で寒がりで
手の届くところに水が置いてある
早くしてもゆっくりしても雑である
正正堂堂と流した涙です

大阪市　谷口義

大阪市　神夏磯　典子

ああ早春山は気力を抱いている
沈んでる空気とんちんかんの返事
ここと言う時　狸はすぐ消える
金婚を過ぎて昔の物語り
新しい空気を提げて赴任する

大阪市　榎本　日の出

お年玉渡す子減って歳を取り
いい人と言われたいから掃除する
戎さん賽銭踏んで入れました
てっちりを家で食べても旨くない
鯛よりもビフテキがよい祝い膳

大阪市　大川　桃花

不況風別居の話立ち消える
恵まれたお方最期もポックリで
孫に奮発最高級のランドセル
いいですかと大目に買わす計り売り
冬枯れの枝にふっくら芽の息吹

大阪市　板東　倫子

雪に映え文化の粋や金閣寺
工場で野菜作って売る企画
孔孟の教えが無法の国となる
醜態を極める政治家たちの乱
せり　なずな　あとは忘れた七草粥

大阪市　升成　好

いい香りかぐ時人は目を瞑る
褒められた手相に運がつかめない
顔の艶酒が足りてる証なり
同じ話そらんじるほど聞いてあげ
月並みな賛辞はいらぬ大落暉

大阪市　伏見　雅明

百グラム減ったぐらいで鬼の首
悩みごと孫の目線で聞いてやり
ポイントを少しずらせる変化球
信号を無視して渡る自爆テロ
殿さまにお毒見させる期限切れ

大阪市　奥村　五月

厳格な父が嘘つく酒の量
たまに来て諭吉と息子すぐ帰る
誰が飲むのか神社の樽が気にかかる
二度とない運は掴んで離されぬ
やる事をやれば幸せついて来る

大阪市　池上　清治

どの国の所為とも言えず黄砂来る
学業もそこそこにして就活へ
年賀状書き終え首の骨鳴らす
嘘一つ信用すべて失なわれ
残り香を振り撒きギャルが電車降り

心音が時々休みたいと言う
快気炎上げているけど泣き虫じゃ
片隅の小さな意見流れ変え
甘言に酔わずデッサン描き直す
冬は雪春はさくらはマンネリだ

大阪市　岩崎公誠

長電話口はさむ間も隙もない
生返事気付いてくれぬ長電話
ほろ酔いの足に満月遊ばれる
お正月飲んでいる間に過ぎてまい
ストーブの前に陣取る一人者

大阪市　平嶋美智子

仏壇に行って来ますと只今を
松の内ひとり居に客有難たし
晴着着て孫の仕種のしとやかに
サッパリと捨てて初売また並ぶ
ロボットに介護されたら気楽かも

大阪市　中村叙子

初春の支度が出来た床の松
いろいろあってそしてふたりの雑煮箸
少し歩けと空からのメッセージ
ストレスの海で溺れてしまいそう
こっそりと人生仕舞支度する

大阪市　小泉ひさ乃

ほどほどの雪とツララの高山路
最高のサービス食事二連泊
旅三日ウキウキさせるしめ飾り
絶景でペンを走らす雪あかり
三ヶ日姉妹で過す雪景色

大阪市　津守なぎさ

一月になっても同じ民主党
半年もすれば寒さを恋しがる
成人の日コロコロ変わり威厳なし
火曜日の四日の初出ちとつらい
平成の兎跳ぶことを忘れ

大阪市　井丸昌紀

あの人とは水と油を保ってる
雪どけはいつのことやら妻無口
一刻もん損をしたって尾を振らず
おかげさま人間ドック平均値
水よりも第三ビール安いのだ

大阪市　江島谷勝弘

子や孫で賑わったのもつかの間だ
正月が明ければ眼科行く予定
雪景色求めて旅へ行く話
休刊の手持無沙汰に淋しさも
冬ごもり夫が器用にミシン掛け

大阪市　松尾柳右子

大阪市　坂　裕之

どちらかになびけば楽に行けたのに
夜回りの疲れを癒すコップ酒
愚痴ってる次は自慢の歌が出る
ゴミの日はちょっと妻から頼られる
真面目さかツキも味方に引き込んだ

大阪市　小糸昭子

暑と書いたどうして迷じゃないのかな
震災の今年も刻む石の碑や
今年こそ大きな耳が役に立つ
抜け穴があった世界の長寿国
長生きは決して美徳じゃないようだ

大阪市　澤田定子

年始め挨拶交す回覧板
棚飾り虎を追い出す白兎
㊙情報守れなくなるネット網
カップルで福笹かかげ明日に向く
温もりのニュース次々伊達直人

大阪市　田浦實

立読みであれこれ覗く卯年運
はやぶさの健気さ国の誇りです
D51の残す煙が愛おしい
タイムマシン乗っているよな映画村
風の中揺れるコスモス艶っぽい

大阪市　榎本舞夢

母介護素直な気持忘れずに
派手な顔利用してます稼いでる
松竹座昔の晴れ着出かけてる
厄除けやポックリ寺と忙がしい
商店街早早流す雛ソング

大阪市　原田すみ子

継続は力と信じただ愚直
冬最中老いは確かに加速する
白い歯を見せる笑顔に油断する
手料理と好きなお酒で溶かす芯
マリオネット恋の魔法にあやつられ

大阪市　近藤正

古希過ぎて少し素直な顔になる
あかつきが春を報せる彬の碑
脈拍が一瞬止まる大勝負
ランドセル善意の灯りいつまでも
千年を結ぶ松明二月堂

大阪市　吉内タカ子

紅白の南天活けて運かつぐ
ろう梅の春を呼ぶ香の庭に立つ
デイサービス作る兎も嬉しくて
不況風いき切れします御大臣
好奇心わいて嬉しい勇み立つ

宝くじ夢見て夢の整理する
うさぎ年景気もピョンと上向きに
初笑い鏡に作り笑いする
年金で楽しむ暮し儘ならぬ
初体験アンケートには無記名で

大阪市　寺井弘子

ドクターが禁酒を解いたさあ飲むぞ
肝臓が酒を寄こせとサイン出す
入院中キープのボトル期限切れ
ベッピンのナースさんほど事務的だ
消化器系ＯＫ出たが脳は未だ

大阪市　佐藤忠昭

気が付けばその時すでに認知症
口に指噂の主が傍にいた
どなたにも素直になれるありがとう
カレンダーにメモしたことも忘れてる
町中が迎えてくれた過疎の嫁

大阪市　山本加お里

咲く花にまったをかけている寒さ
好感がいつか尊敬へと変わる
介助歩行手のぬくもりで知る心
避けられぬ老いと向き合う雛飾り
叫ぶエコどこかに無理もありそうだ

池田市　栗田久子

大木の天辺めざすかたつむり
賛成も顔色を見て殻の中
独りの夜酒だけ味方してくれる
入門書だけを並べて悦に入る
写経して励みをくれた友が逝く

和泉市　横山捷也

足の裏我慢我慢を強いられて
耳遠くなって卒寿のめでたさよ
白々と乾盃にノンアルコール
罪と罰読む米櫃を満たした夜
この国へジャンヌダルクよ出ておいで

泉佐野市　山本蛙城

三役は家族で占める町工場
甘酒の太字に負ける万歩計
隣の子よく叱られて逃げ上手
定年で原点土に戻る父
さすらいの旅を癒やされてる地酒

茨木市　藤井正雄

左遷地の水が合いだす三年目
愛着の湧く頃辞令出る我が家
甘言に乗るなの教えマニフェスト
満面の笑みで政治家嘘をつく
愛犬の目だけが僕を裏切らぬ

茨木市　島田誠一

大阪狭山市　矢野　梓

卯年歳相応に跳ねてみる
暖かい記事を探しているルーペ
座布団へ子等温もりを置いて去に
ヘルシーと聞けばついつい食べ過ぎる
同じ事言ったり聞いて二人住み

交野市　森本弘風

線香の煙に咽せるジャンボくじ
仏壇で無理聞かされるジャンボくじ
老い二人それぞれ思う百八つ
初詣で今年も吉と鈴を振る
あと三年父越えるぞと初詣で

河内長野市　井上喜酔

一日を大事に生きて行く八十路
母校から縁の切れない寄付が来る
大寒の屋根で堪えてる鬼瓦
信心の声とカラオケ別な声
童心でグランドゴルフ球を追う

河内長野市　村上直樹

マニフェスト素直に聴いたお人好し
夕茜必死に駆けてきた記憶
ケータイもオフ雑踏の渦の中
卯年こそ清水寺に楽一字
鴛鴦の契りそのまま比翼塚

河内長野市　坂上淳司

入院の前にしっかり飲み歩く
看護士の馬鹿丁寧語にはまいる
オペ前の説明マスク外したら
子羊のように待ってる手術の日
へしゃげてる顔見られたくない術後

河内長野市　黒岩靖博

手作りのカバンが語るプロの業
露天風呂富士の山から初日の出
露天風呂ひと汗流し句の世界
百歳も自慢出来ない長寿国
多種多芸一寸おちゃめな器量よし

河内長野市　水谷正子

初歌舞伎今年一年オーラくれ
何遍も賀状を整理また整理
一人暮らし賀状も生きてゆくビタミン
一人暮し箱根駅伝二日観る
行く虎に名残を惜しみピョンと跳ね

河内長野市　植村喜代

老人に歳はない若く見え老けて見え
無心に遊ぶ孫に淋しさを感じ
人生とは思わぬ道も歩いてる
ロボットに負けないように歩きます
戦争は嫌い青春時代取ったから

岸和田市　雪本珠子

冬将軍雪を土産にやって来る
長寿国ペットも寿命のびている
頷いて愚痴聞く夫が居てくれる
衣食住足りて魂抜けている
嘘つかぬ猫と唯今同居中

岸和田市　井伊東吉

猛暑から厳寒切換えままならぬ
便利だが電子書籍に温みなし
超安値客心配の旅チラシ
与党内内紛民は白けてる
菅と伊達同じ直人も人気別

岸和田市　原さよ子

知恵袋そろそろ底が見え八十路
ライバルへ老いてももえるものを持つ
手垢つく辞書私と古びゆく
失意の日亡夫の顔にいたわられ
ばあちゃんの買物メガネ二つ持つ

岸和田市　堤楢代

チヨット好き執着するのやめとこう
七草の粥で戦後を思い出し
思い切り歌いとばしてリフレッシュ
人工の膝で歩けるありがたさ
八十路です開きなおって生きてゆこ

岸和田市　土橋房枝

愛するより愛されること好きらしい
友と行く旅が楽しいらしい妻
留守電にまちがい電話笑い声
メロドラマ孫と一緒で落ちつかず
憧れの人抱くセピア色のまま

岸和田市　森元ふみよ

賀状出しほっと束の間訃報聞く
棒鱈が好きな亡夫と祝う節
年賀来た絵日記風が新鮮で
新春の駅伝観れる平和な日
節料理知らずに亡母の味となり

堺市　志田千代

流し雛助け求める声がする
補聴器に向かって話しています
洗濯物父の流儀で干してある
筆不精ですがお便り待ってます
カレ―好きこの子にはまだない秘密

堺市　加島由一

日本晴れ何かいいことありそうだ
七草がすめば恵方巻き勧められ
歩けるうちは歩けと百舌が鳴いている
不景気と男の嘘は慣れている
マドンナのために男を磨いてる

堺市　和田つづや

まかないも稼ぎも妻の手にゆだね
嫉妬心知らぬ妻です裏切れず
来世もきっとお前の寝息聞く
寝込まれて妻に花丸あげる気に
君と僕花に箒があるように

堺市　宮本かりん

約束の場所へ笑顔が集まった
したたかに八十路へのぼり出す足よ
一枚の写真が時を止めている
ビルが建つ遥かの山を消しながら
幼友から心豊かになる便り

堺市　奥時雄

一度だけならの甘さが命取り
四人目を悪口で待つマージャン屋
五人囃子以下省略の雛飾り
七回忌故人も肴にされだした
パーフェクト八回までの人間味

堺市　矢倉五月

夫との約束破るのは平気
お帰りと毎日孫とハグしてる
こころにも疲労骨折きた気配
固めたらコーヒーゼリー片想い
メール往来たちまち近い人になる

堺市　西村りつえ

情熱の師追えば追うほど高い峰
はなやかな桜に負けず匂う梅
シナリオでは肩の荷下ろし差し向い
膨らみに胸が高鳴る桜守り
青年の木大樹の陰で伸びなやみ

堺市　源田八千代

梅園に目白みつける散歩道
得得として自分史を語り継ぐ
物忘れと無気力な日々加速する
割り切って見返りちゃんと貰っとく
事始ウォーキングに仲間入り

堺市　山本半銭

白い絹少し翳って好きな味
井戸水の旨さふるさと有難い
お土産の行き渡る頃御登場
登場の拍手制する馴れた手で
先生が忙しそうだ政変か

堺市　荻野像山

焼酎飲んで血がさらさらのおまけつき
マンネリ化防止へちょっと隠し事
危機一髪傘を斜めにやり過ごし
熱い灸利くと思って堪えている
あっつい割に利き目が見えぬ灸もある

堺市　大隅克博

雪とける頃は干支など忘れてる
昨年と同じくらいのお賽銭
老人の域に遠いが古希祝う
れんこんの穴はいくつで揉めている
平等と区別の違い弁える

堺市　大久保　のん子

鳥かごの中で騒いでいる私
私の指先にいた青い鳥
宿命の枷引きずって生きている
頭よく顔よく人柄よいなんて
音たてて返らぬ時が過ぎてゆく

堺市　遠山唯教

萌え木からゆずり受けたいエネルギー
断捨離ができずに迷路でられない
友と酌みこころ通わす有り難さ
くしゃみしてマスクの顔に睨まれる
言い訳に追われ次の手まわらない

四條畷市　吉岡　修

行く先は後で閻魔が書く切符
嫌われているらしいのに憎めない
戻れない仲ではないと信じてる
楽しくて養生訓もそっちのけ
リストラと言う平成の人柱

吹田市　山本希久子

三月の天雛人形も笑う
三月の息吹虫にも花芽にも
考えた揚句誤作動してしまう
冬眠の森に軸足置いたまま
詫びに行く長い廊下を歩いている

吹田市　太田　昭

一年の計ひとつ減らして去年今年
妥協癖わたしの影を薄くする
過去の罪清算をした再生紙
天声人語読み今日一日が明ける
数列から抜けて孤独死したと言う

吹田市　須磨活恵

二〇一一新しい仮面つけ替える
耐えること諭すがごとく冬木立
水仙に真冬の優しさをもらう
落ち椿落ちても命赤々と
吹く風に逆らわぬよう生きてゆく

吹田市　野下之男

あの人に近寄れなかった遠い恋
二米歩いた孫の得意顔
子供等は分教場で愛を知り（二十四の瞳）
兎なら跳ねて行け行け油断すな
オウムさん何か一言お正月

吹田市　瀬戸　まさよ

天才はまだその上に努力する
わが青春戦中戦後くぐりぬけ
人生は天の配剤納得す
正直で平凡でした慈父と慈母
品のある和菓子日本の文化です

吹田市　大谷　篤子

変らない優しい音の鳩時計
吹っきれて何だか違う陽が昇る
雑音に囲まれ生きてまた楽し
ときめきを隠して浅く腰かける
待つことになれて川柳作句する

吹田市　木下　敏子

戎さんに福を貰うたような顔
もう少し頑張って見る墨を磨る
晩学の線やわらかに五七五
ほどほどの好奇心抱き散歩する
不景気に転ばんように亀になる

高石市　浅野　房子

姉いもうと連れ添う人による格差
クロスワード解けず眠るに眠られぬ
商品知識皆目でしたバイトさん
ジョン・ウェイン昔見ていた西部劇
手からポロリ転げた宝戻らない

高槻市　指宿　千枝子

忙中の閑ゆっくりと熱いお茶
一年の私を洗う除夜の鐘
日本語で東大寺への道を聞く
ぶらり旅米原辺り雪景色
隣席で近江牛弁うまそうに

高槻市　片山　かずお

喜んで君の虜になっている
ゆったりの所作に気品がでる茶室
ケータイのメール秘密の花園に
子を語る女は母の顔になる
大阪の街だ豹柄闊歩する

高槻市　乙倉　武史

二兎追った愚か今更悔いながら
七草粥欠かさぬ頑固卒寿すぎ
戦記読むせめて背筋はシャンとして
テレビ漬け炬燵居眠り夢の園
老いぬれば日にち薬でのんびりと

高槻市　杉本　義昭

ケイタイが無言の街に変えて行く
だるそうに水の流れを聞いている
雪国のストーブがんがん焚いて白
水が出て異国の村に笑顔湧く
御し難い妻が財布を握ってる

戻せない時計の針が人生よ
プライドは捨てて見果てぬ夢を追う
懸命に生きたあの頃ゲゲゲのゲ
喜怒哀楽心を映す雲の形
エンディングノートに夢も書いておく

高槻市　峯村勲弘

極限を支えてくれたパンの耳
山茶花に過ぎし一年問うてみる
天はまだ必死を見捨てたりしない
生傷や恥辱にも耐え生きている
手を焼いたペットに老後癒される

高槻市　富田美義

何故かしら心に響くハプニング
生温い態度がいらいらかき立てる
頷いて相手を立てる思いやり
木枯しに背なを押されて登り坂
寝返りを打つ潮時がむずかしい

高槻市　左右田泰雄

軽い嘘のつもりが空気重くする
一振りにかけた代打の血が騒ぐ
妻に投げたボールなかなか戻らない
イチローのバット原点外さない
つまずいた石から拾う打開策

高槻市　佐甲昭二

十二月家と心の大掃除
正月をひかえて歯痛酒禁止
ケースから抜け出た阿修羅嬉しそう
テレビ壊れ時間得した一ヵ月
顔忘れかけた人から来る賀状

高槻市　安田忠子

風花の舞う道続く神詣で
葉牡丹のどっかと家を守るごと
大正と昭和平成生きた今日
妄念を断てぬ愚さ自嘲する
老人会九十二ですと明日語る

高槻市　井上照子

落葉の終りを見届けて掃除
風呂掃除昨日の愚痴をまた見付け
百均の眼鏡で注意書を読む
ええ歳をして言われる黙ってる
骨粗鬆とぼとぼ歩きしてしまう

豊中市　江見見清

元旦も五時起きをして風の中
弱気になる自分を試す朝歩き
四年生ひとりで空の旅をする
久し振り孫の好物取り揃え
眠ってた私の腕の見せどころ

豊中市　松尾美智代

豊中市　安藤寿美子

南天のひとつぶづつにあるしづく
自己主張せずにその日の風で生き
棺ではやさしい人形になろう
水溜り迂回するのも知恵である
毎日がこの冬一番の寒さです

豊中市　藤井則彦

気の毒にみっともないを知らない子
横道に逸れる話で盛り上がる
支持率も下がると怒り難くなる
毎日が日曜なのに休めない
吸殻が未練がましく出す煙

豊中市　松村里江

豆台風孫は来てよし去んで良し
覗くだけと馴染の店に行ったまま
走ったら息切れをする鬼となり
特別な日でも無いのにおしゃれして
ときめきを重ね重ねてまだ枯れぬ

富田林市　井上じろう（次郎改め）

息を呑む今擦れ違った横顔に
ショットバー昔馴染が消えてゆく
遊び人臨機応変才気あり
野晒しの五百羅漢に見つめられ
経済の先を読み切るリッチマン

富田林市　片岡智恵子

ピョンピョンと飛躍の年になる予感
地デジ地デジせかされて買うテレビかな
日向ぼこ日時計の針のごとくに
老いて今一年の計立てられず
ワープロの賀状に顔が見え隠れ

寝屋川市　森茜

一筆箋じわっと涙ぬくくなる
無人駅降りて氷雨のひととなる
寒の月ポストもぽつん　わたくしも
孫のような歯科医に抜歯されてくる
自転車に突進されたゴミ袋

寝屋川市　森田麗

飛び跳ねる人の尻尾にしがみつく
初暦句会の日には二重丸
仏前の小豆雑煮にある回顧
三箇日一年分を喋る母
年金がサイズを変えた鏡餅

寝屋川市　冨山ルイ子

頑固だと言われびっくりしてしまう
頑固なの自分ではわからぬものだ
いいないいな今年も元気翔んでいる
もう八十まだ八十と翔べそうだ
わたくしは幸せものと思う日日

寝屋川市　平松　かすみ

ドクターに早々診せる足の裏
ありがたい社協で借りる車椅子
おひな様風だけ当てて お箱入り
へそくりが目減りしたまま春が来た
えびすさま　あなたに似てる両の耳

羽曳野市　酒井　一壺

恩返し果たすつもりの吾が臓器
天衣無縫持って生まれたよい笑顔
ミニカーで颯爽と来る同期会
ラブレター何度も練ってこの程度
吾が家族タバコは誰も吸いません

羽曳野市　徳山　みつこ

「てっぱん」が私の朝をあたためる
雪の下でうずうずしてる蕗の薹
ぐいぐいと凧よろこばす向い風
懐かしい声が聞こえる喪の葉書
忙しいと私ごときがいうでない

羽曳野市　吉村　久仁雄

座禅半畳宇宙の旅に行くとする
廃村をもう山脈は数えない
書を捨てて電子ブックと街を行く
ずぶ濡れの男に過去がまといつき
錆びたピン一つに命ぶら下げる

羽曳野市　三好　専平

駅前はみな廃屋となりにけり
働いた挙句の果てを絞りとり
屈原のように剛毅に生きられず
大根が威張るお節の漆箱
中国はそのうち泡を吹くだろう

羽曳野市　福田　悦子

私にもあった合格待った日も
ばたばた劇続く予感する今年
冬将軍似合う山茶花今日も咲き
ガタガタの体で空気吸うてます
神頼みやめて今年は実力で

羽曳野市　安芸田　泰子

急がぬよう止まらぬように少しづつ
絵馬堂に親の野心が揺れている
春の陽に猫とひねもすのたりかな
通り過ぎる足音ばかり夜の冷え
マニキュアの爪を庇った無洗米

羽曳野市　永田　章司

単身赴任久久の家温かい
マニフェスト信じた僕はお人好し
原因はあやふやにして尻尾切り
家を捨て孤陋に生きる青テント
富士山頂自然に拝むご来光

東大阪市　米田水昇

絵馬ゆれる人間模様ぶつかって
就活と入試婚活絵馬せわし
七草の名前覚えた孫をほめ
孫作るマフラー首にあたたかい
膝ぎいぎい泣くのは眼だけでよい

東大阪市　佐々木満作

近頃は名札を付けてウォーキング
ウォーキング妻とペースが合わぬ靴
暦から暮らしの術を学んでる
突然にある日あなたは風となり
こつこつと春の足音大地から

枚方市　寺川弘一

呱呱の声もう幸せを求めてる
故郷を持たぬ男にあるドラマ
丸い地球で躓いてよく転ぶ
アリアにも艶歌にもなる女の心
魂は胸の一番真ん中にある

枚方市　丹後屋肇

最果てから届く八十円封書
濃い霧がプラトニックにけしかける
初詣ぴんぴんころりぴんころり
押し入れの中で自惚れているテナー
雪便り諸手を挙げるスキーバス

枚方市　伊達郁夫

焼酎で今日の怒りを中和する
やさしさを足して空気を動かそう
八合目風の形が尖り出す
クツクツと話が欲しいひとり鍋
言い訳はしないと決めた青いバラ

枚方市　小林わこ

ノックするおかえりの声聞きたくて
親離れすっかりしたね　ふとひとり
洗濯機だんだん仕事減らす音
病室の花きらさぬように行く見舞い
帽子掛け亡父の匂い残してる

枚方市　安達忠央

人並みに山あり谷を生きて喜寿
鬱憤をマイクで晴らす三次会
しょげてたら手相がええと励まされ
つきたての美味さがすべてお餅つき
横になりラジオ鳴らすと寝てしまい

枚方市　二宮紫鳳

初詣で孫とおみくじ日本晴れ
迎春をお重に詰めて笑顔待つ
墨の香を秘めて清やか筆美人
子や孫が大騒ぎして三箇日
卯の年へウキウキうれしい新年会

今年こそ夢を勝取る猛げいこ
お隣の庭へ気がねのつるがのび
マイホーム遠い昔は考えず
欠点を見せぬ男に罠がある
一秒の壁の厚さを知る時計

枚方市　二宮山久

幸せを少しうすめて使ってる
夕焼けの空に繋がるエピソード
形にはなっていないが幸福論
昔噺が好きざざんかの垣根
ドキドキしたあの日の毒を探してる

藤井寺市　太田扶美代

ほっこりとしてます自慢の縁側で
沢山の親切貰い預金する
月命日ようおまいりと和尚さん
蝋梅がほのかに香り亡母偲ぶ
古希すぎて兎六羽目飼いました

藤井寺市　増井ヨシ枝

宇宙旅行楽じゃないよと月笑う
いい話聞いて階段リズミカル
着ぶくれを風も笑うよ霜の朝
きな臭い風は北から吹いてくる
家の者誰も知らないパパの芸

藤井寺市　津田シルク

二十二年不思議なことに守られて
元旦におとその替わり飲む梅酒
耳立てて情報キャッチうさぎ年
離婚して逞しくなるお母さん
長旅終えて悲しい鳥インフル

藤井寺市　吉田喜代子

初詣人の背中を見て進み
明けまして何も変りの無い家族
一番におめでとう言う孫の声
七草の雑煮に餅を入れている
神社と仏閣梯子して回り

藤井寺市　伊藤アヤ子

初詣で福のおこぼれだけ貰う
天寿生き柩の中のえびす顔
誰か買わないか私は浮動票
悲しみと安堵介護の母看取る
あちこちの綻び縫ってまだ夫婦

藤井寺市　鈴木いさお

顔のシミ古稀の勲章だと思う
同郷の夫婦ですべてお見通し
困ったな割るのはいつも高い皿
買いことば私も少し言い過ぎた
ワンチャンス決めて嬉しい玉の輿

藤井寺市　俣野登志子

藤井寺市　若松雅枝

親友も老いては賀状だけの縁
ロボットに介護頼んで一休み
腰痛で畳拭くにもコツがある
足腰が痛んでからのスクワット
怒ったら女が廃る深呼吸

箕面市　出口セツ子

不況度を晴れ着の数ではかってる
不安払うみくじひいたら凶が出た
誕生日生まれてくれて有難う
子が元気だけで幸せだと思う
愛する子居るから無敵なる暮らし

箕面市　広島巴子

御鏡は月の兎に頼もうか
久し振り昆布巻作り自画自讃
大らかにさっと済ませた大掃除
冬眠をしたくなるよな事件事故
冴え渡る夜空に定め問うてみる

守口市　井上桂作

お正月千の車が夜をあかし
おひまです隣の分もお買物
鶴受難その数万余救わねば
考えぬ葦にゆとりの教えでは
明日やろう明日になればまたあした

八尾市　宮﨑シマ子

正月早々風邪とめまいの乱気流
救急で行った割にはよく食べる
何故だろう昨日見た字が今日読めぬ
喪中にも賀状嬉しく頂いた
負け犬になりたくなくて別の道

八尾市　内海幸生

しがみつく葉に木枯しの毅然たり
足の爪つんでる背を写すまい
木守柿鳥にやさしく旅終える
友の訃へ朱線を引けぬ住所録
除夜の鐘聞き終え煩悩そのまんま

八尾市　寺川はじむ

新規採用もう決めましたロボットに
人生のカルテどっさり載る汚点
ロボットが欲を備えた日の恐さ
人間の欲が生み出す温暖化
原因は雀の涙ほどの嘘

八尾市　村上ミツ子

動物園うさぎの部屋が騒がしい
デューラーの野兎脚光を浴びる
いばら道怯んでいては進めない
白を足すきっとやさしい色になる
尾道焼きを食べてみたいと思う

一笑に付され本気と言い出せず
天使の指がそっとつまんだ乳ボーロ
ひょいひょいと訛りはじける電話口
表面張力がんばっている空元気
刺激欲し伸びた輪ゴムのような脳

大阪府　米澤　俶子

新年の大空仰ぎ見るこころ
ぼんやりとしてる茶の間の小宇宙
寒風につつがなく立つわが寿陵
先き立たれる時の覚悟はできている
あんたより一日遅く逝くという

大阪府　籾山　隆盛

老いたとてこき使われているが華
半世紀過ぎて面影連れて来る
全神経足へ雪道初詣で
法事の席ここぞと先祖説く僧侶
元気ねと言われ嬉しい自分色

大阪府　野田　栄呼

何もかも嬉しくなって初日記
寄せ鍋に喜怒哀楽が浮き沈み
屠蘇酌んで笑い上戸の父になり
殊更に畏まってる初法話
父と子の絆が伸びる凧の糸

大阪府　桑田　ゆきの

家計簿に目隠しをして十二月
山ほどの薬と越した大晦日
元朝にたった一つの餅をやく
忘れるは天の恵みにちがいない
新年の計決めかねてケセラセラ

神戸市　木村　貴代子

仕送りは三人ですとホホホノホ
見栄と義理夫婦がバトルのし袋
成人式票がぞろぞろ並んでる
天下回る金がそばまできて止まる
赤提灯雑魚には雑魚の自負がある

神戸市　伊勢田　毅

おみくじは凶御意のまま御意のまま
犬知恵に負けて笑うている平和
埋蔵金もへそくりもなく独り住む
秘めごともそうでないことみな忘れ
カレンダーに明日の予定をきいて寝る

神戸市　山口　美穂

ぎりぎりへ輪ゴムのように耐えている
補助輪を頼りきってる意気地無し
何もかも許して残る深い疵
逃げた魚今更嘆くことはない
セットした目覚し二つでは足りぬ

神戸市　山口　光久

信じてるニッポン人の底力
鮮やかに上がり凧糸ゆずらない
山女から釣女へまずは衣装から
あの人の家族自慢が始まった
遺骨収集かたちばかりの菜っぱ服

神戸市　田中章子

自分らしく生きて夕餉の旨い酒
大家族今日もやっぱり鍋にする
階段を上って一つ物忘れ
人間がペットに学ぶこと数多
終電車女の座る席がない

神戸市　山田婦美子

止まっても泳ぎ変えないから元気
鮮やかな記憶平和を語り出す
マイカーが家族の歴史物語る
叶えたい夢ポケットに蒔いておく
祝い箸名前並べて待っている

神戸市　早川孝子

いっぱいの汗だリハビリできる幸
尖閣の沖にきれいな陽が昇る
母の座に老母座らせて小正月
片想い吹っ切り傘の雫きる
頂上を極めて男寡黙なり

神戸市　山崎武彦

針の穴のぞけば母の顔が見え
絶叫の裏にひそんでいる平和
血統書付きにもやがて死を迎え
温暖化四季を忘れて黄砂降る
人生は攻めから守り八十路坂

相生市　中塚礎石

持てぬほど愛を受けてもまだ足りぬ
言の葉に色付けしたい京の暮れ
泡銭一夜を舞って飛翔する
老人の海へ課税の網を打つ
食物の旬が分からず季語に聞く

明石市　糀谷和郎

痩せるのは無理かもしれぬ親ゆずり
納得をするまで生きてみるつもり
夫婦でも力加減のいる暮し
波風も立てずひとりの立ち泳ぎ
見て見ない振りであなたを許します

芦屋市　黒田能子

御来光シャッターチャンス待つ鼓動
背を押す君がいるから今がある
自家米が誇りをもってVサイン
陰と陽回り舞台にある浮世
喜びは仏といつも分ち合う

芦屋市　竹山千賀子

尼崎市　加川靖鬼

戦場のカメラマンだが慌てない
必殺のボレー軽うに流される
すてて捨てても雑念は湧いてくる
頬被りさせて案山子を眠らせる
縄張りの違う薬を持ち歩く

尼崎市　春城年代

卒寿の齢奮い立たせる初詣で
初夢に今は昔の揃う顔
祝い膳出すも仕舞うもひとりなり
華奢なヒールとちさなブーツの来訪者
シクラメン一鉢娘の優しさよ

尼崎市　長浜美籠

雑念を払いかねてる猪口ひとつ
この辺でよかろうドロップが溶ける
曖昧に妥協はしない寒の月
迷うたら頼みまっせと鐘たたく
視点かえると湯呑み一つも捨て難い

尼崎市　林昭三

生真面目に勤めのように医者通い
手伝えた暮れの掃除と松飾り
それからと作り話の第二幕
一人住み南の窓辺福寿草
幸福を日本に求め渡り鳥

尼崎市　軸丸勝巳

大晦日天は清めの雪を撒く
手に取れば手書きの賀状語り出す
七草を食べてお腹もひと区切り
楽隠居居った昭和が欲しい今
大丈夫まだ病院に行く元気

尼崎市　山田耕治

好きなことしてても無理は利かぬ年
大晦日来年こそは温泉で
めし付の留守番どうぞごゆっくり
冬眠中新聞だけは取りに出る
お客様ここは電車の寝るところ

尼崎市　藤岡りこ

緊張してるな貧乏ゆすり始まった
屈まずにすむ靴べらを長くして
戦の神今イケメンの阿修羅像
太陽に逆らって根は伸びていく
孫帰る床に車輪の跡残し

伊丹市　山崎君子

胡蝶蘭寂しい正月主は留守
腰痛で新年迎える病室で
初風呂を看護師さんに抱かれて
駅伝優勝亡夫と歌う早大歌
宝塚ラインダンスで新年を

道の駅地産地消の味がする
真相が発覚前に示談金
ときめきが若さ維持する秘訣かも
冗談が通じぬ夫とすぐ喧嘩
怒りんぼ飲むと話がくどくなる

加西市　金川宣子

花の苗選りつつ春を組み立てる
思い出を温めながら書く便り
打ち明ける決心ひょいと交わされる
赤ん坊両手に未来がっちりと
越えて来た年の苦労を皺が言う

川西市　米原雪子

冗談か本気か知らぬ棘がある
ゴキブリがぞろぞろと出る家に住み
枯葉舞うベンチで煙はいている
躓いてひやりとさせている段差
乾上がった皿にお酒を待つ河童

川西市　西内朋月

還暦は男盛りであったよなあ
詩人には遠くて鉛筆また削る
勲章はお好きでしょうか閻魔様
招き猫肚空っぽで愛想よし
猪が出る山へ携帯ラジオ行く

三田市　北野哲男

除夜の鐘百八つでは足りませぬ
カネとヒマ両方揃ったことがない
カミソリと言われた人も呆け始め
ダイエット入れ歯合わなくなってきた
本気だな大阪弁になってきた

三田市　堀正和

踏台に上がる仕事を子に甘え
年初め亡母の歳を追い越した
お煙草の値上げ関係ない夫
氷張り気も張る今日の寒さかな
半年も会っていません隣でも

三田市　石原歳子

逆境と知って素直に受け入れる
前世に何があったか知るもんか
厄年とかいろいろいうが関知せず
強がりかこわいか余命考えず
あの程度の悪が響いてたまるかい

三田市　臼井二英

寒いけど春を伴う冬が好き
無駄遣い諌める妻の長電話
一人っ子喧嘩のルール知らぬまま
先思い一人遊びに慣れておく
古希の誕生妻子何んにも言わず過ぎ

三田市　福田好文

西宮市　西口いわゑ

しあわせを掴んで欲が倍になる
一言の暗示でペンが走り出す
窓の月独り占めして詩人たり
同感はするが同士にはなれぬ
忘れたいことが炎のようになる

西宮市　亀岡哲子

痛いとこできてしんどいこと忘れ
忘れたら脳の隙間へ知恵詰める
あらましはえんぴつで書くマイライフ
元気なこともおまへんけれどまあ元気
幸せ度計る定規にない目盛

西宮市　藤本直

本年も一字は健としたいもの
健康の印に不満ぶちまける
陽溜りにペットの顔も春めいて
書けるかな五年日記の前に立つ
蛇口から春の温みが流れ出し

西宮市　秋元てる

春よ来い老いには老いの望み多多
師の「望みなきに非ず」に従いて来た
底抜けのはしゃぎに匂う最後かも
知らないとその一言が言えなくて
ルビなしで読めぬ名前に親心

西宮市　片山忠

山ほどのカードはあるが銭がない
人通りまばらで食ってゆけますか
子育てを放棄するなら子を生むな
靴見ただけで貧乏人とは限らない
ぜったいに上って来れぬ落し穴

西宮市　緒方美津子

ひびき合う趣味一つあり嫁姑
コンビニのおかず並べてすみません
一駅がながいにんにく臭の横
桜の樹もう燃えている小正月
濁りなき色心して使いたい

西宮市　牧渕富喜子

素直がいい素直にならう年始め
大根をたっぷりおろし七日粥
ふっ切って今を傘寿の点とする
簡単に答出せないから　その他
許せない事もあるけどよく眠る

西宮市　足立茂

タイガーマスクよ日本も捨てたもんじゃない
餌代が酒代に化け止めた釣り
カマトトが大事なとこで仮面脱ぐ
経験が生きてピンチをしのぎ切る
神風を期待して飲む明日は明日

西脇市　七反田　順子

フレッシュな年を迎えて奮いたつ
珍味だと手抜き覚えて御節買う
水仙花ふっくら乙女の装い
急ぎ足道路工事が旗を振る
分水嶺越えてあなたの町に行く

姫路市　古川　奮水

師走だな第九奏でる音楽堂
ど真ん中炬燵囲んでお正月
餅も良ししっとりとしたケーキ良し
紅白へ地デジに変えて大晦日
健康で平凡ながら年明ける

奈良市　米田　恭昌

不況下にほくほくしてるのは誰だ
アンケートまあ満足と小市民
的はずれの毒舌ひっこみがつかず
じいちゃんのニヤリはきっとおもらしだ
健気にも生きる覚悟の呱呱の声

奈良市　天正　千梢

早出する仮面をふたつ持って出る
とは言うもののこの杖のありがたさ
そう言えば長らく波の音聞かず
丑三ツ時よからぬ事を考える
鬼退治カレンダーにしるしつけ

奈良市　辻内　げんえい

中露には一島たりと渡せない
孫にまだ漢字の読みは負けません
派手な服無理やりボクに着せる妻
選挙のない静かな年を祈る除夜
通販の深夜テレビで寝不足に

奈良市　阿部　紀子

箱根駅伝見れてわくわく生きる幸
長崎は龍馬一色町おこし
久し振り飾ってあげようお雛様
元旦にやっと揃って写真撮る
ドル安の今オーロラを見に行こう

奈良市　岩本　浩二

半世紀経って空気になる夫婦
子宝に恵まれ嫁はでかくなる
プライドが渡る世間を狭くする
あれやこれメモが私に指示をする
傘寿越え後はおまけだケセラセラ

生駒市　飛永　ふりこ

いい天気チャレンジ抱いて兎跳び
君の通りすると我に顔がない
カイロ貼りわたしの鬼が冬籠り
格安のツアー寒波の落ちが付く
ボランティアわたし自身を試される

大和郡山市　坊農柳弘

沈思黙考自分探しの春遍路
ためらいが過ぎて主張が風化する
ピアノソロおぼろ月夜のノクターン
恋は未だ言葉に成らぬしだれ梅
お水取り春一番を誘い出す

奈良県　渡辺富子

君と来ていのち寿ぐ初日の出
潮満ちて沖へ漕ぎ出す夢がある
美しく咲いて満ちてくる余生
ひとりの闇覚悟できずに手を握る
突然にひとり芝居の幕が開く

和歌山市　古久保和子

球根が眠っていますお静かに
中学の頃からずっと同じ辞書
お笑いのテレビに消化不良する
冬将軍へカイロを貼って立ち向う
留守番はタイマー掛けた炊飯器

和歌山市　田中みね

のんびりといとシンプルなお元日
旦那との出会い知りたくないですか
寒い時に寒い話をせぬように
取るに足りない事で揚げ足とりに来る
言うなればあなたのそこがお節介

和歌山市　松原寿子

闇のトンネル抜け春色を掴み取る
乾杯をするとグラスが朱に炎える
真心に触れた冗談だったかも
到達点ないまま途中下車をする
ハンドルを君に任せてリラックス

和歌山市　武本碧

耳うちをされて五感がうずき出す
決心が午後には鈍る迷い癖
人柄を買われ引立て役になる
残り時間笛を吹こうか踊ろうか
太陽がいっぱいこの道に決める

和歌山市　喜田准一

妥協点互いの知恵が活かされる
穴掘って男の愚痴を埋めている
逃げ道を断って行く手を切り拓く
皮肉っているな案外小者だな
ふたりだけ住んであれこれ行き違い

和歌山市　堀冨美子

ファミリーが揃う幸せ屠蘇の膳
馬耳東風捻子の緩んだ身の軽さ
ファッションのバーゲン狙うまだ女
子や孫に甘いと思う気前よさ
鳶が鷹生んだか孫等の美しさ

振り袖へ景気回復頼みます
わたし亀兎を追って生きていく
隠れんぼ鍵が居たのは靴の中
深呼吸寒気を中に殺菌す
むくむくと何処にでも湧く人のエゴ

和歌山市　岩本美智子

福餅をかばんに入れて出る句会
前をいく君の面影追って生き
生きがいにやっと見つけたひとり旅
紅葉に無我の境地になれた旅
紅葉に負けぬ七彩散歩道

和歌山市　松尾和香

頭の隅に川柳の目の羅針盤
どうでもよいと思えば塵が溜まり出す
昨日を挽回したくて今日の靴磨く
黙秘する喋れば誠澱むから
タイガーマスク善意の小石拡がる輪

和歌山市　坂部紀久子

0点をとる勇気など更にない
見るものの全て燃え立つ二十歳
値段ならあってないよな宝物
段取りがテキパキ決まる雨上がる
滝壺に打たれて石も耐えている

和歌山市　上田紀子

小一との遊び本気を教えこむ
響かない太鼓は打たぬことにする
誠実に生きて余慶を子に願う
どなたにも希望下さるルミナリエ
案じた娘立派に二児の母こなす

海南市　堂上泰女

あばれ虎すったもんだで送り出す
目の黒いうちは離さぬ蔵の鍵
似顔絵は墨絵ぼかしの方がよい
パソコンも携帯もなく生きられる
無礼講の席で光っているマナー

田辺市　岡本昇

春夏秋冬シェルターのない暮らし
焦ってはならぬ介護の友だちよ
この国の水をまかなう雪がふる
生きのびて明けた地球に乾杯を
正月のお餅をどうぞほとけさま

鳥取市　鈴木公弘

一〇〇〇台の車を雪が閉じ込める
歌合戦演歌ファンはほっとかれ
こころからの謝罪にメモはいりません
神奈川の五倍の票を持て余す
バンザイのあとも開票止められず

鳥取市　岸本宏章

鳥取市　岸本孝子

新年を祝うがごとく銀世界
鉄道も道路も空も雪に敗け
忙しいけれど趣味には手は抜かぬ
夕立に洗ってもらううさぎ小屋
悲しみを閉じ込めたのかうさぎの目

鳥取市　夏目一粋

後輩が弱音を吐くと腹が立つ
パソコンは打てるが手書きする流儀
動いてる蟹を海へと帰したい
どうしろと言うのか金はありません
去る人を止めねば孤独ひどくなる

鳥取市　春木圭一郎

失敗がいずれプラスに効いてくる
まずは寝て心身ともに元気増す
悩むのは自分だけではないと知る
一期一会生きる力をまたもらう
ちょっとした一言勇気づけられる

鳥取市　永原昌鼓

冷や飯もきっと出世の糧となる
戦死した友よと唄う反戦歌
結び目がだんだん堅くなる介護
ギャンブルに溺れて浮き輪見つからず
身の程に合わせ小さく息をする

鳥取市　奥谷彩子

ショウウィンドー旬先き取りに夢を買う
円卓弾む巣立ちま近の三世代
初陽のシャワーに生かされる喜び
不況列島心は冬の日本海
長患いしないつもりの雪だるま

鳥取市　宮脇道子

矢のごとく時過ぎて今食べるだけ
占いに私の最終教えられ
お年玉孫の成長共に伸び
休日を待って惚けて水木金
雪の郷忘れた頃に豪雪か

鳥取市　土橋はるお

遠くから会釈して来る友が居る
好きだとも言わず夫婦を終りそう
チョイナチョイナ歌って皆が笑おうよ
火打ち石でたばこ吸ってたお爺さん
失言を蝶ネクタイが許さない

鳥取市　中村金祥

一番になった自信へ太く生き
成人病痛いところが見つからぬ
その時が来るのが恐い基地の町
主語のない会話で夫婦もめている
豪雪に電気も消えたお正月

鳥取市　平尾菜美

愚痴をいう前に梲を上げましょう
徳を積む父さんいつもまわり道
偏差値に溺れ人間見失う
教典に目覚める父の無位無官
空振りの両手にいつも母の愛

鳥取市　高浜　勇

雪ずりの音におびえる寒の夜
安堵感こころふれあう人の居て
細胞の音が聞こえる冬の朝
遠くないたしかに別れ訪れる
好きになる怖さ尻ごみするずるさ

鳥取市　土橋睦子

待つことが楽しくなった願いごと
御先祖の縁を大事に茶を運ぶ
好い御縁一期一会を振り返る
過疎に住み大中小のある峠
ねじ緩め人間くさい掌を洗う

鳥取市　池澤大鯰

いたずらがうまい奴ほど早や逃げす
累乗の酔いで詩想が遠ざかる
鬼が笑うそこから先が正念場
鬼籍に入るこの世と同じ居場所なし
鬼になりいつかお面がはずれない

鳥取市　吉田弘子

豪雪の山陰初陽かくれんぼ
新年に除雪の詫びをテレビから
生け花の主軸を松に天地人
七並べ老いの脳でも先手読む
友情とやこころ全開して響く

鳥取市　武田帆雀

詠雪の才にぎやかな初春の詩
キズのない玉を上司にお見せする
橘中の仲間来たりし初碁会
清廉なお方選挙に踊り出る
節操を宗に傘寿の事始め

鳥取市　池原天馬

白い雪大気汚染の影見えず
雪は降る地球のひずみかくすごと
国道は自慢できるか雪笑う
読書人八十路すぎてもまだまだ
長生きは見たそのままが歴史なる

鳥取市　鈴木一弘

木枯らしに押され研修紅葉散る
息災でのんびり沈む日を拝む
加護あれと祈る心の人らしさ
面影を枯れ葉にのこす老人会
寝正月借りた油で暖をとり

鳥取市　西川和子

書き初めはお手本通り書いている
筆順をなぞりきれいに書ける夢
筆順通り誰でも読めるペン習字
飾られた書家の文字がまだ読めぬ
筆順に強弱掠れ見事な書

鳥取市　深澤千恵子

来た道は神の足でも戻れない
賀状出し人の繋がり確かめる
とび跳ねる兎に元気もらう年
あと一歩気迫があれば届く夢
好物を供えて詫びる親不孝

鳥取市　太田幸枝

久久に抱きしめられて眼がさめた
満ちたりた生活にすき間風が吹く
努力では出せぬ品格紋所
人間に疲れ愛犬とくらす
どん底へ一本下りた命綱

鳥取市　中宇地秀四

有難う言えば一味旨くなる
肥満体いつも鏡に叱られる
煩悩を希望に変えた除夜の鐘
自分史に綺麗な色をつけて見る
福の神つれて顔出す初日の出

鳥取市　田中一眸

眉開き朝の支度の顔になる
モナリザに私のシミを見つけられ
青空に嘘は無いよと言えもせず
私の闇を拾っているペット
新年の度にリセットする誓い

鳥取市　田村邦昭

ギャンブルが人も心も鬼にする
親分の言うとおりだと叛かない
その時を待ってはおれず前にでる
キャリーバッグふたりの旅を詰めている
死に神にあっと言わせた最終章

鳥取市　稲村遊子

雪掻きをして新年の道拓く
坂道を登る兎を真似ながら
エレベーター使わぬ足を誉めてやる
肝心な事は省いた名刺出す
つけまつ毛して目力を強くする

鳥取市　加藤茶人

ダイエット器具は使わず捨て切れず
横着の証し付いてる脂肪肝
忘れたか捨てたか電車内の傘
政権がどうあれタバコ狙い打ち
酒タバコ小遣い仕訳妻エステ

倉吉市　野口節子

疲れたらと羽を広げて待つ港
明けまして波乱含みの幕明けか
暗がりに一灯くれた伊達直人
一灯の連鎖で温い輪が出来る
健康を押しいただいている夜明け

倉吉市　牧野芳光

友達を亡くしてしまう年賀状
新聞配りの足跡昼間まで消えぬ
雪が降ると怠け具合がよくわかる
北風に磨かれていく川の水
シンシンシンと住んでおります老い二人

倉吉市　猪川由美子

裁判員死刑を決めて心に荷
おサカナで陛下にまでも誉められる
大風呂敷たたみ忙しい政権だ
ざんげ本今更出したのりピーよ
不況です離婚の数は減っている

倉吉市　山中康子

先人を仰ぎ要をふところに
こんなにも燃えているのに発芽せぬ
寝ころんで浮かぶ川柳ワンダフル
哀愁を全身に浴びてる演歌
亡夫まかせだったお経が板につく

倉吉市　山本玲子

黙読はやがて睡魔に襲われる
方言もサービスのうち道の駅
知恵袋加齢とともに軽くなる
紙屑の出ない寂しさだってある
選外の胡瓜がエコを主張する

米子市　白根ふみ

ホワイトクリスマス汚れが白く浄化され
明け方の道でおはよう白い息交す
大晦日停電古い物さがす
さざ波が消えぬまんまで新年を
不一致な話トップもそれぞれも

米子市　吉田陽子

酸っぱさをみじんも見せぬ冬苺
松柏の手入れが観せる雪の庭
豪雪に猛暑地球が訴える
恥ずべきか我が家の自給率はゼロ
封印をしても背筋が寒くなる

鳥取県　深田倶久

宝船不用の品を山と積み
はびこった草もしばらく雪の下
鬼どもにがんじがらめの民主党
草ぶきの屋根にまき割り様になる
世の中のどこかにやさしい鬼もいる

鳥取県　鳥越鬼一

初夢は山陰新幹線開通
受験生きっと花咲く春が来る
大雪に願掛けをする年始め
大雪の国道九号人情道
あらためて雪国と知る鳥取県

鳥取県　細田裕花

月光に洗ってもらう眼の汚れ
水鳥が芸術的に水すべる
日常に流されてゆく淡い夢
常識を今日の飾にかけてみる
マニフェスト洗い直してみる冬だ

鳥取県　竹信照彦

国道も列車も止めた重い雪
雪の中の停電真っ暗で寒い
寒いから蓑虫になり動かない
ガスコンロひとつ頼りにめしを食う
お役所はやはりお役所三箇日

鳥取県　松川行男

少年の視野ガンダムへもう夢中
よく学べ親子でテレビ消せぬまま
雪よ雪祈った人も閉じこめる
郵送で送っているよお年玉
カンペイが世界丸いとトークする

鳥取県　斉尾くにこ

褒められて体流れる水の音
水っぽい言葉静かに雨が降る
ライオンはおらぬに群れる街のヌー
手と手と手つなげばきっと寄り掛かる
飛び立った瞬間独りだと知った

鳥取県　山下節子

悔やしさは出さぬ勝者に拍手する
毒突いて自分の居場所狭くする
小刻みの予定表です歳の暮れ
ギャンブルの最初ジャンケンからでした
握手したとたん心に点火した

鳥取県　佐伯やえ

豪雪ですが無事でおります仏さま
豪雪に里の人情あふれでる
背を向けて眠れぬ友がにし　ひがし
とぼけかけた詩嚢を雪に叩かれる
親と子の温い対話がはずむ冬

鳥取県　山本正光

一兵卒の儲けは知らぬ有権者
歯がゆいと思いませんかボスのこと
隣国の核の匂いを鳩は知る
高速道出来親族等素通りす
お正月なんて年寄りつまらない

鳥取県　岩崎和子

新年を豪雪と共明けそめる
一月が来れば二人のバースデー
甘党で柿好き夫柿を剥く
ノンアルコールシャンパン干したバースデー
空と海一緒になって日本海

鳥取県　西谷悦子

あやとりの紐は緩めがちょうどいい
アップした原風景が胸にある
歳相応に自己満足の道走る
ほどほどに結ぶ絆に飽きがこぬ
まだ灰汁があるから生きられる

鳥取県　北村稔

面白くなけりや生きるの止めなさい
ちっぽけな地球でけんかあほですね
辞世の句出来ぬも少し生きるかな
食うためにけんかするのはあほらしい
今頃の歌俺の耳には雑音だ

松江市　三島淞丘

川柳と酒を愛して終の旅
誘惑に勝った理性を温める
罫線をはみ出す愛の手紙書く
貪欲へ少しブレーキ踏んでやる
口笛を吹いて青春呼び戻す

松江市　小川注湖

嫁御寮年初の福や過疎の道
ワープロの自分史綴る音がよい
突っ突いて距離を縮める鍋料理
一票の値打ちしかと見せる春
美容院団地の噂配ってる

松江市　松本知恵子

パワースポット雪の出雲に乙女達
駐車場白い砂漠のお正月
三ヶ日明けて雪道年賀来る
正月の客来ぬ雪の駐車場
溶け出した雪子供等の声がする

出雲市　富田蘭水

ゆずり葉に己れの姿を問うてみる
あす知らぬ今が大切悟らねば
一皮をはいで初夢ものにする
寒菊に愛の心を添えてやる
まさ夢に是非とも二人あの丘で

出雲市　多久和敬子

ゆとり無い暮しの中でスープ冷め
ゆとり無いけど宝くじ買っている
気づか無いふりをするのも大変だ
限界を知った財布の口固い
鉛筆が私の話聞いてくれ

出雲市　伊藤玲子

スイッチを切り替え新年を招き入れ
ブレーキの効かない夢が一つある
氷雨降る背筋のばしたシクラメン
台所心の花を咲かせている
骨折にボロボロの身を知らさせる

鳥取県　持田多輝子

木枯しか人のうわさも乗せて吹く
永田町我身大事な人ばかり
がっかりを人には見せぬ負け惜しみ
もう二度ともどれぬ坂の走馬灯
ぬれ衣が晴れて空しさだけ残る

倉敷市　撰喜子

新しいことは孫から教えられ
手のうちにいるのは孫も二歳まで
意表つくことば互いに距離をおく
子の帰省御飯多めに炊いておく
高齢者安近短の旅をする

美作市　大石あすなろ

ぴり辛の母の苦言がありがたい
紆余曲折歩いた地図が手に残る
捻子ひとつこわれて前へ進めない
留守にしている間に座る椅子がない
ふる里に羽を休める低い屋根

美作市　福原悦子

懐かしい話題行き交う焚火の輪
負けて勝つ一手を妻は持っている
温暖化とても気になる雪だるま
豊作の米に溜め息出る安値
窓口の甘い言葉にだまされた

真庭市　福嶋智恵子

三ヶ日夢の間にすぎ子等帰る
晴ればれと春のカレンダー真白い
生け花の剪定はさみ容赦せず
カップ麺病み付きになる独り者
歳月の早さに惑う八十路坂

竹原市　石原淑子

鍋の湯気愛情ふわりさしむかい
一飯の情けをかけた猫と住み
跳ねたくて兎の日記つけはじめ
茜雲遺せる一句作れるか
頭だけ醒めて聴いてる春息吹

竹原市　時広一路

一日の長さを変える脳を持つ
この歳で読めぬ草書よ日本語よ
いま生きているから持っている未来
思い出を重ねて今の僕が有る
四季一つ一つに神の思召し

府中市　藤岡　ヒデコ

病んだ末仕事なくした子の焦り
神様に頼んだ事が二つある
ばあちゃんの威勢はただの空元気
陽だまりに一日の幸の時が過ぎ
突然が重なり疲れ倍になる

府中市　岩本　雅代

藪椿淋しさ耐えて凜と咲き
コマーシャルでカニ足食べるコツを知り
カニツアー食べ放題なら参加する
新年会少しおしゃれに紅も濃く
残り物福袋にも夢をかけ

府中市　馬場　利子

早春へとんど作りの輪に和む
鉢植えの寒菊白へ生きかえる
取り出して賀状に触れるあたたかさ
雪が舞うふる里を乞い重ね見る
美しく老いたし明日へ紅を引く

宇部市　平田　実男

玄関の靴が躾をさらけ出し
妹と兄で終った僕の恋
あの日から月へ兎の影がない
境界の杭ストレスを溜めている
親の威をまだ借りている二世議員

東かがわ市　川崎　ひかり

一年の計は今年もダイエット
新年の祈りが続く寺の道
年玉を入れて今年を締めくくる
新しい年へジャンプの助走する
それぞれの思案がからむ着地点

東かがわ市　伊勢　八重子

初詣人を吸い込む大鳥居
折りおりを句になぞりつ喜寿の坂
鏡餅囲んで孫の初笑い
露天風呂つるぎ山は雪化粧
おだやかな初日に憩う喫茶店

東かがわ市　清川　玲子

まずまずの安泰ドラマ初日の出
じいじからもうすぐ届くランドセル
一日に何度言うだろありがとう
まだ夢に挑戦したく飛んで居る
兎とびに息切れのする古稀半ば

東かがわ市　原　賢

夢枕亡母は心配まだしてる
蹴躓くたびに男は知恵拾う
見栄を張る一言が過ぎ絡む糸
一直線脇見する気のない兎
したいこといろいろあって生きてます

川柳塔の川柳讃歌 ⑮

木津川　計

段だら坂ゆっくり降りています秋

安土　理恵

男を手玉に取る風情の、恋に生きるスカーレット・オハラのような、裏切られても〝Tomorrow is another day〟（明日は明日の風が吹くわ）と、いつも前向きだった理恵さんが、登り坂から下り坂の段だら坂をゆっくり降り始めたというのです。

人生は笑福亭松枝さんの「ためいき坂くちぶえ坂」の哀歓があり、段だら坂の下りに至るのです。理恵さん、ゆっくりゆっくり。僕は急斜面を転がり落ちる冬です。

ばらばらの夕食二人っきりなのに

矢倉　五月

永井荷風が申しました。「憎しみ合うのは夫婦であるからだ」と。そらそうです。男は流れている水ですが、女は淀みます。絶えずぶつかって攪拌され、渦になるのです。平静であり続ける筈もありません。

ですが五月さん、ひとりで居るときの孤独より妻（夫）と居るときの孤独がもっとみじめなのです。人間が耐えられないのは老境に向かってのみじめさです。ですから回復バネが働きます。またいい夫婦に戻れますよ。

病院を隠れ家にする偉い人

三好　専平

潔よく人間はありたいですね。結末を一寸伸ばしにするほど終末の不様は際立つのです。横山ノックという破廉恥知事もそうでした。民事の判決を受け入れず、警察が動き始めた、と知ってピンピンしているのに入院したのです。結局ベッドの上で辞表を書く羽目に追い込まれました。バカの極みです。

もっとバカなのは、そんな人物と見抜けず、歓呼して二度も知事に選んだ野次馬根性の府民でした。専平さんと共に嗤います。

問題は人があやつる神だから

坂上　のり子

毎号気になっていました。シドニーで作句し続けておいでに敬服していたのです。ですが、のり子さん、川柳があったから異境の地でも淋しくないのですね。

問題は、あやつる前に、人間に都合よく神を造り、あやつり始めたことです。捨てる神あれば拾う神もあるのは、神のきまぐれでなく、人間のご都合主義に拠っています。でなければ神を信じ合う者同士が戦争などいたしましょうか。のり子さん、お元気で、又いい句を。

几帳面な人できっちり鉤括弧

高田　美代子

いてますいてます。そんな杓子定規な人が。別に括弧があろうがなかろうが、事態に何の影響もないのに、形式だけを重んずる融通のきかん人物です。

鉤括弧が利いています。丸括弧では融通無碍のチャランポランになってしまいます。曲がったことが嫌いな人物を、皆さん、「鉤括弧のような人」とこれから呼ぶことにしませんか。美代子さん、新しい表現の誕生です。

体重計まずポケットの小銭出し

岩本　笑子

笑子さん、笑いました僕も。何グラムかの多い少ないが気になるなら、計る前に食べなきゃいいのです。前日も前々日もその前も…。さすれば減ります。骨だらけになって、さらばです。

そんなことのできない以上、気にすることはありません。女性の美は痩身より豊麗にあります。むくむく肥って、むしろ女性は魅力なのです。僕は全日本豊満連盟の会長です。

（『上方芸能』誌発行人）

自選集

小島蘭幸

川柳塔がずらり春の書斎になっている
陽が昇る今産声は陽(はると)です
切れ長の目を持つ次男坊の貌だ
孫二人来て書斎にも名が欲しや
孫の来る日はカレーと決めて楽になる

前たもつ

生きてるか友の賀状は温かい
優先順位かえて今年のカレンダー
働けば暮らせる国にしてほしい
大寒波七草摘める土地に住み
癌再検祈り届いて異状なし

政岡未延子

花の種まいて陽気を引き寄せる
ひとつずつ閉じてく好きだった読書
遊びぐせついてこの頃よく笑う
弾むこと多く老春の綱を張る
終点が見えないけれどする支度

三宅保州

妻子にはとても見せられない土下座
今にして思えば肩書の力
月はまた満ちるあわてることはない
それにしてもイケメンすぎる肖像画
トラファンブックカバーも虎模様

宮西弥生

北国は吹雪リンゴの歌凍る
頭から春だ春だと脱ぐ女
寒いから他人と話の種を抱く
後編の出会い一生離さない
大和路の春と出会える仏さま

八木千代

石灯籠も門もこっぽり雪の中
よっぽどの仕儀か雪道を一人
是非もなし春まで閉ざす出入り口
わたくしと向き合うばかり雪の底
梅一輪　蝋の色して綻んだ

地球儀に炎の火種ここかしこ
いつかきっと主役になるぞ馬の脚
かくてまた今年も金の工面かな
太陽の恵みに芽ぶくこぼれ種
本棚に流れる歳月並べられ

八十田　洞庵

気象庁予報を笑う雪おんな
闘病記ペンの先から春覗く
春一番恋の試食をして漁り
なあ妻よ僕に安楽死をさせろ
善人を演じ切れずに春がゆく

両川　洋々

ごま豆腐買って来いよと励まされ
恩返しほうれん草に水をやり
お水取り母に逢えたらどうしよう
ふる里の墓には母はおりません
マドンナの膝で昼寝をするメガネ

板尾　岳人

紅白合戦昔源平今歌謡
分を守り一人の暮らし恙なし
喜寿傘寿祝う心を大切に
おおらかさ貰う山の湯山の宿
天からの癒しか虹も風花も

奥田　みつ子

自信過剰反省してる行き詰り
冷静な目には矛盾がよく見える
やんわりと断る言葉選っている
たまさかの早い帰宅を気遣われ
蹴躓き親の忠告身に染みる

河井　庸佑

齢の所為にするには少し早すぎる
傷口をおやつがわりに舐めている
呼び出し音にいつも返事をしてしまう
年毎に狭くなってく守備範囲
いい夢を見よう美味しい物食べて

川上　大輪

啓蟄だ起きよとさわぐ種袋
漁り灯の逸れて長閑な初春の海
杭が立つ緑が少し宛消える
壁越しの話は聞かぬ楽隠居
黄金の雲押分けて朝陽の出

木村　あきら

花だより今年も元気プラン練る
春闘へ怒った声は過去のこと
反骨の血は騒がせぬ年を知る
ワルツならまだ大丈夫萎えた脚
今日も留守となりの車車庫にない

小西　雄々

野仏も僕も吹雪に包まれる
若鷹に空一枚を明け渡す
ときめきの一日でした目を閉じる
感謝して送ろうあした散るのです
人参を持ってうさぎに逢いにゆく

斉藤　姦

杖無しで歩く練習しています
今年こそパソコン教えて欲しいもの
妻の庭今年はどんな野菜育つやら
撮り溜めた写真の整理ままならず
内裏雛飾って孫娘待っている

塩満　敏

新しいスターが東京スカイツリー
ハンカチとティッシュとお金だけ味方
しあわせを求めアンテナ林立す
階段にふっふっふと嗤われる
果てしなく広い十七音の枠

新家完司

急ぐ事もうやめなさい膝が言う
調子にはつい乗りやすい癖がある
どうせなら笑って暮らす老い二人
まだ欲があるから箸もよく動く
待ち時間ペンを持っても浮かばない

恒松町紅

北陸路選び感謝の雪景色
活花と琴が迎える三箇日
足腰の英気ゆず湯に試される
除雪車の威力ルンルンバスツアー
七種の揃わぬ粥も縁起もの

津守柳伸

戦友が一人還らぬまま八十路
猪や鹿やと帰農迎えられ
監督が代って優勝候補なり
三食の自給自足と青い空
妻病んで料理の本に目が走り

遠山可住

カレンダー表紙の富士で三箇日
旧年を埋めて雪のお元日
お互いが手を引き背押し初詣
松の内ばたばた薬切れたまま
病夫婦旅のチラシを遠く見る

都倉求芽

肩凝りもなおると書いてある足湯
初夢に死んだ男が現われる
筆順のとおりに壽と書く
二階から知らぬ男がおりてくる
好きだよと月下美人の狂い咲き

土橋螢

手の内を見せて仲間にしてもらう
ライバルのジョーク深読みしてしまう
ミシュランが何だわが家の御御御付
訥々とした嘘だから信じねば
外は雨ひとりの鍋もいいもんだ

西出楓楽

割勘に言い出しっぺがケリをつけ
奉加帳言い出しっぺの二枚腰
義務すべて言い出しっぺが背負わされ
町興し言い出しっぺが待たれてる
筵旗言い出しっぺのクジを引く

仁部四郎

夢だけは老いず明るく明日を追う
悲しい時は毬に優しく云う少女
仰げば尊しの歌に涙の雪化粧
今も青春脳若返らせる福笑い
畦道にメダカの学校ある小川

林瑞枝

第123回
大阪川柳の会

日時 4月4日(月) 17時開場 18時締切
会場 ホテルコムズ大阪 地下1階 アーバンホール
宿題と選者 △花 平山 繁夫 △独り 久保田元紀 △浮気 村上 玄也 △足す 礒野いさむ
会費 千円 欠席投句4月2日まで 本田 智彦 宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

温故知新

川柳句文集『川柳寄席』(昭和51年発行)

不二田 一三夫

臨終と云われ時計の秒も見る
このさきは口止め料をもろたとこ
下戸にでも通じるものに飲む手真似
手のひらへ金を集めた飲み仲間
テーブルマナーどうあろうともぎっちょなり
旅先で小出しに送る原稿紙
そんなこと云うたかいなとしゃべり酒
先代の無言がいっそ偉人にし
名人に人並み以下のとこもあり
向学に燃える子雑魚寝の中で読み
天皇のレジャーはカニと戯れる
訥弁のみなまで聞かず貸してくれ
きのこ雲神を忘れた形で立ち
相場夫人指輪あったりなかったり
週末はチップにならぬ家族づれ
目尻だけ下げてチップを出そとせず
スランプの壁をにらんだままで老け
金星へ背中うれしい音を立て
御隣りのビルへ太陽ぬすまれる
八つ当たり秘書だけ隅で花を生け

西出楓楽選

京都市　清水英旺

不甲斐なき日本人の一人なり
生まれ変わらば憂国の士とならん
しもやけに軟膏すり込む冬日向
なに事もなし忸怩たる当たり年
雪が降るアダモ日本が恋しかろ
俯瞰すれば生くべき道はいく筋も

高槻市　初代正彦

背負うものちょっと減らせばまだ跳べる
まだ古希と元気いっぱい卯と駆ける
脳トレに力が入る老い二人
夢多く多忙な頃にまだ未練
逝く友にあの世で飲めと酒持たす
道順をマスク美人に訊うてみる

鳥取市　竹口清信

生きて来た証の傷が少しある
古傷は誰にも見せぬ俺のもの
隠すから覗きたくなる好奇心
好奇心あるからこの世面白い
慣れすぎて手抜きが板についてきた
悪い癖つくのは早く直らない

米子市　野川宣子

いい顔のうさぎ賀状で跳ね回る
嫁はとら息子うさぎで恙無い
アルバムの中で膨れる子の未来
節約の二文字に誓う年はじめ
裏方のポストに似合う割烹着
勘違い膨れて胸に治まらぬ

米子市　成田公一

アルバムにしっかり残る黒い髪
この頃の若い者はと言う歳に
サムライで黙って居れず損をする
歌詞忘れあとはハミングしておいた
くっきりと眉引く朝の今日こそは
のんびりとさせぬ暦が走り出す

河内長野市　辻村洋子

気兼ねなく風邪で咳する独り者
皺の奥愚痴と幸せ同居する
生真面目が親譲りだと苦労する
おしゃべりが友の不幸を聞きたがる
はしたない母の口癖死語になる
夫だけ喧嘩相手をしてくれる

札幌市　佐藤登美子

ひらめいた一句布団の中で消え
特許権主婦のひらめき侮れぬ
不況こそ若き企業家野心抱く
五七五自分の色を塗ってみる
叶う夢かなわぬ夢の無限大
意気込みを虎視眈眈と胸にひめ

奈良県　谷川憲司

もめた末落しどころは横並び
機知のない駄洒落ばかりの芸が増え
商店のせわしい声が懐かしい
厚化粧斜光に苦労浮かび出る
億ションを横目でにらみ遠い駅
ＩＴ化機密がずばり出る怖さ

シドニー　坂上のり子

温かさいっぱい秘めた猫が来た
物陰にすぐに隠れる猫の過去
猫が来てしゃべる相手が見付かった
退屈であくびばっかりしてる猫
しっぽ振り返事にかえる眠い猫
あのねえとソッとすり寄りねだる猫

海南市　小谷小雪

新しい友達つくる予定です
念入りに黒豆を煮てほめられる
包丁のリズムはチャチャチャ外は雨
苛立ちを静めてくれる白ワイン
うぬぼれの強い話へ塩コショー
座蒲団に下手なジョークを潜らせる

泉大津市　助川和美

犯人は正月という血糖値
トイレには神様がいる磨いてる
嫁に優し息子見てああうらやまし
火鉢の上焙ったイカですすむ酒
古稀なれどラッキーカラー赤い服
断捨離できれい生活やってみよ

豊橋市　藤田千休

目も鼻も制御がきかぬ花粉症
トンネルを抜ければ春の雪しきり
涙腺も山の根雪もゆるむ春
早春譜樹々はおしゃれのスタンバイ
薮椿　野武士好みの香を放つ
過疎で咲く花も昭和の彩で咲き

大阪市　太田　としお

優勝へたったひとつが勝たれへん
不況下を武士は食わねど高楊枝
わたしでも総理大臣出来そうや
コンビニを頼り切ってる独り者
ノンアルコール飲めば飲むほど醒めてくる

大阪市　笠嶋　恵美

写経する部屋もピリリと畏まる
歩くなら雑踏が良い人が好き
七日居る何が言いたい冬の蠅
さすがプロやっときれいな遺影撮る
手作りのおせちに詰まる嫁の愛

大阪市　髙杉　力

世に春を運ぶ善意のランドセル
ボケぬよう妻の配慮で家事学ぶ
娘よりテニスコーチは歳が下
平日の京は熟年夫婦連れ
齢六十白いキャンバス眩し過ぎ

大阪市　田中　都

大掃除終えひとり聴く除夜の鐘
初詣ではしごしてきたいい天気
炉開きに梅の香満ちて亥の子餅
狭い部屋整理もせずに探しもの
移り香を少し残して去った人

大阪市　平井　露芳

トタン屋根ショパンの雨だれとは合わず
どの寺も時間が来たら鐘は鳴り
神様はトイレで美男美女作り
お目出度う言うても暮れのビデオです
亀さんに負けたらあかん兎さん

大阪市　前川　善之

大企業だけが儲けてほくほくと
お好み焼ソースが味を決めている
挨拶は人と人との和を広げ
寒空に流星眺め願掛ける
おせち買い心通わぬお正月

河内長野市　松岡　篤

体力と別だお酒は衰えぬ
コンピューターセットアップでつまずいて
まな板の音弾んでる孫来る日
お守りが合格させてくれそうで
願い事増えて賽銭どうしよう

大阪市　松田　聰

えべっさん仕事モードにまだなれぬ
民主党対立してる場合かな
やぼ用が帰ってくればエベス顔
さあ初出新年会で二日酔い
気がつけば湿布の香る妻となり

大阪市　吉田知之

婚活の服は派手より地味にする
ダンスパーティー派手なステップもてている
習いごとわくわく心弾ませる
ワイドショー喧しすぎてテレビ消す
曽孫達やってくるたび名を忘れ

池田市　上山堅坊

期待込め先渡しする心付け
楽しげなペアを横目で見るばかり
電動自転車でやっと上れる坂に住む
酔うほどは飲まずに帰る通夜の酒
黄一色のパンジーの庭春を呼ぶ

泉佐野市　稲葉洋

頬そっと撫でてくれたは母風か
着膨れのまま明色で春用意
巡る春一年草の花もあり
老兵はハイテク戦に置き去られ
裃を脱げば全身隙だらけ

河内長野市　木見谷孝代

故郷は大雪と聞くお正月
よく伸びる餅で今年もつつがなく
二歳児の豆台風がやっと去る
やれやれと肩の荷おろし風邪をひく
お誘いに軽く乗ってはまた太る

河内長野市　谷久美子

思い出を詰めるカバンを買い求め
親の背を高く飛び越え世に出る子
ふる里は私の宝山と川
目の中に入れて育てた愛娘
母に似た温もりがする国訛り

河内長野市　針生和代

日めくりの中を歩いているいのち
手作りのお節に集う三世代
極楽はこんなものかと冬至の湯
神さまに後押しされてきた人生
よたよたと辿り着いてる金婚譜

河内長野市　山本エミ

転んでも免許返せぬ老いの坂
百均へ気晴らししたい空財布
久しぶり楽しい逢瀬夢枕
誘われて軽い気持ちが先ばしる
転んでも練習積んだ一輪車

河内長野市　山室光弘

人と人絡む世間の糸車
底辺で心はいつも下克上
羅針盤持たぬ政治の千鳥足
むっくりと本音が起きる燗の酒
肩の力白寿の詩人抜いてくれ

冷え性に猫は炬燵にされた夜
犬が僕従え歩く散歩道
ひと駅のジョギングをしてランチ食べ
祝うのも高校までの誕生日
お笑いのあらすじ作るプロデュース

岸和田市　中岡香代

家計簿にちょっと贅沢貴腐ワイン
昼の憩いテーマソングを聞く平和
言い負けて姉の影踏み気を晴らす
鬱一字でっかく書いてうつを消す
エンゲージリング出て来るおもちゃ箱

堺市　澤井敏治

お見合いの感想聞かれパピプペポ
苦労人の友が居るのが宝物
風の向きとっさに見抜く奴凧
改札口キップ捜してひと踊り
子を育むのが親への恩返し

堺市　内藤憲彦

自分史の残るページを有効に
内緒話封じ切れない孫の口
逆風がなけりゃ突っ張り甲斐がない
そう言えば予感はしたと見栄を張る
アンバランス個性豊かと読み替える

堺市　羽田野洋介

過ぎた日をふと省みる除夜の鐘
異常気象地球の悲鳴かもしれぬ
水鳥も背を丸くして寒の入り
公園の手品師春を待ち侘びる
駆けて来るキミの足音春の音

高槻市　島田千鶴子

母だけを愛し通した父が好き
名人が彫ったと聞いて手を合わす
高い高い広い空へと抱き上げる
一病と言うが手強い敵である
美人妻維持管理費が高くつく

高槻市　田中由美子

正月の度にこだわり少し減り
家々の年毎に減る注連飾り
余生という言葉心に沿ってきた
夜回りの子どもの声の甲高く
陽を受けて舞う雪花を掌に受ける

豊中市　荒巻夢

良いニュース聞きたがってる長い耳
三日月のどこに兎の住処ある
事始め心をつなぐランドセル
木洩れ日を友に迎えたシクラメン
母さんに逢いたくなってお念仏

豊中市　池田純子

書き慣れぬ字が温かい年賀状
睨み鯛海老蔵さんも寝正月
無防備の私を襲う大寒波
アレソレの年輪夫婦呆け始め
新年号私を叩く句に出逢う

豊中市　源田啓生

富田林市　関　よしみ

渇き切るこころに春の絵手紙を
消しゴムがゆとりの文字を消しに来る
降る雪がみんな隠した過去の鬱
脳トレでまだまだ若いつもりです
任せると言われて紐を締め直す

寝屋川市　岡本勲

寄らば大樹の陰に集まる蟻の群れ
お雑煮もおとそも旨いありがたさ
除夜の鐘くらいじゃ煩悩捨てきれぬ
喧嘩したあとも夫のめしを炊く
どの薬効いたか元気とりもどし

羽曳野市　宇都宮ちづる

メールより家族写真の年賀状
お年玉袋は孫で中味ママ
年越しは第九を聴いて晦日そば
福笹と豆を嫁いだ娘に送る
栄養はみんな腹部に貯めている

東大阪市　西田いくひろ

ガッテンで暮らしの知恵を補給する
血圧が上がり目まいでうろたえる
仕事する顔は生き生き張りがある
カラオケで喉を痛めて風邪を引く
庇い合い老いの夫婦も板に付く

枚方市　小川良吉

図書館の隅で本読み安堵する
野良猫も小春日和の庭の隅
電車席いつも隅席安堵する
大仏は咳をこらえて煤払い
成田屋の声が消えたらさみしいね

枚方市　河田洋子

他人には見られたくない仕事部屋
他人から言われ気にするそんな歳
他人の目気にし出かける旅の朝
飛び跳ねて不況抜け出すうさぎ年
勉強に夢抱いた頃華でした

箕面市　寺井柳童

連勝に土更に極める相撲道
取っ掛りどこから暮れの大掃除
行き会って挨拶交す山の道
転んでもとてもうれしい新雪だ
今年こそ年の終りに仕分けする

八尾市　赤木妙子

照る日曇る日せっせと食べてたら傘寿
電子書籍より紙の本整える
まっすぐに生きすくすくと老い傘寿
クリニックの梯子で増えていくカルテ
今日生きる幸に手綱を締め直す

八尾市　田邊浩三

秋の寺心鎮めて坐禅組む
心にはずっしり重い軽い嘘
ゴールインしてから友として握手
歯も耳も目も人並みに年を食う
人生も終わりよければすべてよし

八尾市　山根妙子

三が日テレビは同じ顔ばかり
街路樹がたわみ戻りつ風を押す
初詣で惜しまれ天に往けること
唯一の年賀で友の無事を知る
男でも女でもない人がもて

大阪府　小栢こずえ

寒い日も車を置いて万歩計
スピーチを頼まれ料理手につかず
今日も無事薄氷渡る老いの日々
成し終えてさわやかさの中第九聴く
着膨れて肩を凝らして暖をとる

大阪府　神野千恵子

時々は雲から答えもらってる
僅差には悔しさ大差ならけろり
振り向いたとたん記憶がそっぽ向く
美しい声が平気で嘘をつく
彫り深い顔は似合わぬお雛様

大阪府　高木道子

世の中を無口にさせて雪こんこん
小寒の風物とせず老いた犬
日脚伸び隅に鎮座す綿埃
マスク同士喧嘩の様に声あげて
神様のトリックトイレで笑ってる

大阪府　畑中節子

お笑いを見てりゃ此の世の悩みなし
根気よく人生ドラマ自主自演
今の世を褒める一句が浮かばない
すれ違う友も気付かず街師走
さざんかの咲く道をゆく鹿親子

神戸市　木村忠義

お守りは神様が居るように見え
晩酌を楽しみに日々精を出す
神様のおひまなときに初詣で
よいことをしてよいことを待っている
ほほえみは花が開いたように見え

神戸市　山根弘子

お年玉あげて喜ぶ紅葉の手
プレゼント母から子へと知恵袋
母の知る昔話に花咲かせ
知らぬ顔しているけれど地獄耳
聞えても知らんぷりして通りすぎ

尼崎市　市坪武臣

アルバムにあの日あの頃走馬灯
御破算で願い迎える初日の出
間一髪間に合ったのに女専車だ
大根足足湯に並べ癒される
長い道ぽちぽち行こか夫婦仲

尼崎市　田原一兆

雑草は根深く張って春を待つ
残酷な一面見せる多数決
亡き人に春を告げゆく一・一七
愛してる言わぬは言うに勝るでも
手づくりの賀状がぬくい掘炬燵

加東市　安達厚

生き下手は死に下手なのか八十路ゆく
残り火を集めて生きる老いの日々
葉ぼたんを並べ玄関冬の顔
妻元気追い回される年の暮れ
正月やみんな揃ってみんな散り

加東市　黒崎美紗子

急に来た寒さこたえる老い仲間
大口を開けて笑ってひとりいる
湯気囲む食欲きそいみな元気
昨年より今年はよいと信じ切る
一言が添えられ賀状幸を呼ぶ

川西市　日野岡和之

やわらかい心で孫と長電話
福耳を亡父から貰い律義者
久方の背広遺影に撮っておく
来年も生きてるつもり衣替え
止められぬ生きてる証し年賀状

三田市　尾崎一子

二次会を抜けた二人は今夫婦
ばあちゃんの寝床にもぐる孫みっつ
帰省の子ほれぼれするね亡夫に似て
初夢は観音様と当りくじ
甘辛を丸ごと抱いた皺の数

篠山市　酒井真由

神父若し黒きマントを楯として
ゆるやかな曲線描き恋終わる
透明なお肌であった頃のこと
マドンナも昭和も遠くなりにけり
従容と死にたし吹雪く地の果てに

まんまるい心が欲しく聖書抱く
昨年の希みの一片培養中
義に生きろ赦しなさいとイエス様
がむしゃらに働き口座を放ってある
はっきりと嫌だと言えた六十歳

篠山市　沢山啓子

料理番組見つつお茶漬食べている
子や孫の去んだ茶の間の温み追う
去んだ日を指で数えて小正月
夜のしじま一人病む日をふと思う
八十五歳まだ言い足りず食い足りず

篠山市　谷田多美子

ひそやかに消えるのも良し明けの星
煩わしだけど時どき友が欲し
酒の味二人は無言それで良い
個人情報それ程隠す事有るの
駅港人が集まる場所が好き

宝塚市　丸山孔一

うさぎ年まだ見ぬ春はピンク色
齢忘れ飛び跳ねてみるうさぎ年
カレンダーに希望の光見え隠れ
エンディングノートまだ買う気がしない
助走はもう飽きたぞ走れ日本丸

西宮市　株元玲子

年の瀬の笑顔フォーカスして歩き
丸善へ祝いのように置くレモン
香水をひと噴きハートへひと噴き
ツイードのコートと歩きたい日暮れ
羽根まくら宇宙旅行は夜明けまで

西宮市　吉井菜々子

冬空を飲み干すつもり深呼吸
末孫の嫁入道具買い揃え
年越そば亡母の味に出来上り
師走とはお金が走る目が回る
はからずも視線集めて照れ笑い

三木市　山口久子

財布のひも締めても底が抜けている
訳もなく夜行列車に憧れる
就職祈願風に翻弄される絵馬
ダイエット夜九時からのやせがまん
いい知らせうさぎの耳で待ちわびる

奈良市　大久保真澄

ルンルンと闊歩の頃が華と知る
喋るのは心身共にリフレッシュ
夫婦喧嘩も出来るうちが華となり
人の世やシナリオ通り行かぬもの
大晦日去年最後の風邪もらい

奈良市　尾畑なを江

奈良市　加門萌子

金星の探査六年後を予約
エコエコと言ってイルミネーション派手
鎮魂がいつしか派手な客寄せに
国造り日本男子は偉かった
四季有ってクローゼットがパンクする

奈良市　前田弘恵

大絵馬に長寿を願いツーショット
願い事背負いきれない絵馬の肩
杵突きのこぼれを知って雀来る
招かれて扱き使われる娘宅
鐘突いて煩悩一つ叩き付け

奈良市　矢野良一

明るくて丸い笑顔の孫二十
生駒颪粉雪連れて大晦日
路地裏に愚痴を並べたカウンター
凸凹の坂やっと越え古稀の春
なによりも三度の飯が美味いこと

和歌山市　柏原夕胡

タダ働きなのでしっかり手抜きする
揺れながらそれでも恋は恋のまま
愛なのだろうか愚かな執着か
純情な女は悪女より怖い
憎しみを向けたら憎み返される

和歌山市　土屋起世子

生かされて頂く雑煮春の味
青空へ嬉しい事を聞かせてる
朝一番今日も元気と雨戸あけ
蛍光灯点ると用を忘れてた
七草粥ひとり暮らしに慣れました

和歌山市　坂部かずみ

忙しい友の元気を追い掛ける
正直で時代遅れの人となる
緊張はしない慌てているだけだ
身勝手な古希だ古希だとカード出す
木枯しの日に待っている茶碗蒸し

和歌山市　福井菜摘

逆転を賭けて刃こぼれ研いでいる
はっきりと言えぬ真実だってある
踏み出せば一歩が二歩になる力
シナリオになかった夢が弾み出す
いつからか自分自身に振るタクト

岩出市　村中悦男

大根の膚には美女も競えない
百均屋あれもこれもと欲しくなり
生活の隙間をうめる百均屋
恙ない老いて夫婦の味がする
相性が合って気易く出る笑い

記念樹も夢を目指して伸びてゆく
用意ドン白いノートを抱いて春
生命線継ぎ足す今朝の薬包紙
遺伝子を揺すると見えてきたレベル
万灯の一つが温い灯をともす

紀の川市　宇野幹子

一ランク落せば楽になる暮らし
咳払いどうも気になる父の癖
出土した土器に時代の顔がある
日々安泰父の器の中にいる
競い合う花に無情の雨が降る

紀の川市　北山絹子

土いじり指の先から土の詩
気持ちよく酔ってドアーは外開き
人の顔ぽっかり消えている名前
仏壇のパワースポット正座する
深呼吸しますわたしに還る時

紀の川市　辻内次根

のほほんと酔う末席の祝い酒
やれやれと肩書脱いで素手素足
煩悩の欠片を消した除夜の鐘
一日が徐徐に貴重となってくる
朝日に気夕日に癒しもらい生き

橋本市　石田隆彦

不発弾抱えたままの初詣で
マンネリを捨てる覚悟の初詣で
マンネリ化ゆるいカーブの先がない
お年玉握った笑顔跳びはねる
靴並ぶ大きい方が子供用

鳥取市　大前安子

年賀状いの一番に君に書く
救急車には正月も盆も無い
危険物監視をされて食う雑煮
介護士の君は私の神様だ
正月が過ぎたら僕は冬眠だ

鳥取市　近藤秋星

金婚のカーナビドラマでき上り
母涙思い出語りもらい泣き
花ゆれて君を忘れる旅路です
老母介護出来る私に感謝する
蟹の身を出して下さる彼が好き

鳥取市　坂本とも湖

年末に危篤の兄と積る雪
三が日耐えて師走に手を引かれ
ありがとう有り難う言い永遠の旅
銀世界陽光受けていい旅路
竹スキー兄と手造り走馬灯

鳥取市　津村律子

残高を見つめ眉間がしわ寄せる
書初めはハードル高く揚げておく
元気なら肩書きいらぬ同級生
約款と私油に水の仲
正論が治まりつかぬこともある

鳥取市　松原　ひとみ

偶数月頼みの綱が振込まれ
兎年飛躍の年であるように
願いごとかなうようにと初詣で
鳥取県ゲゲゲとコナン人を呼ぶ
万札は足があるのかすぐ逃げる

倉吉市　倉繁　泰輔

初詣で遠くで拝む雪の中
元旦に空よりみやげ雪の山
一輪の椿にやさし冬日より
雷におびえて布団引寄せる
ろうばいの香りただよう部屋の中

倉吉市　藤井　美津恵

洗濯機まわして今日の幕が開く
豪雪に鳥取県が凍りつく
まっしぐら世界一です高齢化
たわごとを夜空の星が笑っとる
てこずらす逃げ足早い孫の守り

倉吉市　前田　喜美子

元旦は夫の遺影に献杯す
めでたいが好きになれない亀の顔
初夢にピョンピョン福が跳ねて来た
どか雪を初体験の七十路
停電に灯油ストーブ誇らしげ

米子市　後藤　美恵子

停電にオール電化が風邪を引き
こころにも一枚欲しい貼るカイロ
玄関へひとり分だけ雪を掻く
掃除機が孫の来る日を知っている
アナログの時計が昔噺する

米子市　竹村　紀の治

エンジンをだましだましで八十路坂
兎年ジャンプジャンプで羽ばたこう
古くさいアルバムの中昔の香
新春は雪に埋もれて炬燵番
新春だ明るい日ざし甦る

米子市　田村　周子

初雪に子供が騒ぐ声がする
ぜいたくに目をつむる日日老い二人
仕舞い湯に破れた柚子がよく匂う
沢庵を隣近所に配っている
外は雪することもなく炬燵番

米子市　見山　温子

病名はなんでもありの歳となる
寒風に耐えて雀が庭に来る
とぼとぼと歩いた先に崖がある
携帯が大事な物になって来た
経験を文字にできない一市民

米子市　湯浅久司

一歩でも奴より早くゴールする
下着まで着替えて臨む入社式
雪の日は小鳥も庭へ食求め
家具移動雰囲気変わり気も新た
朝ごとに鏡に笑顔聞いてみる

鳥取県　岡村孝明

貝がら節さすが男の決めどころ
酔い寝して覚めて正月らしい雪
支持率を下げる事件が目白押し
耳よりの話へ欲の背が傾ぐ
背に腹はかえられなくて断つ絆

鳥取県　田口清帆

美容院出ればルンルン回り道
年重ねおしゃれ心を取り入れる
新年に暴れましたね冬将軍
杵搗の餅の粘りに教えられ
冬枯れに明るく温いランドセル

松江市　山根邦代

糸口の見えぬ眼鏡を拭いており
元気かえまあまあ何とか暮らしとる
流行に付いて行けない重い足
雪の中ミケは何処まで行ったやら
豪雪の今を天下と雪だるま

雲南市　菅田かつ子

一族が祝ってくれる祝米寿
黒枠の戦友よお前も米寿だよ
草むして忘れ去られて忠魂碑
雪掘って抜く大根の温かし
三本足の影よ急ぐな転ぶなよ

美作市　小林妻子

うなずきが眠気を誘う講演会
皿洗い上手になった定年後
妻にだけセットポイントしてやられ
眼と鼻が杉の息吹に脅えてる
寒い日は炬燵の中が極楽だ

広島市　岸本清

幸せにするよと言ったかも知れん
好奇心八十過ぎてすみません
だましだまされまあまあ八十二まできた
じいちゃんのアイデアに孫はクスクス
極端な愛の表現ペアルック

竹原市　國實力

竹原市　若年幸子

沢山の資格持つ手に職が無い
善悪は表裏一体決めかねる
お泣きなさいいつか涙は越えられる
ゴールそこ　ひと頑張りのネジを巻く
雪積り里を絵にする詩にする

大洲市　花岡順子

うさぎ年まずはジャンプをする準備
年末の帰省はうさぎ追いし山
癇癪玉呼んでも起きぬ子へ破裂
反抗の声は少年から大人
図星つく時は真面目な顔になる

香南市　桑名孝雄

日の丸がしょんぼり垂れて年が明け
３６５日なんでこんなに短かろ
句材が枯渇さあ大変だ飲みに出る
血圧計きっと故障をしてるだろ
トイレの神様この一曲で寝てしまう

福岡県　豊田愛

八十路老いは足から攻めてくる
御馳走さま言うて自分の皿洗う
介護して後悔ばかり喪が晴れず
転んだら最後気遣いして歩く
太陽にまだがんばれる手を翳す

福岡県　本田さくら

近所から嬉しい悲鳴野菜責め
エンジェルかフィギアスケート夢心地
年賀状うさぎそれぞれ個性もつ
幾何学を誰が教えた蜘蛛の網
ストーブにおでんぐつぐつ猫が番

唐津市　岩崎實

大いなる天地の恵み親の恩
しあわせはねばりと汗をこきまぜて
挑戦の鉢巻き背筋伸ばしくれ
気づかいはしてるが何もできぬまま
鮮明なテレビ画面で旅をする

唐津市　北村松風

産声で生きる権利を貰います
偏見の眼に挑む黙秘権
手も足も動きいか刺し皿にのる
朝餉には屋敷畑の野菜摘む
雨降れば母さん蛇の目いま車

唐津市　吉冨節子

跳べないが気持の跳ねる年女
気候異変地球壊れる前兆か
四方海波の高さを案じてる
苦しみも悲しみも知る戦中派
風習が次第に薄れ老い嘆く

ジャンプなど気配も見せぬ年男
元気出た国籍不明のウナギだが
無農薬以外は全部毒入りか
お隣りに気づかれるなとハトにエサ
発毛剤一個で帽子五つ買う

山鹿市　三谷　たん吉

年月を歩き火も抱く水も抱く
七日粥おひとりさまは隣から
子がみんな継がぬ畑の鯉のぼり
添書きもパソコンで書いてる賀状
俺よりも下いる居ると悟る古稀

網走市　角谷　幸甚

いつの間に太宰は時をくぐり抜け
アナログの音に棲んでるビートルズ
虎の子が飼われていると知らぬ本
ミステリー謎が謎呼び夜が更ける
舞台下り人生論を説くピエロ

弘前市　稲見　則彦

子子孫孫末広がりを願う絵馬
風情など語るに余る猛吹雪
マニキュアは春を先取る桜色
叱られた言葉後から有難い
親離れしてから父が好きになり

弘前市　髙橋　洋子

ゲームセット破れ障子に隙間風
通帳はぜったい見せぬ妻である
津軽弁はやてに乗って江戸を観る
穏やかな笑顔を写す初日の出
除夜の鐘地吹雪舞って吠えている

弘前市　髙森　一呑

嫁がせて妻と出してる雛飾り
断捨離の範せまられている書斎
アナログのカウントダウン今日も聞き
球春も薄型テレビ急き立てる
仕舞風呂吐息の訳を訊いてくる

塩竈市　木田　比呂朗

百薬の長確保して寒の入り
八十路坂二死満塁の日が続き
年賀状以下同文の多いこと
おせちにも和洋折衷ソーセージ
大河ドラマ原作よりもピンク色

東京都　井上　つよし

大晦日チャンネル権で子とバトル
子が20歳こちらもやっと親になる
大吉だやっと私の番が来た
書き初めの墨の香りにホッとする
福袋散々迷い買わぬまま

東京都　髙岡　弥生

漏れてから極秘の土手が高くなり
内輪揉めしてる場合か永田町
鑑定はどうあれ蔵にまたしまう
もう膝も騙し切れずに老い支度
ご免なさいだけで治まる腹の虫

昭島市　野口　忠

祖母ゆずり手間を惜しまず作る味
息子似か嫁似か春はもう間近
古希間近新車買うのを迷う日々
愛犬に安全祈願守り札
塩分も油分も好きで酒も好き

横浜市　巌田　かず枝

財産はマグロ一本程もなし
アメリカに金も頭も押さえられ
政治家の明日言う事がまた違う
買い溜めて捨てるに金がいる暮し
十種類の薬ぼけては居られない

佐渡市　髙野　不二

ゆったりと昭和を探す古本屋
書初めの十七音を研ぎすます
本日は亀あすは兎になって生き
雑草の生命力に負けないぞ
宇宙から見れば戦の絶えぬ星

富山市　有澤　嘉晃

陽を浴びてスマートになる雪ダルマ
後期高齢酒も好きです恋もする
巣立つ子の羽根を奇麗に拭いておく
世渡りが下手で孤独な寒桜
反り合わぬ税と福祉のマニフェスト

岐阜市　平野　あずま

枯葉にも輝く春がありました
遺伝子の良い所だけ欲しかった
世界遺産映像で見てよしとする
この思いエンマの前でも口つむぐ
会うだけで笑顔になれる友が来る

静岡市　渡辺　芳子

おじいちゃん長生きしてよ孫の酌
母が言う転んだらすぐ起きなさい
日々生きる世情の変化あみだくじ
図書館に新聞読みに行く仕事
焼肉の匂いを抱いた息子来る

江南市　脇田　雅美

ほどほどの幸せ掴む妻の舵
飾る言葉笑顔もひとつ添えておく
おもちゃ箱に一つや二つあった夢
夢さがし一泊二日旅に出る
雲間から母の笑顔が見え隠れ

八幡市　今井　万紗子

神戸市　白川淑子

ばあちゃん子ぼんやりなんて言わせない
ばあちゃん子お茶漬けの味知っている
無料パス発車オーライ後期行き
気配りを宿のおかみに習いたい

尼崎市　小池幸子

孫効果老いた夫婦に会話生む
精一杯生きた人生悔いはなし
若松に庭の南天竹で初春
一度だけ味わいたいな当たりくじ

加東市　岩本美緒子

やんわりと二度も顔剃り理髪店
二礼二拍初日を拝む庭に立ち
あと二年歩かば米寿担がれて
五年予定そこらあたりは霧ヶ関

川西市　岡嶋洋子

杯を伏せて自分を戒めて
食べ過ぎて動きたくない万歩計
年越しも正月もない職探し
口じゃなく背中で語るお父さん

篠山市　石田久子

物忘れ笑うしかない老いの日々
茶柱が立ったその日はうきうきと
味噌汁に庭からとれたものを入れ
ほっとする定期健診異常なし

篠山市　永井かほる

ぐつぐつと煮込むおでんの冬の味
添書きの賀状三行再度読み
賀状よみ長距離電話有難さ
賀状来て誰かわからぬパソコン字

三田市　辻開子

戸惑いを今も背負って介護する
減塩になれて血圧高めです
腕を組みあぐらもかいて渋い顔
テンポずれはいの返事も歳をとり

西宮市　泉水冴子

もう無理が利かないのよと逃げ上手
姉ちゃんがバラならわたしカスミ草
おばあちゃんだって昔は持てたのよ
デコちゃんもとうとう星になりました

和歌山市　磯部義雄

年金を積み立てている親心
ひれ伏しているが心は伏せませぬ
真っ当に生きれば兎跳ねてくる
諺に千里の行も足下から

田辺市　大峠可動

春の明け紀州紅梅笑みを持つ
一枚の舌が恐くて禁止令
時々は路傍の石も生欠伸
時々は有象無象も夢を食う

予告なしに老いは突然背後から
何はともあれ家族が揃うお正月
青森へきっと行くぞとお正月
介護ケアの車あちこちご近所に

和歌山県　森下よりこ

満月だロマンチックな人になる
いつの間に三歩先行く妻となる
澄んだ眼の犬に優しさ教えられ
手鏡が心模様を映し出す

鳥取市　前田孝子

年明けて国家安泰まず拝む
本年も元気でいてと娘の賀状
嫁入りの下駄が寝たまま七十年
通り道お地蔵様に手を合わせ

鳥取市　山口千代子

耐えた夏今度は冬の雪地獄
初詣そこに居るのは神と我
初日の出見せぬ行かせぬ雪の路
帰省子にしばらくおれと通せんぼ

境港市　中井虎尾

銀幕の恋人が逝く大晦日
古希過ぎてのんびりばかりして居れぬ
八九まで妻に逆らうことはない
はめる気を打って返しで仕留められ

米子市　生田寒之

やましいな日頃の無口よくしゃべる
七草にごてつくおせち流れ落ち
注連縄の飾りみかんを鳥食べる
大雪を案じ弟電話くる

米子市　小塩智加恵

老いの字が体にしみて離れない
時たまに胸が駄々こねあわてさす
般若面打たせた妻の心知る
黄泉は就活なくて気が楽だ

米子市　加藤正二

陰ながら人の不幸に拍手する
絶対に水に流せぬことがあり
毎日の首相の食事気にかかり
身動きも出来ずわが家で雪見酒

米子市　後藤宏之

大雪に備蓄食品助かった
低気圧居座らないで早く逃げ
偉い人中には狡い人もいる
無関心では良いところ誉められず

米子市　中原章子

ああ友よ今は何処か雲に聞く
レッスンでめざせ百歳足腰を
天国は切符いらない楽な旅
人生は未知があるから生きられる

鳥取県　飯野菖子

鳥取県　大塚美代子

兎さん何が悲しい真赤な瞳
三代の卯年が揃う初詣で
しっかりとトラのバトンを待つ兎
ぬるま湯にはまった後に来る寒気

鳥取県　岡本幸枝

ひかえ目の女がよいと言う夫
大黒さまの慈悲反省の白うさぎ
油断した兎さんから亀学ぶ
鈴がなんだ月の輪熊も生きるんだ

鳥取県　加賀由志延

飛び跳ねる兎ばっかり来た賀状
雪のした足が向かない初詣で
耐える芽を育ててくれる長い冬
これからを生きる片付け始めよう

鳥取県　下田茂登子

此処だけの話次つぎ波紋呼ぶ
おだやかになれぬ夫婦でまだ元気
この不況格下げだって負けられぬ
辞令とは格下げだった悲しい日

鳥取県　橋谷静江

色いろと苦労しただけ智恵もつき
初春へ年玉袋数が増え
エプロンを掛けると自分らしくなる
片付けが出来ずにごみの中に居る

鳥取県　吉野いさお

欲淡くすればする程身が軽い
人脈を探るアンテナ張っている
誰よりも信用される認印
楢山の遊山叶って行ったまま

松江市　相見柳歩

逆境にハミングひとつ乗り越える
美しい香りが残る駅に立つ
私も他人も同じ仏の子
千羽目は金のリボンをさりげなく

松江市　錦織禮子

ダブルスの子らの額に汗が飛ぶ
新年に明るい色のコート買う
雪しんしん紅殻の湯は女風呂
雪道はアウト愛車は冬ごもり

松江市　松浦登志子

枝の雪家の中から心配し
積雪のおかげで整理冷蔵庫
背伸びして新しい年楽しもう
気に入りの器に好きなものをのせ

雲南市　武島ちよえ

篤志家の連鎖列島暖める
山陰路大暴れする雪の精
人ひとり訪れぬ今日爪を切る
書いて消すエンピツの芯疲れ果て

白髪はいつも上座へ追いやられ
木守柿みんなカラスにしてやられ
どこまでが本音か知らんおだてられ
老い二人ぴったり行かぬこと多し

雲南市　福間博利

孫旋風正月三日吹き荒れる
爺ちゃんはにこにこ孫に絞られて
当分はお茶沸かすだけ冬独り
旅終えて先ず一杯の故郷の水

安来市　原煩悩児

相槍が上手く世の中スイスイと
思い出の交叉の中で孫育て
病持ち賢く生きて姉傘寿
ぐうたらに生きても傘寿目ざしてる

竹原市　土井輝恵

年賀状差出人の名がもれる
年金で面目保つお年玉
この寒い不況を払う風よ吹け
孫息子成人の日に何思う

竹原市　六田半徳

あの靴が欲しいいつまで歩けるか
舌先で切られた傷は致命傷
装飾語だけの男の軽い過去
長生きが悪い気になる不況の世

宇部市　高山清子

水と森力合わせて国創り
今日生きる歩幅夫々人の価値
プライドを捨てると見える人間味
拘りが溶けて真水になる流れ

今治市　渡邊伊津志

わたしを洗うイメージチェンジしたいから
ひび割れの夫婦に接着剤がいる
言い勝って見ても淋しい冬の景
ひとつ言い過ぎましたきらわれる

四国中央市　篠原久

欲の袋峠が見えて一つ捨て
禁酒禁煙未完のままで父は逝き
除夜の鐘余韻に合わす追加酒
五年振り生きていたのか賀状来る

香南市　近森功

ウーンうまい思わず唸る旬野菜
御来光心洗われ皆優し
足るを知る心豊かに生きねばと
老猫にそっと毛布をかけてやる

北九州市　小松紀子

親離れ望むそばから孤独感
こたつないねこの背中に毛布掛け
私誰れ名を言う父に安堵する
こぼれ出る湯の量で知る身の重さ

山鹿市　米加田恭代

メルボルン　藤原ポン吉

頼りない政府に蹴りを伊達直人
代議士にマスクを送り尻叩く
私心なき政治家さがす納税者
無駄みたい熊ににもわかる死んだふり

福島県　七ツ森客山

ほのぼのと裸電球山の宿
梨ひとつ剥いて時間を持て余す
奥方に舵を任せて恙なし
真夜中の観覧席は星を乗せ

横浜市　川島良子

子の躾二泊三日の旅で見る
箱根駅伝ああわたくしのお正月
パソコンの基本を通販で学ぶ
じじばばを誘う魂胆あるらしい

犬山市　奥村百合江

老夫婦一日何か口動く
電話鳴る自分じゃないと出もしない
龍馬去り胸の空白録画埋め
私なら一晩で病むホームレス

大阪市　吉川弘泰

春一番吹いて土筆が顔を出し
ハイキング小鳥と歌う春の風
芽を出した木々の緑が嬉しそう
年取ればついつい愚痴が多くなり

河内長野市　内海綾乃

長生きをすればする程金かかる
一人者テレビ相手にぐちってる
子供の性格それぞれ違うおもしろさ
学校往き来挨拶出来る子供達

河内長野市　梶原弘光

サンタさん赴任先から宅急便
大みそか残った未練ごみに出す
食べて寝て泣いてるだけで孫可愛い
楽な道選んだ挙げ句けつまずき

河内長野市　木太久正一

愛犬が朝の散歩を待っている
暖かい心が見える同志の輪
今年また気になる賀状二つ三つ
愛犬の散歩ついでにごみ拾い

堺市　近藤治子

三世代住みつき笑い声響く
日本人神も仏も拝みます
ピョンピョンと跳ねたつもりがドタドタと
一番のこだわり食べるものですね

豊中市　石橋優明

靴はかぬ物乞い一人立ちつくす
誇りかに愛していると言えぬ国
葉を落とし空をひび割れさす木立
ひな祭り午睡の夢がにじみ出す

富田林市　古田千華

雛壇で可愛いお客待つ女官
きれいな色に染まり育てとひなあられ
スランプの底で見つけた梯子段
うさぎ年妻と二人で跳ねる日々

富田林市　山野寿之

啄木と同じ心で母背負う
私のサプリメントは辞書を繰る
半額を狙って走る午後六時
アラフォーが箱から出ずに燥いでる

寝屋川市　小谷滋彦

あかつきにそっとはやぶさ肩を抱き
階段の軋み大きく冬に入る
ひげ剃って体重計る身だしなみ
あちこちと熱燗のぞく至福顔

羽曳野市　安本美喜

運開くよう蛤のお吸物
倖せと淋しさ感ず里帰り
良き夫も時々亭主関白に
西高東低お天気博士多忙です

枚方市　坂本ミヨノ

百薬の酒はしご飲み苦笑する
襟足の白さが匂う舞妓さん
梅古木餅飾り付け花が咲く
趣味を持ち信念曲げず元気溜め

八尾市　前田紀雄

新年の暦リセットして迎え
初競りで戸井田の鮪ピョンと跳ね
デパートが店仕舞いする大不況
父母の遺影を眺め感謝する

大阪府　安藤なつこ

そうじして元はこんなんやったんか
年末はしたくないことばかりです
告白をされてもどれぬ友の仲
寒いから泣いているのか白うさぎ

大阪府　片岡松枝

自分が嫌自我の強さで吐く暴言
何十年添うてわからぬ人ごころ
恐妻のうわさ七十五日かな
一人生き一人で還る覚悟出来

大阪府　西川冷子

凍て道を徐行運転交差点
新年は雪の洗礼二年越し
二年越し積った雪で鳥除ける
健康を分けるつもりのお年玉

大阪府　若月祐作

従軍した姉の柩は笑んでいた
さようなら言って握手が離れない
米寿背に凛として咲く胡蝶蘭
休肝日とる程飲酒していない

愛染帖

新家　完司　選

眼鏡拭くたびに目につく妻の皺

大阪市　伏見　雅明

（評）曇った眼鏡は不快だが、見え過ぎるのも考えもの。その皺の何割かは亭主の責任。だとすれば、見ぬふりをするのもエチケット。

威張ってもあなたの家来わたしだけ

鳥取市　倉益　一瑶

（評）「一国一城の主として毅然と！」という姿勢を「威張っている」と思われるのは心外。だが、家来が女房だけというのは情けない事実。

外国語ちょっと覚えた奈良の鹿

大阪市　津村志華子

（評）代表的な観光地の一つ奈良。外人さんも鹿センベイを買って楽しんでいる。鹿も「ハロー」や「ニイハオ」ぐらいは覚えただろう。

擂り胡麻がさあどうすると届けられ

唐津市　坂本　蜂朗

（評）料理の脇役としてあなどれない力を発揮する「擂り胡麻」。さて、用途無限の素材をどのように生かすか、腕の見せ所である。

身代わりに破れてくれた作業服

橿原市　居谷真理子

（評）ありがたいことである。このように、「身の回りの物品すべて、自分の相棒であり味方である」と思えば、少しは心強く生きてゆける。

豊作の野をほくほくとローカル線

茨木市　藤井　正雄

（評）豊かな田園風景の中をのんびり走るローカル列車。殺風景な街で磨り減ってしまった「こころ」を取り戻すのに絶好の乗り物。

いいものですねみな脱ぎ捨てた冬木立

西宮市　緒方美津子

（評）まるで脱俗の仙人のようにスッキリと立つ裸木。わたしたちも、欲望や雑念から解放されると、あのようになれるのかもしれない。

ウォーキング冷やかすように雪が降る

堺　市　加島　由一

（評）「おいおい、何をあくせくしているの？」「医者から五キロ減らせと言われたの？お気の毒」とでも言うように、雪が耳をかすめる。

良かったわみんな一緒に歳が増え

藤井寺市　津田シルク

（評）わたしだけなら哀しいが、みんな一緒だから平気。これからも仲良く一緒に歳を増やして、ギネスブック入りを目指しましょう。

葬式が続き生き方考える

箕面市　出口セツ子

（評）長寿を目指して頑張ってきたが、次々と友人が逝くと考えさせられる。やっぱり、好きな物を好きなだけ食べて太く短く生きようか。

賽銭を見て神様の初笑い　高槻市　片山かずお

自惚れの耳にお世辞が心地好い　鳥取県　加賀田志延

ドカ雪に叱られている冬仕度

ヘルプミー雪中で呼ぶ年始め　奈良市　岩本　浩二

賀状来ぬ友の安否が気にかかる

妻の影三歩下がって踏んづける　堺　市　矢倉　五月

少年と少女ごっこのメール打つ

貴方より年上ですと言いそびれ　青森県　松山　芳生

人工授精エロスの神に叱られる

生きてます浮世の錆を剃りながら　芦屋市　黒田　能子

ぞろぞろと歩くのもいい初詣で

神様がわたしの寿命決めるのか　三田市　北野　哲男

黄昏でないぞ傘寿は夕映えじゃ

お湯割りの酎一杯が句読点　海南市　堂上　泰女

私より良いママしてる案じた娘

バレンタインデーはいつかと小一が　弘前市　高森　一呑

もらい泣き椅子もいっしょに泣いている

大阪市　田浦　實
レモンより檸檬の方が素敵です

奈良市　辻内げんえい
鬱の字はやはり漢字がよく似合う

堺　市　村上　玄也
痛　痒　疲　老いを悩ますやまいだれ

福島県　七ツ森客山
かなしみの形で雪の六地蔵

熊本県　岩切　康子
転倒しとことん夫に叱られる

唐津市　市丸　晴翠
影踏みもしたねと傘寿同期会

枚方市　伊達　郁夫
雷鳴に駆け込みレジの列に居る

豊中市　安藤寿美子
ローンでも良いとチラシが言う墓石

大阪市　小谷　集一
息子からお古を貰う老いの冬

米子市　後藤美恵子
ご先祖は皆貧しくて農民で

鳥取市　岸本　宏章
動かない筈リモコンをまちがてた

海南市　三宅　保州
いらっしゃいませ医者に言われた事がない

三田市　上垣キヨミ
事なかれ主義に徹して日向ぼこ

橋本市　石田　隆彦
肝臓は今年も元気屠蘇うまい

海南市　小谷　小雪
どか雪にオール電化の落とし穴

弘前市　髙瀬　霜石
妖怪のパワー大雪には勝てず

八尾市　村上ミツ子
どこの国の歌合戦か大晦日

大阪市　古今堂蕉子
診察券婦人科以外全部持ち

三田市　堀　正和
ご健勝のことと勝手に決めないで

弘前市　今　愁女
箸置けば薬の水をくれる店

八尾市　田邊　浩三
若作りしたのに席を譲られる

鳥取県　細田　裕花
小数点の極限を追うアスリート

堺　市　奥　時雄
自画像は眉鼻耳を太く描く

香芝市　大内　朝子
梅干も自家製のなら喜ばれ

豊中市　水野　黒兎
酒の量もはや娘にかなわない

大阪市　谷口　義
がん告知されても腹は減るだろう

西宮市　片山　忠
まだ若いつもり身体の一部分

篠山市　酒井　真由
手も足もなんとか動く生きている

鳥取市　土橋　螢
食べている時は静かな口なのに

和歌山市　木本　朱夏
腹八分守れるわけがありません

大和郡山市　坊農　柳弘
挨拶がうまいさすがに名誉職

西宮市　泉水　冴子
表向きは長寿うらでは老害と

枚方市　海老池　洋
妻子からやっと解かれて初仕事

応援歌年賀状から聞こえます

トン・ツーと訴えかける不整脈
合いの手がなくて留守電言い辛い
覚悟して挑めば老いもまた楽し
死にざまの事など思う冬の底
古稀記念恩師囲めばみな童
里芋はとろりと村は冬仕度
北枕で寝ても長生き出来ました
何年も暮らして水くさくなった
詰め込まれちりめん雑魚の顔になる
野放しが一番性に合っている
手袋の片方だけが落ちている
プラトニックラブなら今も冬麗ら
昭和史の中で兎の肉も食い
山葵　生姜　辛子でマンネリを和える
愚痴を聞くそれも楽しい縄のれん
夜空から弾かれたのか流れ星
旬のもの食べて元気な過疎の母

補聴器も雪積む音は聴き取れず　河内長野市　坂上　淳司

兄が逝く今日世界中凶になる　藤井寺市　太田扶美代

錠剤は転がるようにできている　京都市　都倉　求芽

子ら帰り置いてきぼりの雪ダルマ　鳥取県　平木　公子

孤独よしパチンコ台の独り占め　吹田市　太田　昭

十四時間渋滞しのぐこれも旅　生駒市　飛永ふりこ

一夜明け空の青さに仲直り　河内長野市　村上　直樹

他人様の痛みに感度薄すぎる　倉吉市　野口　節子

厄除けのぜんざい会にアルコール　岸和田市　井伊　東吉

金婚式もうやけくそで添いとげる　橿原市　安土　理恵

品格も育ちもわかるバイキング　米子市　高田　振作

リズム体操わたしはやっているつもり　西宮市　牧渕富喜子

燃え尽きた顔が並んで通夜の酒　大阪市　岩崎　公誠

言い訳の種が尽きたか寝ると言う　和歌山市　古久保和子

屑籠へ溜息ばかり捨てている　弘前市　福士　慕情

空耳か禁煙すると聞いたのは　和歌山市　福本　英子

自堕落な生き方三日許されよ　姫路市　古川　奮水

強がっても輪ゴムの命弱いもの　鳥取市　坂本とも湖

両輪が軋みながらも歩調とる　神戸市　山口　光久

幸せが口癖になる八十五　八尾市　髙杉　千歩

事故現場せめてもの花すぐ萎れ　唐津市　仁部　四郎

母の形見ようやく似合う歳になり　大阪市　大川　桃花

目立たずに魅せ脇役の貝ボタン　泉佐野市　稲葉　洋

声変わり孫は無口になってゆく　東京都　岸野あやめ

思い出し笑い一人で楽しめる　鳥取市　中宇地秀四

お手頃の相手ですとはシッケイな　堺　市　志田　千代

干渉もしない支援もお断り　唐津市　山口　高明

幸せの扉よ春へヒラケゴマ　東大阪市　北村　賢子

天国が有ると思うと欲がでる　高槻市　富田　美義

欲深い心洗いに初詣　京都市　桝本　宏子

棒鱈の甘煮に母が目に浮かぶ　高槻市　初代　正彦

月参り石切さんも待ってはる　大阪市　笠嶋　惠美

雪深し除雪体操ばかりする　鳥取県　竹信　昭彦

年齢に応じています丸い背な　加東市　黒崎美紗子

人柄も雑巾掛けも丸いです　河内長野市　松岡　篤

幸せを分けあうように切るケーキ　富田林市　片岡智恵子

それにしてもメロンは威張りすぎている　和歌山市　柏原　夕胡

もみじ葉が郵便受けに届いてる　鳥取市　鈴木　一弘

道楽で買った書物が積んである　西脇市　七反田順子

処分処分棚からこぼれそうな本　藤井寺市　俣野登志子

途中下車させてもらえぬシャトルバス　八王子市　上原　酒坊

事情など聞いて困ったことになり　藤井寺市　鴨谷瑠美子

紀の川市　辻内　次根
酒飲んだ時だけ開く窓がある

富田林市　中井　アキ
始発駅景気回復待っている

大阪市　井丸　昌紀
今年こそ句集を出すと言い回る

寝屋川市　冨山ルイ子
家族守る覚悟を持ってまだ傘寿

豊橋市　藤田　千休
総理より一兵卒の頭が高い

シドニー　坂上のり子
星占いに書かれたままの日になった

高槻市　乙倉　武史
一人旅ペンと手帖は枕許

大阪市　神夏磯典子
言い訳をして私を甘やかす

鳥取市　武田　帆雀
僕だって踊れますやろ阿波踊り

河内長野市　針生　和代
酷暑から極寒地球大謀叛

唐津市　樋口　輝夫
百均の老眼鏡で見る憂き世

大阪府　桑田ゆきの
愛犬にスキンシップも日溜りで

豊中市　藤井　則彦
飼犬に序列をつけられる家族

藤井寺市　若松　雅枝
三キロも減って片脚立ち出来た

奈良市　矢野　良一
誉め言葉あんたの歌は味がある

箕面市　広島　巴子
息子らも落語じっくり聞く歳に

枚方市　二宮　山久
アンテナの向きを変えたいこの不況

鳥取県　西谷　悦子
文化度が少し足りなくなる二人

東大阪市　西田いくひろ
税務申告儲からぬから恐れない

弘前市　岡本　花匠
地吹雪へ無謀をさけて囲炉裏端

尼崎市　小池　幸子
娘の手借りて今年も無事おせち

和歌山県　森下よりこ
辻褄を合わせて年をやっと越し

鳥取市　田村　邦昭
北風がなぜか貧しい者ねらう

寝屋川市　森　茜
北風へ洗濯物がフラダンス

大阪市　坂　裕之
真冬でも何はさておきまずビール

三田市　石原　歳子
のんびりと客が来ました大晦日

米子市　成田　公一
ユニークね褒めも貶しもせぬ言葉

岸和田市　雪本　珠子
様様な人生ドラマ見てる月

香南市　桑名　孝雄
ちっぽけな諍いなどはせぬ八十路

鳥取市　高浜　勇
金だけは上から下へ流れない

豊中市　松尾美智代
今が旬いつも思って暮らしてる

大阪市　松尾柳右子
山茶花に雀二羽来て癒される

大阪府　小栢こずえ
ハイヒール昔の証置いてある

今治市　渡邊伊津志
三角のとんがり齧る握り飯

寝屋川市　小谷　滋彦
老老の笑顔のなかの晦日そば

紀の川市　宇野　幹子
初日の出仁王の頬もゆるみがち

大阪市　津守　柳伸
炊き出しの握りに咽ぶ山陰路

鳥取市　岸本　孝子
この歳でお経の暗記苦手です

弘前市　稲見　則彦
古背広カルチャーバッグに変身だ

和歌山市　武本　碧
秘すれば花夢の続きはポケットに

明石市　糀谷　和郎
同じ値なら足は美人の店に向く

日高市　根岸　方子
欠席へこれでいいかと念押され

誹風柳多留一一篇研究 67

山田昭夫・増田忠彦
山口由昭・小栗清吾
伊吹和男
清　博美

519 **おし鳥ハ夫婦けんくわの池へ来ず**

山口　「鴛鴦の契り」という言葉があるが、鴛鴦は夫婦仲が良い鳥として有名である。いつも番で池などを泳いでいるからである。人間が夫婦喧嘩をしていると鴛鴦もこないよ、という戒めのような句。池は例えで本当の池ではない。

おし鳥のとび込ム水に音ト二ツ　宝13信1
おしどりハ水ぎハのたつふうふなり　三二26

小栗　賛。しかし、何が面白いかよくわからぬ句。

伊吹　賛。何か故事でもと思い調べましたが何も出ず。

清　賛。

520 **気ほうじに須广寺へ来る中納言**

山口　きほうじ【気放】は、気晴らしに同じ。（「日国」）

中納言在原行平は阿保親王の第二子で業平の兄である。役に不満の意を持つ歌を詠んだとして光孝天皇の逆鱗に触れ、須磨の浦に流されたと言われている。そこで松風村雨姉妹と馴染んだことはつとに有名であるが、主題句は「鬱屈するから気散じに須磨寺へ行ったろう」という想像句。須磨寺は西須磨上野にあり、光孝天皇の勅命により仁和二年開鏡上人によって移された上野山福祥寺で、現在、真言宗須磨寺派の総本山である。

配所でも須广ハいきまな所也　筥二13乙
詠むつらをして這入る須磨寺　眉斧五

清　賛。

521 **御朝寐の御つぎ高尾がうわさなり**

山口　川柳には多い仙台伊達綱宗と吉原の高尾太夫のエピソードを詠んだ句で、高尾の下へ吉原通いを続けた綱宗が朝寝をするので、お次の間に控えている者達は高尾の噂でもちきりだったろうという句。

つなわたりすると高尾も玉のこし　安八桜2
奥中で高尾が顔を待ぼうけ　七8

清　賛。

522 **女郎かいけいせい買をあざ笑ひ**

山口　女郎も傾城も本質的には同じであるが、女郎で下等な売女を意味し、傾城で吉原の高級な花魁を表しているのであろう。花魁を買うとなると諸事入費が大変で、見栄を張って、そんな工面をするより岡場所や河岸見世の女郎を買う方が安直で肩も凝らない、という負け惜しみ。「目くそ鼻くそを笑う」のたぐいと思うのだが。

ゆやへ来て咄スハ安ィ女郎買ィ　明五桜3
はなうたて来るのハけちな女郎かい　一七41

清　賛。

523　**ぐつとこゞんてぶつかけを蝦ハ喰ィ**

山口　「ぶっかけ」は今日で言う「かけそば」のことで正確には「ぶっかけそばぎり」、安永末頃から「かけ」と呼ばれるようになったらしい。『女用知恵鑑』（明和六年）には「皿はとりあえず下におきながら喰ふべし」とあって、正座の状態で上体を屈めて食べるのがマナーであったらしい。「かけ」は「もり」にくらべてやや下品な食べ方と考えられ、良家の子女は口にしなかったという。

しりを高クしてぶつかけむすめ喰ひ　安五礼2
ぶつかけを花蝦片ッ手ついて喰ひ　安六松1

清　賛。

524　**なまわかいなりでと巨燵追ィ出され**

山口　「なま」は「中途半端に」というような意味の接頭語だが、ともかく「若いなりをして炬燵になどはいっているな」と叱られて追い出される。今でもよくある図。

なまがみな事も請取ル若盛り　宝11天2
へをひつてていしゆこたつをおひ出され　安五鶴2

清　賛。

525　**ふん切レと他人のいけんおそろしい**

山口　「ふん切る」は「決意する」「実行に踏み出す」などの意味だが、対象となるものが何であるかはこの句からだけでは解らない。男女関係のことや、仕事の事なども含まれよう。ともかく、「思い切ってやれ」と友達かだれかがけしかけているのである。うっかり乗って失敗しても結果は自己責任である。他人の意見は親切そうにみえて無責任だという句。

ふん切リの無ィ切レふみハねんが入リ　明元仁1
ふん切た事も知らせず四火をすへ　三〇9

山田　賛。いつの世にも、そんな輩が居るのですね。

清　賛。

526　**いらぬ事いますがごとくつくりたて**

山口　これは先人の指摘のように論語の「祭ルニ在スガ如クシ、神ヲ祭ルニ神在スガ如クス」と言う祭祀の重要性を述べた一節が下敷きになければ面白さの半減する句である。後家が死んだ亭主に対してまだ生きているかのように化粧して飾り立てているが、そんな厚化粧は無駄なことであるというのである。なぜなら、本当は亡き亭主に対して化粧しているのではなく、生きている周囲の男に対してつくりたてているからである。後家の盛んなことを当てこすった句。

清　賛。

527　**ぢうくふをいふなと下女をせなしかり**

小栗　じゅうくうは、勝手気ままであること。またそのさま。（「日」）

下女に対して、田舎の兄が「勝手なことを言うんじゃない」と叱っている様子。どういう「勝手なこと」か表現されていないが、例えば出替わり時期に、下女が「もう田舎へは帰りたくない」などと駄々をこねている場面などが想像される。

清　賛。

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　七二四句）

「セット」　三宅保州選

お説教が済めば貰えるお年玉　東京都　井上つよし
ランドセル虎とセットでやって来る　豊中市　池田　純子
播磨灘セットの名所薫風碑　東かがわ市　川崎ひかり
ポイントとセットで無駄を溜めている　西宮市　亀岡　哲子
セットした髪を美容師だけが賞め　宇部市　平田　実男
回覧板セットした髪見せに行き　大阪市　原田すみ子
アラームをセットしないで済む歳に　高槻市　初代　正彦
セットした目覚ましよりも早く起き　堺　市　近藤　治子
花嫁が挙式セットに付いてない　鳥取県　竹信　昭彦
家具一式に新郎セットされていた　橿原市　安土　理恵
応接セット大きい家が欲しくなる　茨木市　藤井　正雄
応接セット今はお客の数も減り　紀の川市　北山　絹子
あと一球でゲームセットにコマーシャル　豊中市　藤井　則彦
熱戦へセットカウントさえ忘れ　日高市　根岸　方子
セットポイントここから先が弱い僕　富田林市　山野　寿之

「セット」　山本希久子選

セットした髪をくすぐる春の風　豊橋市　藤田　千休
お習字の道具そろえただけでした　豊中市　安藤寿美子
父母のよにセットで仁王立っている　八尾市　宮崎シマ子
お説教が済めば貰えるお年玉　東京都　井上つよし
セットなら少し値打のでる夫婦　大阪市　奥村　五月
ポイントとセットで無駄を溜めている　西宮市　亀岡　哲子
新春のセット楽しむ福袋　姫路市　古川　奮水
母の日とセットでいいの父の日は　鳥取市　深澤千恵子
就活とセット振袖揺れている　阪南市　森村　美花
一揃い百科辞典は飾り物　さいたま市　星野　育子
混迷とセットで渡る泥の船　大阪府　高木　道子
日の丸がセット組みたい国連旗　唐津市　仁部　四郎
妻達のランチセットが姦しい　札幌市　佐藤登美子
セット社会人の生き方問うている　尼崎市　田原　一兆
セットでは無理だなバラで一つ買う　竹原市　石原　淑子

まだゲームセットにさせぬ母介護　和歌山市　磯部　義雄
来し方はファイナルセットまで続く　神戸市　山﨑　武彦
子の夢が親のセットに収まらぬ　岐阜市　平野あずま
大中小セットで持っています夢　四条畷市　吉岡　修
カスミ草添えて花束でき上がる　弘前市　福士　慕情
カスミ草どんな花にもセットされ　大阪市　小泉ひさ乃
夫婦茶碗どうしてこんな差があるの　神戸市　木村貴代子
夫婦茶碗夫の方がまた欠ける　大阪府　米澤　俶子
寄せ鍋にワインをセットする若さ　豊中市　水野　黒兎
サプリメントセットで届く容赦なく　大阪市　柴本ばっは
交通費セットされてる思いやり　川西市　米原　雪子
藁屋根をオール電化し粥を炊く　田辺市　岡本　昇
フレンチのおせちセットでおもてなし　堺　市　源田八千代
フルコースだけどワインは付いてない　愛知県　早川　遡行
うどん定食大阪だけに有るメニュー　神戸市　白川　淑子
ランチセット魚野菜に御御御付　西宮市　山本　義子
セットした機械に導かれてます　海南市　堂上　泰女
まかしときと刃金にガラスセットされ　大阪市　古今堂蕉子
お習字の道具そろえただけでした　豊中市　安藤寿美子
人間ドックセットになって出る病　京都市　三宅　満子
爺ちゃんも一緒に来るか聞いてくる　堺　市　志田　千代
財産はあるが姑セットです　大阪市　大川　桃花
ブレーキをセットされててもう翔べぬ　寝屋川市　冨山ルイ子

約束がセットしてある砂時計　鳥取県　細田　裕花
攻めてくる不況とデフレワンセット　交野市　森本　弘風
川柳とセットでしゃんと生きている　池田市　上山　堅坊
影法師だけは私を見捨てない　紀の川市　宇野　幹子
仮の世のセットでドラマ演じきる　松江市　三島　淞丘
神さまが下さった色サンセット　大阪市　升成　好
セットから外れ気楽に生きている　富田林市　中井　アキ
神様がセットしたのか貧富の差　田辺市　岡本　昇
爽やかな笑みセットして逢いに行く　鳥取県　斉尾くにこ
楢山がファイナルセットそれもよし　宇部市　平田　実男
残り時間明るい方へセットする　松江市　松本　文子
カスミ草添えて花束でき上がる　弘前市　福士　慕情
セットした舞台に潜む修羅阿修羅　鳥取市　今　愁女
ペンとメモセットで夢に灯を点す　海南市　有沢せつ子
ひたすらにセットの隅で出番待ち　大阪市　小谷　小雪
リセットが出来ぬこの世の網渡り　米子市　安藤なつこ
ラニーニャが冬将軍をセットする　堺　市　生田　寒之
セットしたピンみな倒す爽快さ　高石市　大隅　克博
ワンセット買って半分差し上げる　米子市　浅野　房子
セットで住んで何故か扉のあるくらし　堺　市　政岡未延子
念入りにセットされてる落し穴　鳥取県　村上　玄也
マイナスとプラスセットで攻めて来る　羽曳野市　大塚美代子
留守電をセットしてから昼寝する　酒井　一壺

白と黒ネクタイ二本ずつがある　鳥取市　土橋　螢
反戦と平和はいつも一セット　富田林市　古田　千華
ワンセット買って半分差し上げる　高石市　浅野　房子
釘と金槌父の教えが生きている　田辺市　小川　イセ
リセットはお手の物です女です　河内長野市　山岡冨美子
根雪までセットされてる不眠症　弘前市　高森　一呑
豹柄のセット浪速につむじ風　河内長野市　村上　直樹
おばちゃんのお出掛けセット水と飴　奈良市　阿部　紀子
尉と姥セットで鎮座するケース　大阪市　津守　柳伸
風水の通り鏡をセットする　鳥取市　倉益　一瑶
一式で臓器を寄付と遺言書　高槻市　富田　美義
お見事なゲームセットだ家族葬　堺　市　柿花　和夫
リセットをしても時間は戻らない　京都市　高島　啓子
墓石とセットになった曼珠沙華　米子市　生田　寒之
有頂天と孤独セットでやってくる　藤井寺市　太田扶美代
影法師だけは私を見捨てない　紀の川市　宇野　幹子
昭和まだ続く親不孝も続く　弘前市　髙瀬　霜石
恋はもう闘いに似てフルセット　橿原市　居谷真理子
リセットが出来ぬこの世の網渡り　大阪市　安藤なつこ

秀　句

仮の世のセットでドラマ演じきる　松江市　三島　淞丘
残り時間明るい方へセットする　松江市　松本　文子
ふたり分セットで買えるお蔭さま　香芝市　大内　朝子

ゲームセットまでゆっくりと万歩計　豊中市　松尾美智代
セットするとても大きく深い皿　海南市　堂上　泰女
恋はもう闘いに似てフルセット　橿原市　居谷真理子
大中小セットで持っています夢　四条畷市　吉岡　修
ゲームセット勝者の陰に敗者みる　堺　市　澤井　敏治
人生のセットにいつも花がある　大和高田市　鍛原　千里
軸足ぶれセットポジション決まらない　長岡京市　山田　葉子
一生にセットされてる幸不幸　大阪市　笠嶋　惠美
北の国ゲームセットにしませんか　京都市　桝本　宏子
張りぼてのセットのような国に生き　羽曳野市　吉村久仁雄
モーニングセットに馴らされた夫権　八王子市　播本　充子
太陽と月と地球は離せない　鳥取市　竹口　清信
減税の裏に増税セットされ　米子市　吉田　陽子
ゲームセットまで全力で生きていく　鳥取市　高浜　勇
フルセットたたかい抜いて華になる　河内長野市　山岡冨美子
セットした髪に未練が絡みつき　大阪市　神夏磯典子
鴛鴦の二人三脚転びつつ　大阪市　寺井　弘子
明日の米研いで明日をセットする　枚方市　伊達　郁夫
有頂天と孤独セットでやってくる　藤井寺市　太田扶美代

秀　句

ゲームセットゆっくり母は銀河行き　奈良県　渡辺　富子
青春へリセットボタン押し続け　河内長野市　坂上　淳司
アメとムチセットになっているこの世　鳥取市　夏目　一粋

麻生路郎句抄

（句集『旅人とその後の作品』から）

不死鳥

襯衣一枚で書いた労働運動史
代診はバットをさして立ち上がり
夕刊の漫筆皺になったまま
盗塁へ夕日は既に落ちてゐる
今日中に着いたらよいと牛思ひ
本店は碁盤が据えてあるばかり
門弟の出たと思へばもう打たれ
活劇のやうにもみえる水上署
相談をして洋服を着る養子
浜辺まで見にやらされる許嫁

水の垢

軒店へ昨日やけふの客でなし
いつづけのもう刺身でもなかりけり
新店はそれもすぐ来るやうに云ひ
品切れにそのままそこへ話し込み
本店が椅子になるのも近いうち
いのちさへあればと思ふのみ仲居
居候が今は高座に生きてゐる
馬鹿な話だ傘一本を持ち廻り
醜男の哀れ使はれ損になり
弟の厄介ですと吸入器
板の間に寝たがこの頃金を貸し
戯曲に生きんとすと云ひぬソーダ水
この頃の疲れさんでりやは重し
誘うても呉れぬほど髭のびてゐる

偶然

宮尾みのり選

偶然が重なり合って人の縁　(七)順子
あの事故は偶然だとは思われぬ　圭一郎
偶然の川柳出会い杖になる　正二
一冊の一行吾の羅針盤　(岩)實
偶然の出来事を買う保険金　(後)美恵子
偶然に出逢って過去が甦る　准一
偶然も必然もない腹が減る　秀四
偶然のチャンスに見栄が邪魔をする　奮水
宝くじ北見へどっと舞い下りる　方子
偶然が重なりいのち拾いする　雅明
手をぐっと差し出したので買った猫　のり子
偶然に持ってる訳じゃない運気　裕花
偶然の出会いが修羅の幕を開け　千休
初恋が発酵したら大吟醸　一呑
神の意図ときに外れることがある　公一
出会えたのも別れたことも赤い糸　修
はしゃいだ妻の声きく喫茶店　千歩
偶然をつかみ損ねて隅にいる　大鯰
偶然の期待を神があざ笑う　(片)忠
僥倖をあてにしているジャンボくじ　比呂朗
偶然の出会いに神が呉れた愛　寿之
すれ違うおんなじ歌をハモってる　(田)章子

偶然が若い二人に火を点けた　弘風
モナリザの笑みは偶然かも知れぬ　(花)順子
祖母が逝き孫が生まれて擦れ違う　(吉)いさお
霊柩車がゆく救急車が止まる　芳生
街中で偶然聞いた国訛　ゆきの
天災が偶然だとは限らない　時雄
新宿のスクランブルで妻と遇う　酒坊
偶然じゃない砂漠化も豪雨禍も　茂代
ライバルとばったり出会う病院で　正和
会ったのは偶然別れたのは必然　久仁雄
ふたり共田舎育ちで町が好き　日の出
フィギュアに偶然はない冴えた技　宏子
偶然じゃないはやぶさの地球着　(山)節子
聞き耳が噂を噛り走り出す　碧
偶然じゃないと手を振る影法師　(稲)則彦
佳
貝の口偶然開いてうろたえる　ふみ
両隣の絵馬に同じの志望校　晴翠
偶然にどちらも託びて風抜ける　(宮)弥生
躓いて偶然見えた人心　(上)紀子
偶然にしておくなんて大人だな　ばっは
人
偶然と虫の知らせが符合する　哲男
地
実力の椅子偶然を信じない　岳水
天
偶然も味方に入れた優勝旗　宇野幹子
軸
袋戸棚の中で眠っていた昭和

淡い

米澤　俶子選

あこがれはピンクの似合うおばあさん　(白)淑子
健康にいいけど味が淡すぎる　圭一郎
就活の淡い期待の矢が折れる　(西)悦子
淡淡と話し急所を突いてくる　淳
春の日の淡い記憶を綴じてある　次根
高齢化だんだん淡いお付き合い　かつ子
褒められて淡い優越感抱く　奮水
淡白な方で話の艶に欠け　孝雄
絶滅と言われた筈の淡水魚　准一
淡い香の残る摺子木木の芽味噌　(畑)節子
淡白な味が素材を引き立てる　(花)順子
恋だろか淡いうちなら摘めたのに　修
鳥の音が澄む早朝の霧の海　泰女
落とし蓋取ればわたしの淡い味　敏子
日本の未来の形淡くなり　直
抽象画淡い色など使わない　孝一
淡白に見せて損得巡らせる　時雄
寒風に私の影が薄緑　小雪
喪中欠礼淡い墨絵の蓮の花　輝夫
散る前は花の色さえ淡くなる　(後)美恵子
淡い恋抱いて少女は鳥になり　菜摘
不況風老後の淡い夢壊し　玄也

アルバムに淡い思い出閉じ込める　淞丘
追憶は淡い色だが消えぬもの　弘一
人間の不遜見ている昼の月　岳水
もしかして淡い期待をしてしまう　朝子
明け方の淡い光をじっと待つ　かずみ
淡色が黒引き立てる山水画　洋
ランドセルうす桃色の蕾あり　哲男
町会費払って淡い縁つなぐ　公誠
恋になる淡い予感のするメール　富子
淡い夢いくつ消えたかシャボン玉　美智代
淡雪の如く消え去る諭吉どの　淳司
花びらに淡い期待の来る来ない　美義
仮名文字の淡墨色が美しい　螢
定年日淡いピンクのシャツを買う　四郎
猪口一杯ほんのり下戸を染め上げる　茂代

佳

古希過ぎのやや色淡き影法師　黒兎
日の丸で送った淡い恋でした　千歩
ちひろの絵淡い世界に包まれる　(矢)五月
歳月が人の思いを淡くする　碧
やっと春空気も淡いピンク色　賢子

人

ポケットに花鳥風月遊ばせる　霜石

地

消えないで欲しい高松塚の美女　(志)千代

天

京菓子のような男に救われる　播本充子

軸

介護法出来て絆が淡くなり

そわそわ

松山　芳生選

明らかに挙動不審の休肝日　遡行
そわそわとおんなの席が埋まらない　幹子
指切りの小指はいつも上の空　富子
花占いそわそわ恋を待っている　政勝
本番へ喉がかわいた舞台裏　婦美子
待ちかねた手紙の届く日のポスト　玄也
両側に美女が座っている座席　公誠
ハートマークついた手紙を抱いている　朝子
お誘いのそわそわ命はしゃいでる

勇

土壇場でそわそわしてるDNA　比呂朗
そわそわと待ち受け画面小半日　黒兎
そわそわがにこにこになる待ち合せ　英子
娘が彼氏お連れしますと言ってから　充子
食欲もめっきり落ちた猫の恋　孝雄
そわそわを血圧計は逃さない　あずま
春を待つ花芽そわそわ弾み出す　泰女
夫がいるのに踊りましょうと誘われる　柳弘
落ち着かぬ振りで貴方に甘えてる　慕情
春の気を感じはじめた種袋　千歩
そわそわとチェンジ始めた春火燵　ヒデコ
言うべきか言わざるべきか迷う時　伊津志
そわそわの心を保つ返し縫い　みつこ
発表へ天神さんの絵馬の揺れ　像山
入閣の内示待ってるモーニング　彩子
まだ女そわそわ春の彩を選る　宏子
ブルーシャトーを聞くとそわそわする心　堅坊
出し入れを繰り返してる旅支度　東吉
そわそわを鎮めてくれた熱いお茶　(吉)幸子
人文字を飲んでも腰が坐らない　(稲)則彦
披露宴そわそわ顔は演出か　(上)紀子
落着いて行こう男の正念場　(岡)洋子
そわそわと手作り弁当二人分　(鈴)いさお
そわそわのお見合いにこにこで終る　螢
そわそわとひとり芝居のお正月　哲男
何となく春めいている子供部屋　四郎
子が読んだ答辞が耳に残らない　霜石
善人の仮面忘れて来た　ごめん

佳

そわそわが間違い電話連れてくる　(花)順子
そわそわとあなたのもとへ流れ星　くにこ
善人の群れでそわそわする私　一粋
胸さわぎ今朝のお灯り揺れにゆれ　ばっは
のんびりとそわそわが居て無事な旅　淞丘

人

凍りつく夜もそわそわ待つ温味　(宮)弥生

地

そわそわと来客の数箸の数　安子

天

焦燥の指にからまるほつれ糸　高橋岳水

軸

逢いたくて一気に齧る青りんご

初歩教室

題 ― ゆるい

鈴木公弘

皆様の句を一読して直感した第一点は「ゆるい」と「ゆるむ」とが未分化であったことでした。ゆるいは形容詞ですから、おおむね名詞を修飾する（際立たせる、引き立てる）役割を果たすのに対して、ゆるむは動詞ですから、それ自体として最小単位の文章を構成します。意地悪く申せば、この微妙な相違を確認していただきたくて出題しました。第二点として、五七五にはなっていても、私小説ふうの暴露作品ではなく、ただただ身の回りを私に教えてくださっているだけ、という句が少なくなかったことでした。川柳は自己主張の一手段だと思いますので、孫がどうした、夫がどうしたにとどまらず、その結果私はどう思うか、というところまで踏み込んでほしかったなぁと、少々残念に思いました。

【より正確を期したい句】

原 相撲取りまわしゆるいと怪我のもと　勝　治

添 相撲とる　ゆるいまわしも手の内だ

原 犬太る小正月には綱ゆるめ　冷　子

添 肥えた犬ゆるい首輪にしてあげる

原 ゆるい球親子で投げるキャチボール　とも湖

添 ゆるい球投げて親子の橋渡し

「キャッチボール」です。

原 雪も溶けゆるい三月待たされる　清

添 三月のゆるい大地を待つ草木

この投句時期には山陰地方も雪ゆきでした。従って、いきなり「雪も溶け」では観念句と言われても仕方ありません。川柳に季語は要らないということは「あっても差支えない」という意味ですので、季語の言葉を入れた句を書くときには注意が必要です。

原 肩書きの外れ背骨もゆるみだす　一　兆

添 肩書きが外れ背骨もゆるみだす

原 テンションが高いプラグゆるめてる　ミヨノ

添 テンションの高いプラグをゆるめてる

原 孫来れば財布もいつもゆるゆるい　(石)久　子

添 孫を待つゆるい財布を抱いている

原 合格で口もとゆるむ電話口　開　子

添 合格へ頬ゆるみだす電話口

原 年明けはゆるめた財布が戻らない　妙　子

添 三箇日ゆるめた財布痩せたまま

原 結び目ゆるみ荷物が崩れだす　こずえ

添 結び目のゆるい愛情くずれだす

原 せせらぎの流れゆるやか芹の群　(畑)節　子

添 せせらぎのゆるい流れや芹の群れ

原 後期からゆるい風乗り死に支度　恵　美

添 後期高齢ゆるい風吹く死に支度

（こんな気持ちになってはいけませんよ。せっかくの命を全うしましょう）

原 年のせい何事するもゆるいです　(山)久　子

添 何事をするにもゆるい年のせい

【説明・報告に読める句】

原 厳格な父にも老いが忍び寄る　義　雄

添 厳格な父にもゆるい老い悲し

原 ゆるやかに筋肉痛は二日経て　道　子

添 二日経つゆるい筋肉痛に泣き

原 神様と鬼がいないとゆるみそう　健　柳

添 神と鬼ゆるい私を責め立てる

原 年金者孫に財布の紐ゆるむ　隆　彦

添 年金者孫に財布の紐ゆるめ

この句は年金者が作者ですから、財布の紐が勝手に緩むように描いてはいけません。

原 爺ちゃんは孫のしつけにゆるくなる　智加恵

添 かわいくてゆるい躾の孫育て

原 二年間は着せる積りでゆるめ買う　綾　乃

添 二年間着せるゆるめの服を買う

原 子の躾かあさんゆるく強い父　弘　泰

添 子の躾ゆるい母とは限らない

原句からは観念論的な匂いを感じますので、母を引き立たせるように句意を変えました。

【類想句があると思われる句】

初歩教室ですので、ややシビアに抜きました。ご了承ください。

原 ゆるゆるの縛りで続く無二の友　堅坊
原 ゆるやかにひたすら前へ歩むだけ　秋星
原 ごゆるりと愛想で言って長居され　篤
添 ごゆるりと愛想を言って長居され
原 食べて寝てゆっくり過ぎたお正月　紀雄
原 ゆるい鞭我慢できない子も育て　百合江

句の中に「も」を使う場合、多重焦点を生むことがあります。また、逃げとも取られがちです。気をつけましょう。

原 ゆるい服体が服に馴染みだし　(岡)洋子
添 ゆるい服私の型に馴染みだし
原 年老いてゆるい山道おらが富士　志郎

下五が浮いているように感じます。

原 酒すすみゆるい話で盛り上がる　治子
添 酒すすむゆるい話もいいものだ
原 奥の院みちはるかなりゆるい坂　俊子
添 ゆるい坂いくつ越したか奥の院
原 八十の坂ゆっくりと生きてます　美紗子
原 子の躾ゆるくて親の威厳ない　温子

矛盾なく読めば祖母が子や孫を叱っているように見受けられますが、それでよいのでしょうか。

原 初売りにゆるむ財布が底をつく　英男
添 初売りへゆるめた財布底をつき
原 雪ゆるみゆるりゆるりと車出す　宏之
添 雪ゆるむゆるりゆるりと車出す
原 帯ゆるめやっと自由をとり戻す　起世子
原 叱られて一番怖いゆるい口調　(高)弥生

上五と中下との間に飛躍がある分、難解な句になった気がします。

原 バイキングゆるいベルトが丁度よい　ヒロ

面白い句なのですが、類想句が多いため、ここに置きました。

【入選句】

失禁の笑えぬパンツ穿いて出る　律子
ゆるいなあパンツのごむと夫婦仲　エミ
無理しなやゆるめて呉れる子が一人　(白)淑子
ネジゆるいあなた任せの好きな人　安子
ハイ・チーズゆるい顔して撮られたい　眞砂子
雪の中ゆるい陽射しがありがたい　振作
外見はゆるそう実はきつい妻　孝明
ホッとしてゆるい下りで足とられ　(後)美恵子
ままならぬゆるい坂なら距離がある　宏造
ネジ一本ゆるいくらいが愛される　憲彦
ゆるいまま頼った振りの夫婦坂　(株)玲子
ゆるい球じんわり責める技覚え　(野)宣子
高齢者ゆるいカーブも曲がれない　酒坊

「ゆるいカーブも」とすると目の位置が高くなります。したがって「高齢者ゆるいカーブが曲がれない」としてはどうでしょうか。

胃切除メタボズボンがずり落ちる　孔一
ゆるいネジ刺激与えてチェックする　孝代
結び目がゆるくて恋が実らない　ふみ子
剛速球あってカーブも生きてくる　敏治
ネクタイを緩めてからがはずむ宴　武臣
ゆるい紐かけられている背番号　志延
少しでも手綱ゆるめば前のめり　滋彦
挑んだが具が泳いでる茶碗蒸し　(福)則彦
紐ゆるく長続きしている二人　よしみ

【佳　句】

とろいけど今の歩幅が丁度よい　一子
気いつけやだらだら続く下り坂　正彦
ゆるい球混ぜて技巧が冴えてくる　憲司
禍を招いてしまうゆるい口　久美子
ずり落ちそうなズボンに雇う人ありや　のり子
ゆるやかなカーブで位置を確かめる　弘光
うっかりと手綱ゆるめたのが油断　真由
同郷と言われただけで気がゆるむ　ひとみ
踏ん張れぬゆるいパンツのゴム替える　寒之
結び目のゆるみ狙っている横矢　菜摘

【今月の推せん句】

一度着たらもうやめられぬゆるい服　大久保真澄
下駄の緒がゆるみチャンスを見失う　宇野幹子
マラソンの途中で脱げたゆるい靴　佐藤登美子

【私の句】

落とし穴ゆるい話に掘ってあり
地球史のゆるい流れに逆らわぬ

（登載漏れの方は役員が添削して返却します）

3 違いを、見分ける

いくらたくさん作っても、投句するときに判断を誤りますと、「しまった、こっちの句のほうが良かったか?」と、なってしまいます。皆さんも経験があるでしょう。

今回は、この「良い句かどうかを見極める力」すなわち「選句力（鑑識眼）」のアップについて考えてみます。

選句力は、年季を積めば誰でも多少はついてくるものですが、他者の作品を読むときに、「こころに響くか、響かないか」と意識して読むと、より一層力がつきます。

具体的には、赤鉛筆などの筆記用具を持って柳誌に向かいます。「すごい!」と感動した句には◎、「いい句だ」と思ったら○、「つまらない」と思ったら×、などのシルシをつけます。何も感じなかった句はパス。要するに、あなたの「こころの動き」を「シルシ」として残します。漠然と読み飛ばしているだけなら、良否を判断する意識は湧いてきません。チェックによって気持を集中させるのです。

本誌や大会の発表誌など「またいつか読むだろう」と本棚に仕舞い込んだが最後、再び手にすることは稀です。どうせ死蔵してしまうのですから汚しても平気です。

見極め方は「感動したかどうか?」という、あなたの感覚だけでいいのですが、論理的な裏付けとして、良い句と良くない句の違いを下段に記しておきます。当然のことながら、この指針は選句だけではなく、作句に際しても心がけるべきことばかりです。しっかり理解してください。

〔ほんとうの想いか? 想ってもいないことか?〕

優れた作品には「作者が感動したこと」「作者の真実の想い」が込められています。作品を読んで感動するということは、作者の感動や想いが伝わったということです。

一方、実感もないのに頭脳だけで作り上げた句は、どこかに「嘘っぽい」ところがあります。「想ってもいないことだろう!」と感じると白けてしまうのは当然です。

文芸は創作ですから、事実でないとダメというものではありませんが、「作者の感動」や「作者の真実の想い」が込められていない作品は誰のこころにも響きません。

〔巧みな表現か? こけおどしか?〕

創作で重要なことは独自性ですが、オンリー・ワンを目指す余りに奇を衒っているだけの句があります。難しい言葉や奇抜な表現に対しても、あなたがこころを動かされなければ単なる「こけおどし」です。騙されてはいけません。

〔ユーモアか? おふざけか?〕

洗面器で頭を叩くようなドタバタ喜劇は、すぐに飽きてしまいます。わざと「笑わせやろう」と意識して作られた句はそれと同じです。上質のユーモアは、ありふれた日常生活の中にあります。その違いを見極めましょう。

〔格調か? 格言か?〕

「良いことを言っている格言のような川柳」を、格調が高いと勘違いしてはいけません。暦の横に書いてある格言と川柳の違いをしっかり認識してください。

その他に、「リズム感の悪さ」や「表記の間違い」なども感興を殺ぐ要因になりますが、後日改めて取り上げます。

エッセー

米子はすっぽり雪の中

政岡　未延子

そもそもの大混乱は昨年の大晦日のゲリラ豪雪から始まった。

22年12月31日、鳥取県米子市を襲った大雪は、昼まえから振り出し夕方は30㎝あまりだったが、一晩で2倍、3倍の積雪になり、元日の午前5時には、観測史上最大の89㎝に達し、一面雪原になっていた。

その上、午前2時頃からの停電、身体が冷えきって目が覚めた。みな、ふるえながら、朝を迎えたに違いない。

暖房が切れ、凍える住民に追い討ちをかけるように、年明けの4日間は、断水、真っ暗な部屋、冷たい炬燵、使えない電話、使えないトイレ、見所満載の正月のスポーツはおろか、自分が住んでいる米子の様子も、世間の様子も一切情報が入らない。

食べ物に関しては、お節料理や、その他の正月料理などで、どうにかこうにか。

幸いにも家族がいてパニックにならずにすんだのだが、この状態を独りで耐えている人の事を思うと心が痛む。

山陰地方というと、雨や雪が多く、暗いというイメージがあるが、三八豪雪（一週間かけて徐々に降り積もった）以外、米子に住んでいて雪の苦労をしたことはない。降っても、5㎝からせいぜい20㎝ぐらい。

市内しか走らない私は、冬用のタイヤに交換せずに冬を過ごしている。

気象台では「この冬一番の冷え込みで、県内全域に大雪警報」と発令していたが、深刻には受け止めず、いつもの事だと軽く受け止めていた。

それでも、寒くなるならと、灯油だけは確保しておいた。

日本海の水温が例年より高いところへ、強い寒気が山陰沿岸まで南下してきたことにより、水分を多く含み重く湿った雪になった。

この重い雪が、善良なる市民をどれだけ苦しめたことか。

我が家は元日の夜に電気も水道も使えるようになり、リアルタイムな情報がテレビから入ってくるに従い、ずたずたになっている鳥取県の姿に、雪の重さをひしひしと感じた。

国道9号線での車一千台の立ち往生、大型タンクローリーがスリップして、道を塞いでの大渋滞、これでは救急車も走れない。42時間にわたっての立ち往生にドライバーの心身への負担は大きいものであっただろう。住民の生活道はどうなるのだろう。

ゲゲゲの境港市では港などに係留中の漁船等が、重い雪が一気に付着したため沈没やら転覆263隻、今回の雪は想定外と言って頭をかかえている。

暖房の切れた列車に二夜、ラッセル車脱輪という字がとび込んでくる。交通機関寸断だ。

私達の手に馴染んだ除雪用スコップ、長靴、灯油ストーブ等売り切れ、普段は当たり前に感じられていた便利さや、IT万能から電化製品に頼っていたライフラインのストップ、全く命にかかわってくる。警鐘として受けとめるべきでしょう。最後に新聞に載っていた温かい記事を紹介いたします。

大渋滞の車に、国道周辺の住民の方々が、おにぎりを千個以上も作って配布したり、9号線沿いの店を急遽開けてトイレを開放したりして、車中泊のドライバーの方々を支援されたそうです。鳥取県の人はあたたかい。

秀句鑑賞

同人吟　早川遡行

―2月号から

秀句鑑賞は三度目になります。楽しい句がたくさんありました。いつもと違って何回も読み返しながら、じっくり鑑賞させて戴きました。ユーモア溢れた秀句ばかりです。

一句でも多く紹介したいので早速鑑賞に入りたいと思います。

家計簿の仕分け何にも出てこない

両川無限

民主党政権に替わってからの事業仕分け、枝野幸夫、蓮舫議員の胸のすくような切込みにみんな喝采を送ったものだ。ところが後になって廃止に決まった筈の事業が、名前を替えて継続されていたというお粗末。政治などというものは所詮こんなもので怒る気にもならない。結局我が家の家計も、どういじくり回して見たところで要る物は要るのである。

家庭教師キャッチボールもしてくれる

志田千代

家庭教師は勉強を見るだけではいけないんだ。時にはゲームをしたりスポーツの相手をする。そんな家庭教師が求められているんだ。

黒猫と出遇って宝くじを買う

播本充子

幸運をもたらすとされている黒猫。偶然にも路地の裏通りからでてきたのに出っくわししめたっ！とばかりに宝くじを買ってみる。

さて、その後どうなったかは明らかではない。買ったという川柳はよく聞くが当たったという川柳は聞いたことがない。

急に羽振りがよくなって、新車を買ったとか、海外旅行へ出かけるようになったとか、だったら間違いなく億万長者。

酒斗辞さぬ家系に下戸の僕が居る

中居善信

酒が呑めて飲めないのではない、酒が呑みたくても飲めないのである。男にとってこんな不幸なことはない。男同士の付き合い、新の友情は酒なしでは生まれないと、僕は思っている。

兄弟はみんな酒豪なのになぜ僕だけ酒が飲めないのだろう。何度か挑戦してみたがやっぱり駄目だった。体質的なものであろう。

妻の肩揉んでポイント溜めてます

山田耕治

面白い句ですねぇ。愉しい句ですねぇ。ポイントが溜まったら何をして貰えるのか気になるところですが、そんな野暮なことは聞きません。いろいろに想像してみる愉しみのある句でほっとしています。

その他に、皿洗いで何ポイント、ゴミ出しで何ポイント、と決まっているんでしょうねきっと。早く溜まることを願っています。

侮るな風邪と女はしぶといぞ

小沢淳

風邪だからといって甘くみてはいけない。酒呑んで寝ておれば治るというものではない。若いうちはとも角、歳をとってからの風邪と女ほど怖いものはない。

年金を貰うと治るヒステリー

土橋睦子

命綱である年金、これが切れたら大変。年金だけが頼りの生活に、冠婚葬祭が重なったり、子どもが孫でも連れて帰って来ようものなら思わぬ出費になってしまう。つい小遣いを奮発してしまい後で思わぬ苦境に立たされて、次の年金日まで晩酌どころではなくなってしまう。ヒステリックな毎日が暫く続くことになる。

ごちゃまぜの女の話とめどなし

金子　美千代

ごちゃまぜの話なんだって、思わず吹き出してしまう。取りとめのない話は聞いたことはあるが、ごちゃまぜの話というのは聞いたことがない。

女性にとって話の内容などはどうでもいいのである。ただ話さえしていればー。

女どうしの会話の楽しさがこの一語に凝縮され、何んとも愉快な句に仕上がっている。

忘れ物妻のチェックを受けて出る

矢野　梓

現役の頃は、毎朝玄関で妻のチェックを受けて家を出るのが日課であった。サラリーマン社会ではごく当たり前のことなのに、こうして川柳に詠まれると、何んとも新鮮で愉しく思えてくるから不思議である。

ゆったりに見えて和服はきつうおす

荻野　像山

きもの姿を見る機会がめっきり少なくなった。高価なことに加えて着付けのむつかしさ、煩わしさが敬遠されたのと、活動的でないのも要因の一つであろうと思われる。

傍目にはゆったりと落ち着いた気持ちになる和服も、正月か成人式、お茶会の時ぐらいしか目にすることができなくなってしまった。

子は親を選べない子に見守られ

木下　敏子

子どもの世話にはなりたくない老人が増えている。自分の老後は自分で始末するという意気込みは立派だが、体がいうことを聞かなくなってはそんなことも言っていられない。

良い親でありたいと願う気持ちとは裏腹に子どもの扶けがなければ生きていけない現実。孤独死だけは避けなくてはいけない。

誤作動でたまにときめく事がある

小谷　集一

思わず笑ってしまうユーモラスな句。これが堪らない。誤作動でしかもうときめかないというのは、何んとも寂しいことではあるが、幾つになってもときめきだけは失いたくないものである。

逝くときはたらふく呑んで肉喰って

村上　直樹

そんな状態で天国へ行けるわけはないのだが、そこは川柳。なんとか希望を適えてあげたいのだが、現実は極めて難しい。

片付けて貰って増えた探し物

上垣　キヨミ

時どき娘が訪ねてきて散らかった部屋を掃除してくれるのはいいが、帰ったあと欲しいものが何処へ行ったのか探すのに一苦労。

ケンカしてまでも勝とうと思わない

高田　美代子

喧嘩するには二人いる。当たり前なことですが、面白い見解である。互いに、自分が正しいと譲らないで、激しく非難し合ったり、時には殴り合いまでして自分を主張しようとする。そんな正義感みたいなものが若いころ誰にもあった筈である。

ある年齢に達すると、波風を立てないで平穏に暮らしていきたいという思いの方が強くなり、思慮深くなっていく。喧嘩に勝ったとしても後に残るのは気まずい蟠りと、虚脱感だけである。

十二月壺を逆さに振ってみる

木本　朱夏

年越しの資金の幾らかでも出て来ましたか。いざという時のための魔法の壺。おせちも揃えなければならないし、孫たちのお年玉もちゃんと用意して置かないといけない。遣り繰りに苦労しながらもお正月は愉しい。

価値観の違う夫婦の歩が揃う

山口　光久

価値観も趣味も性格も違う二人が、互いを認め合い凭れ合って生きて行けるようになるのは晩年になってからである。夫は妻に、妻は夫に歩をあわせ。いつまでも幸せにー。

—水煙抄

秀句鑑賞

—2月号から

川端一歩

ゆっくりでいい丁寧に明日を生き

山野寿之

「ゆっくりでいい」としみじみ思う。人生至福の時かも。地味でコツコツゆっくり生きるのもいいもんだ。

仲直りするたび太くなる絆

酒井真由

そうなんだ。諍いを起こすのも人、解きほどきするのも人。太くなる絆がいい味です。

結婚をしたくなったら適齢期

泉水冴子

結婚をしない若者が増えて、親はヤキモキ、子はケロリ。「したくなったら」がいまの世相か。若者の生活力いま少しアップを。

日にいち度妻を無理して褒めてみる

國實力

世の男性の多くは妻を褒めない。この無理はおおいに奨励、必ず報われると断言。

勇気出し嫁に一言言ってやる

田中都

何を言ったのか分かりませんが、その勇気には拍手。でも笑顔を添えてを忘れないで下さい。お嫁さんの顔が浮かぶ。

左遷地で友を見付けた縄のれん

平野あずま

赴任先でなく左遷地というのが悲しい。企業戦士に〝負けるな〟とエールを送ります。

親バカはここらでちょっとひと休み

池田純子

親バカの程度にもよりますが、それは愛情の変形。ひと休みの間に周りの景色を見て楽しみましょう。梅や桜の香の中で。

笑っても泣いても皺が先に出る

下田茂登子

ユーモアの川柳をもっと多くと言われて久しい。こんな楽しい作品がバンバンと。

人間くさい人間が大好きだ

田村周子

日本は、仏教や儒教の影響でしょうか、人間の本性をあまり曝け出さないのが美徳とされてきました。でも一度しかない人生、虚飾の人生より欲望という名の電車に乗って…。

禁煙と書いて三日で反故にする

篠原久

人間も干される程にうまみ出る

岩﨑實

「干される」とはうまい表現。世間の冷たい風もその一つでしょうか、楽をして旨い汁をと思っている方々への箴言。

打ち解けて本音ぽろりと金のこと

坂上のり子

〝本音ぽろり〟がうまい。こんな間柄なら友情も壊れないでしょう。

下がり目でいつも得する初対面

松浦登志子

きっとご両親のいいDNAを受けたお顔なのでしょう。ベテランアナウンサーの顔が浮かんできました。その人の側にはいつも人が集まっています。

どんぐりを捜して熊の里歩き

竹村紀の治

昨年は熊や猿が里や街の中まで来て大騒動。責任は自然を破壊している人間に、追っ払うだけでなしに根本対策が欲しい。

雷音に沖縄の基地ふとよぎる

本田さくら

沖縄のいつまで続くぬかるみぞ。何とか県民の総意をくんだ解決を心から願う。

おとなしく酒呑むだけでほめられる

髙野不二

高瀬霜石の津軽発おもしろ景色

奇数月の連載になります。

大阪のピンとキリ――キリの巻 ②

前々号（1月号）で、「川柳塔通巻1000号記念大会」に出席するために、14時間かけて大阪に行き、偶然にも新歌舞伎座の柿落とし公演「GACKTの眠狂四郎」を、1万5千円もの大金を払って観劇し、感動したことを書いた。

今回は、その続きです。

大会の前日に、いろいろ楽しんでおくのはとてもいいこと。次の大会で、たとえ全ボツでも、遠くまで来た甲斐はあったと思える体験をとりあえずしておけば救われるでしょう。ある意味、保険ですかねぇ。

僕らの世話は、何から何まで鶴田遠野さんと長浜美籠さんがしてくれた。津軽隊の隊長の福士慕情さんと、遠野さんが親友ということもあって――二人の本名が偶然同じ「哲郎」という縁ということもあって――大阪の3日間を、とても楽しく過ごすことができた。感謝。

大会の翌日。津軽へ帰る日。僕以外のメンバーが乗る飛行機は午後なので、午前中は時間がある。親切な遠野さんと美籠さんのエスコートで、あの有名な通天閣へと出向いた。放浪癖のある僕も、一応はつきあった。

みんなと一緒に、通天閣に登るための長ーい行列に並んでいたら、遠野さんがふともらした言葉を思い出した。「霜石さん。通天閣の回りには、霜石さんが好きそうな古い映画がかかっているんですよ」

そうなると、居ても立ってもいられない。

「皆さんは、通天閣の上へどうぞ。僕は、ちょっと通天閣の下を探索してきます」と、勝手に皆に別れを告げて、別行動に。映画館の場所を、地元のネーチャンに尋ねた。

「ピンク映画ですかあ?」

僕の顔を見るなり、いきなりこう言うから困る。

「ちゃう、ちゃう。フツーの映画。フツーのね」

「エー?この辺、ピンク映画しかないですよぉ。ピンク映画館なら、すぐそこ入ったトコですよぉ」

さもありなん。そこは「日劇東映」といって、右側の小屋ではピンク映画3本立てを、左側の小屋では東映と松竹の古い映画の2本立てを上映しているのだ。モギリも、トイレも、売店も共有のオンボロ劇場だった。

ポスターを見て血が騒いだ。東映の方は、北島三郎主演の「兄弟仁義シリーズ」の1本。東映ヤクザ映画はみんな似たりよったりだから、これはまあどうでもいい。

松竹の方は大変。原作・松本清張、脚本・橋本忍、監督・野村芳太郎という名トリオによる社会派推理ドラマの名作「張り込み」（1957）がかかっていた。これ観たかったのだ。名作だから、そりゃあ観ようと思えば、DVDで観ることはできる。でも、映画ファンとすれば、やっぱりでっかいスクリーンで観たいものなのだ。

入場料がなんと、1300円。安い！因に、ピンク映画の方は800円。これも安い。大阪で、ピンからキリまで体験して、意気揚々と帰路についたのであった。

山本　益子さん　安らかに

川柳ふうもん吟社
会長　両川洋々

昨年12月10日、川柳ふうもん吟社会員で、川柳塔同人の山本益子さんが急逝されました。享年80歳。

益子さんは旧・日本電信電話公社のご出身で、退職後に川柳ふうもん吟社入会。平成10年「鳥取県没句川柳供養大会」の選者を果たされ、翌年には川柳塔同人へと推挙をされました。

近年の益子さんは、転倒されての骨折入院がありましたが、いつもの笑顔の最後は、昨年11月の月例会が見納めとなり、惜しまれます。

益子川柳に派手さは有りませんが、大地に両足をしっかりと着けた作品には、安定感と説得力がありました。

遺　作

女です孕(はら)む美学に酔ってます
倦怠期やさしい風へ会いに行く
それぞれに色っぽい嘘抱いている
子を思う母の悶えは終わりない
夫婦でも毛嫌いしたい時がある
共白髪脇役の座は譲れない
座禅組む気合いの鞭がやがて飛ぶ
総裁戦チャンスのイスはどなたかな
秘密会議深夜の月に知恵かりる
村祭りガキ大将は花形に
耳掃除ウグイスの声聴く準備
思い遣り腸内美化へ先ず野菜
人生のデコボコ道に立ち向かう
天花粉匂う子集う夕涼み
もしかして台風の目は私かも
旅半ば名水訪うて元気付け
人生の大波小波急に寄る
旅支度先ずは小銭を用意する
ちぎれ雲何を拗ねたかひとり旅
ふるさとをゆっくり歌う婆あ群れ
成すことの多い余生に弾み出す
暗算の如く命日婆唱え
すだれ干しスルメも縮む冬の風
お天道様生きるファイトを有り難う
秋の空酸素不足に風くれる
カニ汁や地産地消のお献立
詰め将棋脳細胞が迷い出す
起きあがり世相見わたすだるまたち
春うらら心の扉開いたまま
春が来たわたくし七十路変身だ

ご主人には先立たれ、子供さんは結婚されて独立され、独居老人となられた益子さんにとって、川柳と川柳仲間が心の支えになれた事が、うれしいうれしい想い出となりました。

益子さん終章の川柳作品は、あの世への旅立ちを予感されていたかの様な句仕立てに、一瞬ペンが止まりました。

躓いて無色の道を模索する
自分史へ心の旅路膨らます

弔　吟

蓮の座の句会益子の句よ光れ　洋々合掌

■句集紹介

『茹で蛙』

井上 勝視 著

到達

仁部四郎

井上勝視さんは、大正10年の生まれで、昭和18年4月に、青年学校の教諭から陸軍に現役入隊して少尉で終戦を迎え、戦後は民間の会社に勤め昭和53年に定年で退職した。

私と井上さんとの出会いは、平成6年4月に、さが社会保険センター・唐津で川柳講座が始まった時である。

川柳の経歴は私の方が長かったが、人間の幅としては、井上さんの方が広いと感じた出会いだった。太平洋戦争を敗戦というかたちで、ビルマやジャワで体験し、復員後はバス会社の営業所長として、運転士、ガイド、車掌、整備士といった人々を統率してきた人ということが次第にわかってくるにつれて、なるほど、さすがにと思わせてメンバーの中心となった。平成9年から、川柳会の場は、唐津市長松公民館でのこだま会に移ったが、一貫して会の大黒柱である。

一方、故田口虹汀さんらが中心となって活動していた川柳塔唐津にも井上さんは参加して、平成11年には川柳塔同人になった。

そもそも川柳に手を染めたのは、平成元年で、それから、佐賀県文学賞、新聞の読者文芸、川柳雑誌（オール川柳）と活動の場を広げてきていたのである。

懐古句集『茹で蛙』は四冊めの句集である。

平成18年に、川柳句集『みの虫』、平成19年に雑句集『紅生姜』、平成21年に雑句文集『水溜り』が出ている。いずれもB6版で、二〇〇ページほどであるが、『みの虫』の〝はじめに〟で「大鍋の水の中で元気に泳いだ」といい、三冊めの『水溜り』では、「茹であがる前の蛙そのもの、鍋から跳ね出て初心に還る思慮も体力もなく」と書き、今回は、「何も出来なくなって唯々昔を懐かしんで、自分自身を慰めているに過ぎない懐古である…」と井上さんはいう。

二冊めの『紅生姜』の巻頭句は、「出雲には感謝しきれぬ紅生姜」なのだが、「たとえ駄句でも感謝の意を込め、ヨイショを並べ紅生姜を巻頭にした」というのである。

井上さんの句集『茹で蛙』は、或る人生の到達点だと私は思う。十代、三十代、五十代そうして九十代にさしかかる今、仕事と家庭における責務を果してきた人が、おのずと体得した人生への目配りが、技巧をこらすということもなくて、川柳という表現の力をかりて四冊の書物をうみだしたのだと私は思う。

平成18年8月に、私は唐津新聞に『みの虫』三百三十句のなかから五十句を紹介したが、そのうちから八句を書き出してみる。

いためすぎた地球に詫びる植樹祭
転んでも今日は泣かない千歳飴
二階級とんで白木の箱還る
ご先祖が人質にいる寺の寄附
大背伸びローンも済んだ妻も留守
婦長にもほのかに匂うサロンパス
ノーギャラで妻は総理を五十年
手を合わせ杖から洗う遍路宿

続いて、『茹で蛙』から十句を紹介する。

年金に引き算ズシリ新学期
しあわせだ明日の予定もチャンとある
同居した孤独を誰も気がつかぬ
子と老いの荷を振り分ける嫁の肩
金策の肩を落とした重い靴
誰よりも自分を知っている不安
隣組の社会の力いま欲しい
背の見えぬ親に子供の果し状
汚れてもこだわっている僕の色
土壇場も老妻のザイルを信じてる

本社二月句会

二月四日（金）午後一時
アウィーナ大阪

二月の句会は、四日、立春の名に相応しい暖かい日和で、投句者6名を含む105名の参加で開催された。初参加は「ふあうすと」から中川一氏。

今月のお話は太田昭さん。題は「お金と川柳」。古くから詠まれた、お金に関する川柳のいくつかを、昭さんの体験などを交えながら面白く紹介された。例えば

「新札はなぜか財布に長く住み」
「金の顔仏と閻魔裏表」
「借りるより貸してる方が遠慮する」
「せめてもと金の成る木の鉢を買う」
「金数え増えてないかとまた数え」等々。

中でも興味を惹いたのは、破損した紙幣やコインの扱い方についてのお話で、燃やしたり、濡らしたり、破ったりした場合などの、残存価値はどうか、またどう処置すれば還元されるかを細かく説明された。会場の皆さんもさすがお金のこととなるとシーンと昭さんのお話に聞き入っていた。（いさお記）

月間賞は、鳥取市の新家完司氏へ。
（司会―昭・美籠）（脇取り―真理子・宏子）
（受付―桃花・美智子）（清紀―勝弘）

席題「ブーツ」　渡辺富子選

春近しひっそりブーツ仕舞われる　希久子
耳底に残る軍靴の寒い音　無限
思い切り夫蹴りたくなるブーツ　弘一
八頭身が履くとブーツが生きている　太郎
落ちこんで居る暇はないブーツ履く　一兆
女系家族玄関に立つ棒グラフ　求芽
太腿に届く深さの娘のブーツ　哲男
ふくらはぎを自動整形するブーツ　見清
格好よくブーツを履いて若づくり　賢子
男か女かブーツの人の歩きぶり　シマ子
雪国の痛みを知っているブーツ　希久子
衿立ててブーツが決まるバックシャン　すみ子
靴屋からブーツ無くなる春隣　勝弘
にぎやかにブーツ並んで同窓会　一風
冬を割るブーツの響き勇ましく　滋彦
ブーツ屋の店主チャックに汗もかき　見清
赤いブーツわざと避けずに水溜り　りこ
ブーツ脱ぎ捨ててとびこむ彼の胸　美籠
一人居も長靴頼り命繋げ　宣子
逢いにゆくブーツへ霰嫉妬する　アキ
ブーツ嫌い軍靴の音に似てるから　和夫
アンパンマンが孫のブーツに潜んでた　修
坪庭で長靴履いて鍬を振る　勝弘
祖父懐古長靴と言うた少尉殿　正雄
青春の音ひびかせて行くブーツ　隆彦
ゴム長の泥に感謝と農の自負　俶子
奥様のブーツに黴が生えている　完司
せめてもはブーツ履きたい車椅子　保州
おちゃっぴいなブーツで冬を蹴散らかす　朱夏
キリンにも特製ブーツ履かしたい　保州
脚よりも長いブーツをはく若さ　冨美子
残り雪赤いブーツが踏んで春　公誠

佳

ブーツの中に閉じ込めている華の頃　美智代
前向きの女でブーツのいいリズム　一風
想定外にブーツ履いてる雪女　遠野
町内の卑弥呼ブーツで闊歩する　完司
ダンディズムブーツで決めた竜馬像　直樹

人

追いこしたブーツは青い薔薇が咲く　義子

地

ロングブーツでやさしい深みにはまった　よしみ

天

涙いっぱい溜めたブーツが棄ててある　公誠

軸

別れ告げ南南東に向くブーツ

兼題「二階」　伊達　郁夫選

内密の話二階へ通される　准一
二階から飯はまだかとメール打つ　雅明
二階まで夜食を運ぶ母ごころ　庸佑
嫁姑二階と下で策を練る　千里
菜の花はまだか二階の窓あける　完司
一日の始まり二階へ声をかけ　(久)千代
中二階流星群がのぞきこむ　美籠
常連のほかは知らない地下二階　求芽
二階から目薬をさす妻のグチ　弘風
二階から呼び出しかかる糸電話　寿之
音たてて二階へ上るエチケット　集一
風邪三日二階に隔離されている　美代子
メシフロカネ二階に巣喰うパラサイト　直樹
定年後二階の一間借りてます　耕治
二階から続編を聞く竜馬伝　哲夫
二階建て婆ちゃんと居る四世代　哲男
国勢調査二階に一人おりました　たもつ
二階まで行く用件をメモにする　黒兎
窓開けて風と話をする二階　蕉子
中二階どまりなんです僕の運　好
二階に住んでいるアリバイのない男　無限
二階建てバスで子供になる大人　遠野
和解の使い孫は二階へまた上る　一風
二階には干渉させぬドアがある　隆彦
カレーの匂い二階へ呼びに来てくれる　瑠美子
二階にはもう上れない車椅子　のん子
食事時だけ二階から降りてくる　玄也
怒鳴ったら怒鳴り返してきた二階　和子
ガンダムやノビタも住んでいる二階　美籠
歳月の重さが二階から見える　蘭幸
スタートは二階一間の四畳半　忠昭
お荷物のばあちゃん二階へ上げてある　公誠
佳
不都合は二階に放り上げておく　美代子
大笑いしたら二階の窓が開き　日の出
婚活にうとい二階の宇宙人　冨美子
激論のつづき二階へ行ったきり　扶美代
二階借りパントマイムが上手くなる　蘭幸
人
生意気な半熟玉子が住む二階　アキ
地
二階から降りたら妻の部下である　時雄
天
二階から見える範囲の視野である　光久
軸
上り降り迷っています中二階　美代子

兼題「ぎりぎり」　古久保和子選

ぎりぎりまで玉虫色を押しとおす　雅明
ぎりぎりの線で妥結をした労使　庸佑
ぎりぎりの線で妥協をする阿吽　無限
崖っぷち越えてガッツな風になる　千津子
枡酒を上手に口を持ってゆく　玄也
追い込まれないと浮かばぬうまい知恵　保州
消印有効に甘えてしまいます　朋月
年金を頼りに食っている余生　桃花
ぎりぎりまで粘り女神と握手する　希久子
断崖に立つと私に羽根が生え　わこ
消去法ぎりぎり一つ残す愛　啓子
ブレーキを何回も踏む火の車　光久
ぎりぎりで奇策を練っている深夜　茂
ベルトの穴もうあとがないバイキング　克己
パチンコで蛍の光までねばる　和夫
ぎりぎりの我慢二合はゆずれない　義
乗れました最終列車の最後尾　東吉
あの人が来れば全員揃います　隆彦
ぎりぎりになって足向く歯科の椅子　正雄
ぎりぎりの家計学資は削らない　遠野
どん尻の合格だとは知らぬ絵馬　哲男
補欠でもかまいませんと書いた絵馬　好
先着の十人様の十番目　保州
印籠をもっと早目に出せぬのか　郁夫
それ以上褒めると嘘が剥げてくる　和夫
ぎりぎりまで耐えてかけ込む歯科医院　耕治
車庫入れに時間がかかるウチの庭　哲男
最後までお手煩わす棺の蓋

水平線がぎりぎりだとは思わない　弘一
追い込まれぎりぎりの位置冬の月　寿之
歯きしりにくすぐってやる足の裏　美智子
ぎりぎりまで耐えた涙が海になる　朱夏

佳

休肝日二日続くとミスが出る　一歩
電車賃だけが残った三次会　完司
終バスへ走る余力を残してとく　希久子
ぎりぎりまで居座っている雪女　朱夏
おとなしい妻が歯きしりして眠る　真理子

人

極貧に強い免疫持っている　俶子

地

するだけの我慢はしたと置き手紙　直樹

天

遊び心を失くした毬は弾まない　冨美子

軸

ぎりぎりまで迷う立春の鏡

兼題「意味」　都倉　求芽選

意味を持ち始めた体操の日課　紀乃
百円ショップの意味が分かってきたようだ　蘭幸
化粧しない意味面倒なだけの事　美智子
生き申斐を無縁社会の隅で問う　富子
深い意味ないがあんたの言葉いや　公誠
ライバルに無意味な酒を注いでやる　昭
若者に不様な老後みせておく　(志)千代
一年生校歌の意味がわからない　哲男
幼児の絵に意味がいっぱい詰ってる　光久
赤ちゃんの訴え愛が聞き分ける　見清
意味のない優先席の前で立つ　蕉子
絵文字には二人秘密の意味がある　弘風
さりげなくする親切に意味要らぬ　一風
結婚は無意味だったと嘆く妻　則彦
カーテンのいる意味がある試着室　瑠美子
桐の箱に意味深長が入ってる　冨美子
譲り葉の答を置いて父の逝く　哲夫
おかあさん僕の泣き声分かるよね　堅坊
どういうつもりかチョコレートが届く　和夫
遠回しに言えばポカンと聞く感度　茂
病む床で余生の意味を自問する　いさお
意味深に言うから溝が深くなる　美籠
意味あり気な女が一人まじってた　義
生きる意味村の地蔵に教えられ　遠野
意味のない笑いは偽証罪になる　扶美代
意味もなく尻尾振る癖治らない　集一
終章の余白の意味を噛みしめる　郁夫
線引きをすると意味なく孤独感　文代
その訳をしりたくている丸い椅子　よしみ
ごゆっくり深い意味などありません　一歩
九条の意味曲解をせぬように　克己

佳

ホスピスの窓に意味など問うでない　アキ
ピピッと来たわけなど思い出せません　葉子
意味もなく淋しい時は母しのぶ　美智子
特別な意味はないけどチョコあげる　弘風
意味深な言葉で春の戸を揺する　朱夏

人

意味ありげ少し余裕をくださいな　わこ

地

父からの遺書の本意が未だ解けぬ　郁夫

天

意味などは問うまい今日も夫婦です　蕉子

軸

それなりに世間を学ぶ井の蛙

兼題「罠」　山本希久子選

誉め上手すくすく育つ母の罠　キヨミ
国道を三日も止めた雪の罠　求芽
終焉は結婚という恋の罠　和夫
それは罠淋しい老いがねらわれる　紀乃
汚れものみんな覆って雪の罠　蕉子
美しい笑顔だ美しい罠だ　扶美代
食いだおれおいしい罠にすぐかかる　ばっは
鶴橋の罠にかかって途中下車　和夫
物腰のなんとソフトな落し穴　ばっは
地雷のような罠がいっぱいネオン街　光久
次の手に酒税アップの罠が待つ　滋彦
何時罠に落ちたか職のない日本　堅坊
三食に昼寝まで付く罠がある　冨美子
我が子より優しい声で罠が来る　桃花

おかしいと思った時はもう遅い　集一
福は内鬼に仕掛けておいた罠　美代子
罠だとも知らず二月の甘いチョコ　いさお
ビギナーズラックで賭けごとに嵌まる　啓子
お喋りの中に危ない罠がある　太郎
二本目のビールに罠が詰めてある　一風
余命表のところどころに罠がある　保州
単純な罠だお金が釣ってある　哲子
罠と知りつい手が延びる冷蔵庫　滋彦
無愛想なおかげで詐欺にかからない　義子
妻の罠に嵌っていれば悲なし　光久
小さい字で裏も読めとは書いてある　時雄
罠と知りつつ盃を受けている　啓子
マリオネットの糸の脆さは罠だろう　瑠美子
幸せな罠だ料理のうまい妻　耕治
伊達直人のいきな策略から春に　富子
病とつぜん神さまの罠かも知れぬ　わこ
お菓子よりおまけのおもちゃ欲しいだけ　りこ

佳

蛇行して上手に罠をさけている　無限
あなただけ特別という深い罠　黒兎
乗換える駅に馴染みの罠がある　昌紀
罠にかかったらだいじにしてあげる　修
よろこんで堕ちてやりたい罠もある　扶美代

人

ベネチアングラスの赤は罠だろう　楓楽

地

年輪の数だけ罠を抜けて来た　弘一

天

ハンカチに包むわたしの小さい罠　瑠美子

軸

罠のようなチャンスのような花の笑み

兼題「特別」　小島　蘭幸選

ワープロがもはや特技でない社会　雅明
特別に好きと言う人おまへんな　太郎
校長の計らい全校雪合戦　耕治
見込まれて私に辛い点ばかり　修
特別な日だからと昼間から酒　玄也
特別な香りあなたのくれた薔薇　希久子
吉野家の特盛りを食う年金日　朋月
あした咲く花特別な気合い持つ　楓楽
特別な木です車道の真ん中に　真理子
聟殿に特別弱いお母さん　シマ子
サクラサクにとって置きのワイン　よしみ
特上のテキを食べたい友探す　堅坊
特別な人にはいつも詩を贈る　黒兎
特別なことしてませんよい子です　耕治
飲んで寝て特別なこと何もない　公誠
特別な用もないのにノックする　わこ
待っていますオンリー・ワンのチョコレート　完司
フルスウィングしてる二月のチョコレート　冨美子
ボージョレーを好きなグラスで飲むその日　美花

胸底に特別な日を抱いて春　みつ子
古希には古希の特別な坂あるらしい　わこ
特別に拝めば神が両手出す　隆彦
誕生日母の形見の服を着る　ルイ子
特別な色はいらない銀世界　求芽
振り込めに特別な刑与えたい　勝弘
特売の招待状が春の使者　無限
一年中特別な日を生きてます　和夫
本日の客は玉露をだすお客　和子
3Dテレビ血圧あがるので止める　義子
八十になる特別な誕生日　ルイ子
飴一つ特別だよともうひとつ　寿之
赤飯を食べたい日赤飯をたく　(志)千代

佳

高齢者に特別手当出しなさい　美代子
プライドの涙で出来ているピエロ　アキ
特別に大きいバス停の夕日　和子
特別な日には休肝日を休む　弘一
散髪の椅子が特別好きである　瑠美子

人

特別な日だけ拝める仏さま　朱夏

地

特別な人にはあげぬチョコレート　真理子

天

ともだちが来て特別な夜になる　新家完司

軸

万感を胸に特別席にいる

花地神壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。編集部

竹原川柳会(広島)　古田　太虚報

条件を丸呑みにして悔いている　半徳
人間が丸い地球で角を立て　節夫
反省に心を丸くさす力　一路
久し振り孫が賑わせ丸い風　汎美
花丸に弾みがついたランドセル　輝恵
世界中丸くなあれと千羽鶴　幸子
紆余曲折亡夫のリードで走り抜け　房子
走れ走れ走れとブブゼラが鳴るよ　蘭幸
駆け抜ける龍馬は土佐の風になる　敬子
無我夢中走り続けた昭和の灯　栄恵
隠しても悪事万里を走ります　六口
無になった写経の筆がよく走る　静風
かんぺいの笑顔が走る世界一周　和枝
飲み忘れか薬の残がまた合わぬ　慶子
名水と聞いて一番先に飲む　規代
全没のこころに飲ます缶ビール　力
コーヒーを飲んでエンジンかけるなり　笑子
六根清浄掬うて飲んだ神の水　淑子
飲んでする約束妻のVサイン　洋之祐
つるし柿一つ食べたいな夕時雨　太虚
布団干す生きてるあかし陽の温み　栄香
わたくしをハグしてくれる父の山　厚子
潔くあきらめるのも一手です　比呂子
卯年ピョンピョン跳ねて幸を呼ぶ　史子
うれしくてウサギのようにとび跳ねる　千枝

川柳塔打吹(鳥取)　野口　節子報

叶うなら欲を言わずになすがまま　貴恵
婚活で理想が叶う明日の夢　禎元
はやぶさの健気な帰還叶うまで　龍枝
拉致の娘よ願い叶えて無事帰れ　久芽代
贈り物山程積んで袖にされ　泰山
こう言えば叶うと祖母の知恵貰う　睦子
叶わない夢はない筈追いつづけ　玲坊
子の笑みに叶える母の深き愛　いさお
雑音の中に潜んでいる本音　照彦
雑音が玉音消した終戦日　和子
雑音も可愛い孫の子守歌　勝憲
老婆心親切心が雑音だ　たけ代
消防車雑音立てて火事現場　富恵
雑音の中に真実潜んでる　公恵
ジャズバンド私にとって雑音だ　芙美子
電話口奥で喧嘩の大声が　紀美恵
雑音と思って流す妻の愚痴　滋
国会は怒号と野次が渦を巻く　螢
雑音の最たるものに金の音　完司
板チョコに想いを込めてラッピング　清
板塀のすき間を覗く蔦かずら　美代子
板の間で正座の謝罪みにしみた　重忠
羽子板に今年活躍した人が　泰輔
すり減った洗濯板に亡母が住む　節子
菅さんがベニヤ板乗り四苦八苦　道子
立ち位置で違う正義の案内板　くにこ
板前の敵は回転鮨である　石花菜
成田屋の看板グラリ傾いた　紀の治
年の瀬に画鋲ばかりの告知板　玲子
色あせた立て看板が過疎語る　三津子
床板も弛み夫婦も軋み出す　善江
板壁の隙間でシベリアが叫ぶ　芳光

城北川柳会(大阪)　伊達　郁夫報

まねき揚げ京の師走の気が走る　喜美子
鬱の字を毎日書いてボケ防止　螢子
気取らずにわかりませんと聞く素直　杁香
二十年やさしく生きます夢つれて　千加
あやまちを隠して胸に憂い住む　美智子
私だけ分かるはな丸付けておく　令子
縁なのね逃げず離れず夫婦仲　あさ子
何をしたわけでもないがお茶にする　かずお

書き留めている句帖こそ我が命　妻子
一点のマーク目がけて血が騒ぐ　とし子
落葉焚き煙目に浸む胸に沁む　縣祚
気取らずに呑めて喋れる友がいい　勝弘
定年までローンが消えぬ子供の巣　麗
歳ひとつ増えて減らした過去ひとつ　郁夫
天高くスカイツリーは都のマーク　満作
俺の顔見ると諭吉はすぐ逃げる　弘風
逃げ道を作っておいて子を叱る　ルイ子
支持率がどんどん逃げていく総理　正
香典はもろとけ貸しがたんとある　じゅんこ
借金も財産ですと威張ってる　弘泰
食うてチョンだけど借金ない強み　克己
ITの進歩に規制追いつかず　東吉
逃げるから深追いしたくなる女　倫子
どれ程の供養も足りぬ父母の恩　志華子
事故現場悲しいマーク雪が消す　和夫
見栄一つ吐く鉛筆が気取ってる　柳弘
虐待のまさかのことが又起きる　修
居酒屋で風は小骨を抜いてくれ　典子
気取るほどどこか物悲しいピエロ　満洲夫
気取っても気取らなくても葱坊主　朝子
ひたむきに花は気取らず四季を告げ　野鶴
賞罰なし貸借もなし無位無冠　集一
分けてあげたい今幸せのど真ん中　たもつ
矢印の通りに進み挫折する　喜八郎
借金の形にはなれぬもう加齢　賢子

松露川柳会(鳥取)　小西　雄々報

アルバムの中から探す亡母の影　智恵子
アルバムへ亡父の軍服かっこよい　和代
たそがれて若い日恋しアルバムに　久子
アルバムに半数欠けた同期生　鈴枝
アルバムに足跡のこす物語り　公美枝
思い出のアルバム整理すっきりと　弘子
懐かしいアルバムを見て時忘れ　静江
アルバムに会いたい人が一人いる　正光
忘れたい記憶アルバム掘り起こす　雄々

川柳塔おっぱこ吟社(香川)　川﨑ひかり報

親切が過ぎてお茶まで出す羽目に　はつ恵
百歳へ夢見て蒔いたお茶の種　いさむ
音読をして遠ざける認知症　八重子
困ってる時こそ守りあう仲間　賢
灯を消せば動悸が見える姫蛍　弘
爆音も聞かずに過ぎた六十年　あきら
年金は上らぬタバコハネ上がり　放任
ウツの日は金子みすゞのページ繰る　ひかり

川柳ふうもん吟社(鳥取)　夏目　一粋報

俺の火葬だ点火は君に任せたぞ　洋々
森の中さまよっている旅人よ　公弘

佳句地十選（2月号から）

小川　てるみ

あれは幻私は蝶になっていた　笑子
北山杉ほど素直には生きられず　義
拳骨というキーマンがいた昭和　無限
甘やかされ人もかぼちゃも煮くずれる　房子
不器用で愛想笑いはせぬメロン　義子
明日逢える予感こんなに蒼い月　直樹
悪汁が濁らぬように水を飲む　文子
少年の夢はどんどん豆の蔓　寿之
辛抱のトンネル出れば花ざかり　楢代
千羽鶴愛の一羽がまだ折れぬ　毅

その時は熊と格闘してやろう　鬼桜
お多福がげっそりしたら絵にならぬ　一瑶
地球人皆んな友よと呼ぶ日待つ　金祥
リストラへ家族げっそり年の暮れ　妻子
親分と呼んで妻から金もらう　清信
冬の海兄よ友よと献花する　忠良
点火したのも消したのもみな私　美恵子
その時は祈る神様仏様　雅女
さあ友よ票に恥じない種を蒔け　三津子
アリバイは完璧友よありがとう　無限
親分の煙管に指図されている　蟹郎
割勘と言う親分に酔いが醒め　孝二
どこまでも死に神俺について来る　圭一郎

名月に親分子分酔っていた　善夫
親分が六法全書持ち歩く　毅
親分がこっそり試す紙おしめ　振作
小刻みの予定表です歳の暮れ　節子
支度して天国地獄見に出掛け　智子
死に神がウロチョロとして困らせる　一京
百歳を越せば死に神あくびする　行男
戦死した友よお前の分も生き　由美子
合掌はその時人を無我にする　菊香
その時は誰も賛成だったはず　美雪
その時に備えヘソクリ貯めておく　凱柳
その時に出会った友が今の夫　千恵子
点火した井戸端会議よく燃える　春名
げっそりとやつれ家出の猫帰る　昌鼓
愛さめた妻の心に再点火　雄太郎
その時はそれでよかった今の夫　茂登子
支え合いこころ一つになる友よ　清帆
今だって親方子方生きてます　稔
笑うなよ僕も貴女も共白髪　孝男
後ずさりしつつ人間から逃れ　一粋

川柳らくだの会(鳥取)　岸本　宏章報

蓋を取りゆずのお風呂に癒される　仁子
洗濯も茶碗洗いもポンと押す　冨貴子
勝敗の見極めつかぬヘボ将棋　(岸)清
休刊日読みかけの本また開く　せつ子
洗っても洗っても落ちない意固地　邦昭
何事もなかったように年が開け　(山)紀子
大寒の水で腑抜けた顔洗う　(山)玲子
くたびれて下戸がお開き待っている　(岸)孝子
掌を開いてみればババ掴み　大鯰
洗いたくなるから買わぬ無洗米　宏章

和歌山三幸川柳会　武本　碧報

あべこべに地図を見ている登山口　孝子
先生が生徒の機嫌取る授業　東吉
お帰りと三つ指ついている夫　絹子
青は藍より微妙な壁に阻まれる　みね
あべこべになって一巡した噂　准一
逆縁の煙まっすぐのぼらない　幹子
逆立ちで火の付くこともある右脳　碧
一日をかけてゆっくりおでん煮る　かずみ
豊かさに慣れて欠伸をしています　桂香
腹八分食べて豊かさ手に入れる　次根
今日の日を豊かな色で塗りつぶす　夢子
満ち足りて心の乾き気付かない　美枝子
豊かさは摩天楼から転げ落ち　章子
規格外あつめ豊かになる夕餉　起世子
惜しみなく豊富な知識くれる人　武
衣食住足りて心を置き忘れ　義雄
身の丈に合った暮らしが豊かも　たかこ
豊かとや紀州てまりが弾まない　町子
羊水の海に豊かな明日がある　朱夏
継続は力気合をぐっと入れ　房代
就活へ気合も底をついてくる　純子
水一杯飲んで気合を入れ直す　紀子
痩せてゆく命気合で膨らます　登美代
逆立ちで脳に気合をかけてみる　菜摘
堪忍袋に気合を入れて持ち歩く　富子
目標へ挑む気合の力瘤　当代
お迎えが来ても気合で追い返す　昇
バーゲンへ気合の入る女の目　俶子
ここ一番高見盛を真似てみる　保州
関東煮ほっこり酒の別世界　宏夫
ほっこりが消えてしまった邪魔な雨　喜久子
ほっこりしたお茶が恋しくなって秋　八重子
落ち葉に抱かれ春を待ってる秋の種　かず子
おしくらまんじゅうほっこり温い友ばかり　和子
浮雲に乗ってほっこり故郷へ　イセ

川柳塔みちのく(青森)　小寺　花峯報

友情へ水を差している妬心　きよし
生まれた時は誰もが持っている翼　霜石
どなたでも入れる隙間開けている　綾子
隙間風吹く家だけどホッとする　初枝
青いバラ追いかけ大地駆け回る　呑舟
四分休符を隙間に埋めて老いてゆく　柳子
君一色で胸には隙間ありません　和香子

ストレスを包んでくれたオムライス　ひとし
流転した石がふっくら丸くなる　美鈴
身勝手な私語で友情ほころびる　芳生
これからも希望を持って生きようよ　隼人
友情を保っています割り勘で　則彦
不器用なふっくら丸い母が居る　一呑
少しだけ希望を抱いてジャンボくじ　ふさゑ
豊満な裸婦が得意なルノアール　愁女
母と子の絆が強い乳房です　井蛙
許されてあしたを吊るす衣紋掛け　黙人
いつの日か主役夢見るトウシューズ　岳水
寝転んだ大地で少年夢を抱く　花峯
結び合うザイル微塵も疑わず　慕情
乳呑み児の頬ふっくらといい眠り　劦

川柳ささやま(兵庫)　遠山　可住報

寄り添って酒のユーモアわかる妻　久子
筆の手へいっき白紙へ勇気出す　美緒子
よその子を叱れる勇気持ち合わせ　二英
行く先も知らず流れに乗る怖さ　純子
マニュアルの通りに今日は廻り道　文子
緊張のあまりユーモア逃げて行く　美紗子
ペイオフがきかぬ女房が天下取る　哲男
はやぶさが夢と勇気を持ち帰り　稠民
塩壺にユーモアたっぷりまぜておく　真由
受けた恩返せぬままで旅の中　啓子
お返しをしたつもりです宅急便　多美子
旅土産行方考え買ったけど　開子
にんげんを真似て人気の猿の芸　可住
チリ事故で世界みんなが勇気抱く　かほる
身に余る品丁寧に返却を　幸子
ユーモアの笑い薬に苦を忘れ　照代
貸衣装返却すめばあとは楽　美智子

高知川柳社　小川てるみ報

ああ今日も無事に済んだと言う日暮　典雄
鍬洗い明日の鎌研ぎ夕暮れる　美々
夕日さんさん運動会の明日は晴　三郎
ケアハウス心残している日暮　京子
苦も楽も抱いて二人の日暮れ道　健
夕暮れてノルマ果せぬ蟻のうつ　千鳥
秋の日の釣瓶落しに人を恋う　てるみ
草食系だろう夕暮にはいない　和広

わかあゆ川柳会(島根)　松本はるみ報

横歩きしながら岸へ辿りつく　かつ子
見送ろうテールランプに罪はない　はるみ
一生に何回後悔するのやら　好栄
笹舟でちょっとの旅に出かけます　恵美子
物忘れ捻子巻き返し思うこと　英子
お彼岸ときけば春くる音がする　伸子
盃を交わして絆深くする　ちよえ
まあいいかあっさり九十と云っておく　博利
免許証頑張りました九十三　清泉

川柳塔鹿野みか月(鳥取)　福西　茶子報

筆順はどうあれ母の字は丸い　くに子
浅い瀬で溺れ死んでる独裁者　いさを
□の中に玉書いて国となる　螢
起死回生キング四枚切り札に　茶子
世を愁い心痛めている兎　(西)和子
豪雪の山陰初陽かくれんぼ　弘子
筆順を間違ってからよく転ぶ　宣子
命あり初陽に感謝してくらす　久枝
筆順を変えたら穂先迷路入り　実、満
ローマ字は筆順なんかありません　露子
初陽に祈る砲煙のない世界　(鹿)節子
故郷という筆順は忘れない　盛桜
大雪で初陽無情に舟沈め　忠良
初陽受け地球病んでるとは見えぬ　孔美子
三十余年夜を徹しても解けぬ拉致　彩子
筆順に愛の言葉が刻まれた　小鹿
一羽と数え兎の耳を羽と言い　蟹郎
ありがとうさようならまで進む筆　満
一歩踏み新たな年の陽が昇る　かおる
人生をかけトランプに吉と出る　京
初陽から脳細胞が入れ替わる　永子
老眼鏡かけてトランプ仲間入り　美代子

目印をつけたトランプ追っている　みどり
占いのトランプ恋はまだですか　みさ子
トランプのジャックは王を守ってる　㈹和　子
新雪に初陽思わず襟正す　惣　子

京都塔の会　都倉　求芽報

もう駄目と言いながら呑む三次会　鹿　太
十二月懺悔する人しない人　ますお
保護色を塗ってとことん冬支度　昌　乃
とことんまで生きてコロリと逝くつもり　満　子
京のおばちゃんもとことんまで値切る　益　子
メタセコイヤとことんのびる自尊心　宏　子
円周率とことん追ってなんになる　求　芽
聴きにくい位置を装い生返事　弘　之
言いにくいことねちねち酒に言わせてる　英　旺
言いにくい事も言わねば十二月　としこ
御し難い妻が財布を握ってる　義　昭
歩き難い道にも耐えてくれた靴　公　子
言い難いところくだいて諭される　ふりこ
耐え難い言葉もそっと聞くゆとり　則　彦
ぼやかしているが本音は見えている　比ろ志
いいヒント見つけてひとり手をたたく　肇
百均で見つけた数珠で義理果たす　美　義
電飾の林の中で会うゲゲゲ　輝　美
キッチンで夢のかけらを見つけたよ　葉　子
正論の舌曖昧をまっ二つ　欣　之
曖昧な話で腹を探られる　庸　佑

そこんとこ曖昧にせよと秘書に言う　福　子
曖昧にするからつっこむレポーター　典　子
曖昧な言葉の端にある本音　文　代
曖昧なひと言溝が埋まらない　万紗子
曖昧が我が家の平和保ってる　かずお
敵か味方か解らぬ奴と握手する　昭
幸せの中曖昧な不安感　綾　子
初恋はだいたいあいまいに終わる　啓　子

ほたる川柳同好会(大阪)　水野　黒兎報

心地よく湯舟に浸かる冬至の湯　柳　童
どなたでも初心は無垢であったはず　久　子
朝帰り心苦しいお味噌汁　信　男
あの笑顔広い心に癒される　公　子
心掛けよかったのかないい余生　桂　子
わがままを言えぬ心と共に生き　契　子
墨の色心の揺れの筆遣い　郁　子
圏外に夫の心がいるらしい　春　代
とろとろと心温まるいろり端　黒　兎
出合いから負けて妻にはまだ勝てぬ　幹　治
この出合い続けて行こう宜しくね　正　子
定めとは知りつつ哀し会者定離　勝
独楽まわし歳を忘れた白い髪　純　子
子と祝う年玉渡し新酒呑む　長　一
今年こそ幸せほしい年女　洋　子
わたくしの中に棲んでるいやな性　見　清

川柳塔唐津(佐賀)　仁部　四郎報

一輌でしっかり遮断機降ろしゆく　實
買い溜めの煙草余計に吸うている　勝　視
肩肘を張った男の誤字脱字　蜂　朗
羽があるように諭吉が翔んで行き　輝　夫
人気者の仔犬長じて番犬に　晴　翠
たらればと校長だってまくしたて　四　郎
善し悪しを教えぬ親が情けない　高　明

ローズ川柳会(兵庫)　大村貴代子報

得をして損をしちゃって皆忘れ　哲　子
望まれて一人息子が婿養子　藍
何時の日か忘れ去られるそれでいい　て　る
無事と無為無事に感謝で年送る　貴代子
後期高齢贅と倹約使い分け　年　代
再生紙です命つなげて生きてます　義　子
虹つかむ望みがあって生きられる　いわゑ
あどけない笑顔に怒ること忘れ　みつ子

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

足元を見つめて進む前かがみ　小　雪
回れ右また前進をするために　緑　良
目の前にぼた餅試したいのだな　克　子
目の前にある人参が邪魔になる　大　輪
風向きを確かめている前夜祭　保　州
前向きに今年こそはと跳ねてみる　登美代

近すぎて目先の幸に気づけない　俶子
沈思默考前頭葉を研いでます　泰女
母さんの前では永遠に子供　よりこ
前方においてあるのは闇だろう　輝子
買えばいいのに少しの餅をやっと搗き　美子
海凪いでやっと心を庇い合う　寿子
この場所でやっとあなたに辿りつく　ほのか
正直に話してやっと気が晴れる　紀子
老いの脳やっと手にしたライセンス　智三
やっと来た八十路気合いで天を衝く　佐一
また縺れやっと解けた糸なのに　真里子
歳月がやっとつないだ血の絆　利治
ポケットの無限にやっと気付く老い　めぐみ
やっとこさ掴んだ椅子の荷が重い　准一
まだ咀嚼できぬ去年の正誤表　あきこ
今年こそと言う目標は持っている　三男
性懲りもなく日記帳また買った　英子
期するものあり不断着でゆく初詣で　徑子
今年またぴょんぴょん花野ひとり旅　和香
今年こそのこそが途中で立ち消えた　紀久子
身の丈で今年も笑顔あればいい　冨美子
今年また老母を見守り無事祈る　よしこ

大阪富柳会　古田　千華報

一合で心の隙間すぐ埋まり　和子
豪邸の裏から洩れる隙間風　七朗
晴れの日を心待ちする髪飾　佳子
今日も又愛でふくらむパンの種　田鶴子
野菊まだ咲かないままに冬が来る　晴美
モノクロの部屋で生きてる父の辞書　紅紫朗
日々息災起きて候う寝て候う　高鷲
未知数を飾る花嫁まぶしくて　安希子
友の名をまた一人消す季が巡る　彦次
妹と老後は遊ぶはずだった　よりこ
隙間から漏れて流れた過去の罪　壽峰
注連飾毎年写る人と居る　登子
君の住む町へ続いているレール　奏子
びろーどの様な恋した城下町　アキ
初めてのおつかい隣町へ行く　武人
国境の町カラスが使う二カ国語　未知
片仮名のまん中辺に亡母がいる　よしみ
御身拭いしてみ仏へ暮れの餅　欣之
小春日が二人の隙間暖める　華
どの風も答えをくれぬ冬の景　鬼焼
着飾って誤解を招く羽目となる　操
身辺を整理残ったのは鱗　信子
唇の隙間零れた罪一つ　惠
路地に住み猫三匹と日溜りに　伸雄
飾り気がなくて男の一本気　寿之
また一つ記憶が秋に食べられる　森子
木枯しのジャズ聞いている胡蝶蘭　千華

川柳塔なら　坊農　柳弘報

痛恨は先を急いだストレート　彰治
お膳立てされた話に乗る迂闊　隆之
マスコミが離婚会見お膳立て　芳子
閻魔さまお呼びは急がないように　ふりこ
年金で地味なピエロを演じてる　紀雄
急ぐので詳しい地図を持っている　千梢
どもならんピエロの国が一つある　勝弘
陰膳今も母の戦後は終わらない　いさお
ロスタイムピエロで行こう朗らかに　博一
最高の有終の美だ尊厳死　萌子
据え膳を食べ損なって今の妻　弘風
目的へ悲しいピエロ演じてる　和夫
急きます楢山行がもう出ます　のりこ
急がねば君に届ける愛がある　寿之
ケータイが追い抜いてゆく十二月　成子
栄光の中のピエロが踊り出す　洋子
紅白の裏番組で締めくくる　信子
浮世とはセレブの役とピエロ役　修
お膳の上薬見せ合う老い仲間　一風
活力は夕餉の膳の笑い顔　隆盛
泣き笑いして補陀落へ舟に乗る　洋三
有終はビールの海で眠りたい　國治
上げ膳据え膳病院食にならされて　柳弘
ピエロ今独りよがりの幕を引く　恭昌
人間は育つ決して急がない　ダン吉
有終を飾る威勢のいい弔事　順啓
美しく終わる僕には無理だろう　完次
陰膳とひとり芝居の幕が開く　富子

伴走の妻がいつしか前を行く　良一
膳囲み笑顔弾けている平和　朝子
急いだら百歳までに息切れる　隆子
さあどうぞピエロの席が空いてます　真理子
断食をすませ一汁のありがたさ　比呂志
定退の花道六方踏み乍ら　寿美
喝采を遠くにうたた寝のピエロ　理恵

川柳塔きゃらぼく(鳥取)　大塚　恵子報

ロボットに恋する人も現れる　寿々子
CTが僕の体を小刻みに　亜弥
好き嫌い人生模様万華鏡　初枝
みか月が明けの明星とランデブー　恵子
ふと見れば大文字草顔を出し　晴子
脳みそがフツフツ沸いてくる時世　繭
海を背に松は大樹に錦公園　瑞枝
穏やかな朝を手にするカレンダー　千代
永い道息整えて又歩く　春枝
雪原の丹頂戯れても品が　ふみ
内心はカッカと燃えている枯木　てい子
母がしきりに綱を繕う気にかかる　未延子
菅総理精彩欠いて寝惚け顔　麗

南大阪川柳会　吉川　寿美報

ほっといて自覚してます頑固です　勝弘
素晴らしい頑固は男の勲章だ　叡子
チャンネル権父に任せて無事平和　なぎさ
人許す愛のチャンネル抱いたまま　柳弘
チャンネルに少し油を差す賀状　ダン吉
夏の疲れ残るが元気だとだます　ルイ子
歳隠す技がさえてる厚化粧　弘風
バーゲンの赤札元の値がだます　直子
だまされやすいタイプと顔に書いてある　たもつ
辞書引いた時は覚えていた漢字　柳右子
株式欄漢字社名減っている　忠昭
孫抱くと途端にかなになる漢字　栄子
旧漢字片かな交え母の文　弘子
写経して漢字の美学にのめりこむ　更紗
漢検に挑む錆びつく古稀の脳　克己
漢字ならボクも書けると和の一字　恭昌
ルミナリエなくても神戸美しい　柳伸
この年の掉尾を飾るノーベル賞　一歩
もどかしい政治とカネの宮仕え　弘泰
歩一枚王のピンチを食いとめる　(吉)修
TPPより怖いのは過疎化です　和雄
歳末のセール禁足令がでる　憲太郎
カラカラと落ち葉が走る虎落笛　正春
舞う枯葉踏まれる枯葉命とは　志華子
美辞麗句きらきら人を釣る疑似餌　集一
しっとりと炊けるお豆は母譲り　あおい
ありがとうの言葉まっすぐ胸を射る　楓楽
大阪変えるチャンネルなるか維新　寿美
チャンネルの好みに合わせて別居する　タカ子
政治家のチャンネル今や頼りない　東吉
チャンネルを妻から取ったことがない　郁夫
年甲斐もなく甘い言葉にだまされる　ひさ乃
だまされておくのもうまい処世術　萬的
怖いものなくなりやっと目が覚める　昌紀
切れたなら補充の効かぬ血の絆　シマ子

八尾市民川柳会(大阪)　宮西　弥生報

リサイクルわたしを何度裏返す　美代子
日めくりの一日毎に打つ句点　留里恵
心には燃やし続けている炎　朝子
まわり道やっとあなたに会えました　奏子
歳とると疾風のように去る月日　武人
神仏最後は女房に手を合わせ　耀一
朗報の予感くっきり虹が立つ　寿鶴
身の丈をそれなり生きた自負がある　賢子
嘘吐いてそれから先の不整脈　いさお
凶と出たみくじは神の思し召し　加央里
瀬戸際で一本下りた神の藁　欣之
情熱が枯れたら一度会いたいネ　扶美代
三叉路で女神が笛を吹いている　華
皺皺の元気が集う同窓会　柳伸
神はもうお手上げで人間頼み　草風
沖縄は「甘受」出来ない基地負担　紀雄
逆光へ本音が動き出した春　寿之
リストラの街です神さまが消えた　森子

絡め合う指はぽかぽか冬の恋　よしみ
合掌が続く夜明けの献花台　あかり
合掌と祈りがひびく老母の文　弥生

川柳クラブわたの花(大阪)　西川　義明報

権力を持てばお金が欲しくなり　正春
やり残し多く人生がせわしない　妙子
思い出は心の中を占拠する　俊子
少数政党日本の行方決めている　晴美
ゴキブリの悲鳴にスプレー放り投げ　浩三
過ごし良い季節束の間おお寒い　孝子
柿好物熊の気持ちはわかります　和子
ユニクロで老いも若きも様になる　ますみ
泣き上手妻にあっさり騙される　はじむ
正月の予約なくとも準備する　たえ子
過ぎし日を振り返らずに今日生きる　美代子
あるようで無いのが愛と知りました　耀一
消し忘れ自分でないと揉める朝　知佐子
さわやかに老いたしゴール迄の日日　民
寒い朝冬吹く風は雪の色　博子
瞳みて手話で談笑ボランティア　愛子
中国の出方一つで浪高し　奈良司
人生の師となる友を多く持つ　宏至
言い勝って心に残るわだかまり　いつふみ
見栄と義理からんで太る心付け　宏
熱燗と人肌恋しひとり鍋　義明
ひとり言言うて肩の荷軽くする　一風

川柳茶ばしら(愛知)　板山まみ子報

ひとりにはもう馴れました玉子焼　遡行
生意気な反抗母も気炎吐く　幸子
泣き笑いいっぱいあって年が明け　かつ子
一人者正月勤務重宝に　ゆり江
肝心なとこ横文字で分からない　美千代
検査値を越えて大好き酒を絶つ　雅美
酔う前に写さなければならぬ父　まみ子

長柳会(大阪)　村上　直樹報

役目終え肩の荷下ろす古暦　弘光
いざやいざこころも躍る卯の初日　直樹
初日の出誓う祈りの幸あれと　明子
躍進を卯年の絵馬に誓う春　孝代
グチを言う口にはチャック卯の誓い　ふみ
出来もせぬ誓いを立てる初詣　たけし
云い過ぎか心へ負けを悔い悟る　エミ
女です和解の水は流せない　マサ
平和ボケ誓った言葉忘れてる　よしお
ハワイでは誓った筈が直ぐ忘れ　武男
父ちゃんの禁酒の誓いその日だけ　もこ
弁当に和解のハートハンバーグ　隆彦
心地よいあなたの傘でひとやすみ　ヒロ
夕焼けに夫婦の誤解溶けてゆく　和代
人の世は残照染めて無の世界　靖博
発言を止めるエヘンも咳のうち　芳野
寒い日も犬の散歩は忘れない　正一
トイレ掃除きっとするよと誓う孫　けい子
懲りました騙されましたマニフェスト　篤
空しくて誓いの言葉口にせず　輝子
声変わり黙る反抗まっしぐら　久美子
闘いのノルマが消えてまるくなる　光弘
咳一つかけよる妻がいてくれる　正博
和を誓う婚約指輪白寿まで　正子
幾度の誓い紫煙が揺れている　和子
就職難悲痛な誓い背負う絵馬　三和子
和解した祝いの酒でまたけんか　正美
束になる程妻が持つ誓約書　淳司
禁煙を誓ってからの物忘れ　英美
咳払いされて我が身の非を正す　敬二
こだわりを捨てると潮が満ちてくる　冨美子

サークル檸檬(大阪)　松尾美智代報

死ぬまでは生きねばならぬ覚悟する　房子
ゆっくりと言うてくれたらわかるのに　昌紀
スカイツリー天にあいさつ済ませ立つ　久仁雄
ぬかるみを歩いた靴は気を配る　光久
天っぺんで下見る人と見ない人　たもつ
若かりし時は無限と思ってた　加お里
母の声聞きたく天へ耳澄ます　美智代
結婚しょう天まで届く声に惚れ　蕉子
心配が夜の天井かけ巡る　扶美代
クレヨン画天まで飛んだ竹とんぼ　義子

本日も晴天命輝かす　希久子
迷ってもいずれは天に続く道　みつ子
ゆとりなど自分次第と天の声　いわゑ
神よりも天が許しはせぬ不正　楓　楽

川柳塔まつえ吟社(島根)　**三島　淞丘報**

輝ける朝だ今年の夢を抱く　町　紅
相性が良くて輝く老いの春　ちえこ
宇宙のちり乗せてかがやき帰還する　幸　代
百歳を輝いている母の顔　桂　子
輝いた頃を引きずる隠居部屋　昌　枝
酔うほどに輝く居酒屋のホタル　芳　山
ほのぼのこたつでみかん減っていく　知恵子
夢のつづきにほのぼのとくる女　螢
卯の年が明けてほのぼの歌も出る　ゆ　き
ほのぼのと雑煮類ばる亡母だった　畔
ほのぼのとガスの炎を見て過ごす　柳　歩
ほのぼのと明ける東の窓に恋　注　湖
逃げ道を教えてくれた白兎　小　鹿
兎には欲と油断を諭されて　長　吉
兎年でも足腰錆びて跳ねられぬ　政　子
月兎こっそりデート目が赤い　たけし
兎年波乱含みの夜が明ける　和歌子
おでかけの兎は赤いコンタクト　たえこ
平和です山も田んぼもちゃんとある　茂　美
世界中平和であれと初日の出　邦　代
平和ぼけすまいと今日も外へ出る　薫
六畳間平和な風が行き来する　禮　子
マジシャンの手には平和な鳩が住む　治　代
おせちには平和もひとつ入れておく　とも子
石段を登ればにゅっとあなたの手　玲　子
好きな山登る米寿のいい笑顔　ちえこ
天守閣に住みリハビリと登り降り　芳　恵
大山に登って見たい望みもつ　英　子
頂点でうふふこの世の指定席　美智子
頂上に立って私の山にする　淞　丘

川柳ねやがわ(大阪)　**籠島　恵子報**

初春のでかい夢載せ初鏡　弘　一
清濁を呑みこむでかい母の海　洋
重なって夫婦円満鏡餅　弘　風
一合で一合ほどの心地良さ　郁　夫
大空の凧見上げてる飛蚊症　さち子
尻餅をついてアハハで照れかくし　修
死んで帰れ大きな嘘を言うた父　とし子
初デート大きな夢を語り合い　博　泉
大風呂敷広げてたたむこと忘れ　秀　雄
快適な正月したい親の夢　麗
骨折のギプスの取れた日の身軽　朝　子
広大な視野が開ける子の未来　賢　子
お前と添うて快適だったほんとだよ　鈍　甲
いちご大福少女は恋を知りました　柳　弘
大吉が出るまで引いているみくじ　栄　二
年金で今日も庄助して暮れる　じゅんこ
快適に暮らす家族に守られて　ルイ子
初ぜりで巨大マグロだ御目出度い　美　江
ウワッハッハッ悪運とばす年男　寿　子
お雑煮で日本人だおめでとう　かすみ
直感で大きい方に手をのばす　三　郎
寄らば大樹の陰に集る蟻の群　薫
期待湧くなんと大きな呱呱の声　一　風
快適な一日だった丸い月　祥　昭
年賀状でっかい夢をのせてくる　茜
餅花も花いちもんめお正月　恵　子

川柳あまがさき(兵庫)　**田原　一兆報**

惚れた方が先に来ている待ち合わせ　かずお
えべっさん十年振り手をつなぎ　泰　子
大阪の土産はタコ焼きブタマン　茂　幸
厳冬でラクダのシャツも出番あり　雪　菜
くどいけど言って置きたい娘の躾　よしひさ
手土産がこんなに効くってびっくりよ　洋　子
お土産をちょっとはずんで怪しまれ　靖　鬼
上げ底と知らずに買った土産物　朋　月
震災の置みやげありすき間風　純
くどい説教足がだんだん痺れだす　あかり
ケセラセラ今年はこれで焦らない　里　江
お見合いに焦る娘のダイエット　柳　明
大阪のオバチャンくどい色が好き　幸　香
古希ちかく土産はいつもお漬物　登　子
百八の鐘の余韻は庄の中　野　薫

焦り過ぎ歳甲斐も無く恥を掻き　芳治
よろこんで貰ってあげる君の風邪　菜々子
洗濯の土産どっさり子の帰省　五月
そのマグマ静める為に出す土産　美義
笑うでも泣くでもなしの大欠伸　和子
長い耳嬉しい話きかせてよ　江美
風花に焦る心を乗せて冬　比ろ志
饅頭の下にかくした金五両　祐康
こっそりと渡す土産も買ってある　哲男
くどくどと言うから本音ばれている　奮水
百態のうさぎが跳ねて賀状来る　美也子
たっぷりの願い初詣のはしご　正和
はやぶさの土産貴重な砂ぼこり　求芽
九条が焦る黄海波高し　勝巳
とむらいの雪はらはらと肩を刺す　哲夫
大吉のみくじ大事に持ち帰る　紀乃
晩節を焦るでもなし霜を踏む　ヨシエ
穴あけて帰った後の白障子　イサミ
添え書きのことばがうれし年賀状　キヨミ
機が熟すまで焦るまい焦るまい　美籠

はびきの市民川柳会(大阪)　徳山みつこ報

愛してるとたまには妻に言ってみる　敏
美人よりお愛想良しが持てている　ちづる
ほめて愛叱って愛で子は育つ　フジ
バレンタインアイラブユーを待ってます　悦子
家捜しをすれどないない愛なんて　佳代子
親の愛底もなければ蓋もない　扶美代
愛少し分けてください飢餓の子へ　いさお
初漁の伊勢から届く縁起物　美喜
年末に心のそうじいたします　真一
年末は三億円の夢があり　獏沓
臼と杵ほこりかぶって納屋の隅　喜久子
安売りのチラシ片手に主婦走る　久仁子
残高をじっと見詰める年の暮　アヤ子
ボクだけが何もしてない年の暮れ　六点
逆風は承知で頑固押し通す　一壺
医者嫌い病魔に勝てず頑固折れ　りつえ
値上げせぬパンにおやじの心意気　みつこ
足して割る妥協を嫌う頑固者　章司
点滴に父の頑固が溶けてゆく　泰子
カニツアー帰りは蟹と寝ています　ヨシ枝
日本海の蟹が絶滅するツアー　ダン吉
客の数ばかりかぞえているガイド　美代子
格安のツアーしんどいだけやった　光男
スランプになって初心に立ち返る　庸佑

豊中もくせい川柳会(大阪)　藤井　則彦報

就活の子等にきびしい冬景色　紀乃
お洒落して何処へ行くのと近所の目　庸佑
好き好き好きに裏に何かがあるらしい　萬的
開封へ欲の目注ぐ遺言書　幹治
ぽっくり寺へ挨拶に行く年始め　千恵子
マンネリの日記余白を持てあます　志津子
フランスの洒落は通じぬなにわ筋　歌留多
母との別れ穏やかになる息遣い　佐和子
断りの駄洒落ほめられ引き受ける　久子
老人の決心つかず若作り　美津子
ウエルカム心はいつも開けたまま　宇乃子
本当は親が買いたいランドセル　(永)玲子
お似合いと煽てられては無駄を買う　幸雀
新春の歌舞伎お洒落の極めつき　夢
僕の脳ジョークを言うて試す奴　堅坊
介護終えた妻の寝息はリズミカル　則彦
封開けて囲む笑顔にある絆　美義
息してるかと朝寝坊のぞかれる　寿美子
米が好き酒もっと好き妻もっと　(岩)玲子
丸よりも崩れた楕円形が好き　見清
ホームレスのことなど思う凍てつく日　千枝子
幸せは開けることない玉手箱　求芽
金婚へ息が合ってた摩訶不思議　巴子
ありがとういっぱい言うていい余生　朝子
錆びついた五感も好きと日向ぼこ　隆
殻一枚剥がし心に風入れる　美智代
「また君に恋」なんて真面目な洒落でしょう　葉子
ささやかな幸せ春へ開けごま　賢子

川柳花の輪(大阪)　妻谷　重風報

あれこれと薬並べるご老人　重風
あれこれとまだ習うことあり八十路坂　泰子
あれこれの欲も二本の手の範囲　克衛

三世代家族をつなぐ子の笑顔　風
大阪のおばちゃん何故か飴くれる　勇太朗
大阪が俺を掴んで離さない　楽鬼
天下人のファイト貰いに天守閣　一幸
おしゃべりが即漫才になる大阪弁　薫
大阪がふるさとですと自慢する　やすの
宇宙までもうけ話にするなにわ　音成

岸和田川柳会(大阪)　仲谷　弘子報

若女将隅に座って目で殺す　清
凡人の心の隅にある邪念　玄也
世の中の片隅照らすボランティア　泰弘
片隅に居たって光る人も居る　淳風
駅弁の隅も残さぬ戦前派　蛙城
隅っこでまだ筋論を練っている　ダン吉
たまたまの運の強さに過信する　房枝
たまたまの失言ですと悪びれず　義泰
不運ですたまたまそこにいただけで　忠太
誕生日同じと聞いた日から友　昭
人知れず添いたい方が居るのです　楢代
好物に熱燗添える愛の膳　俊昭
風呂敷の結びに添えた心意気　みつ江
母ちゃんがゆっくり添えてくれた金　月子
披講前ジョーク添えれば場が和む　隆昭
子育てを終え犬の子と添い寝する　香代
新米とサンマにスダチ添えてオツ　和美
来世も添いとげますわわしゃごめん　笑司
花に添う蝶にもあった好き嫌い　仁緑
添える手で時々叱っている看護　遠野
また会おう笑顔を添えている握手　美籠
紅一点座に彩りを添えている　珠子
お互いに添木とならん老夫婦　東吉
まだまだとシニアナンバーつけぬ意地　洋
4番よりつなぎ役目の2番打者　武志
ナンバーツーまた生け贄になっている　哲矢
四苦八苦最期に抜けた自信作　紀雄
ナンバーが悲喜こもごもの宝籤　つかさ
ナンバーは妻に内緒の口座です　幸子
郵便ナンバー電話と混ざる老いの脳　弘子

倉吉川柳会(鳥取)　竹信　照彦報

暑すぎた夏のお詫びに雪が降る　完司
大雪が解けると困る隠し物　次男
この地球の汚れも憂さも雪が消し　和子
雪月花愛でるに過ぎる今朝の雪　鬼一
雪害がつぎつぎつぎと出てきます　けいこ
雪解けて七十歳の夢また越すか　恭子
荒れるだけ荒れて神々しき山河　石花菜
黄泉行きはピンピンころりワンダフル　賀津恵
シュレッダーマル秘も食べてワンダフル　玲子
銀世界日本の四季にワンダフル　喜美子
ワンダフル忘年会に新年会　泰輔
ワンダフルじい遊ぼうと孫が来た　宏
ワンダフル昔の娘フラダンス　英子
仰ぐのは師より何より札束だ　瑞子
物忘れなんでこうなの天仰ぐ　由紀子
仰ぎ見るうちの母ちゃん山の神　貞子
天井画仰ぎ見とれて首だるい　日出子
苔むした三朝小唄の碑を仰ぐ　重忠
婆ちゃんは満月仰ぎ手を合わす　康子
土になる為にみな皆まっしぐら　萩江
悪人が仏の道をまっしぐら　螢
年男福をつかむとまっしぐら　美津恵
仕事なくまっしぐらには進めない　智恵子
恋人は今も昔もまっしぐら　風露
音もなく空から雪のまっしぐら　美代子
舞い乍ら鳶は獲物にまっしぐら　祐子
ワルツチャチャチャ今老春をまっしぐら　悠子
喜寿迎え米寿に向けてまっしぐら　酔芙蓉
振り向けば恩師仰げば青い空　照彦

川柳同友会みらい(鳥取)　吉田　陽子報

近くまで来たと探りを入れてみる　寒之
うまる程隣のもみじ赤くなり　純宏
惜しまれて世代交替する紅葉　陽子
大変がすぐ口に出る年の暮れ　千恵子
かしこまり大変な事詫びる首　ひとみ
宿題の不出来をバネにして返す　一聴
はっきりと言わぬが華の風が吹く　礼香
はしゃいでも共鳴しない虚しさよ　章子
はっきりと秋を見ぬまま冬になる　久司

ひとときをはしゃいで眠る秋の山　美恵子
子が巣立ち偽物夫婦仮面はぐ　温子
偽物も用途に支障ない器　ふみ子
お返しの皿に松茸のっている　みち子
人生が紅葉になって行く愁い　三郎
変わり身の速さ脱帽してしまう　くにこ
目や耳やひざも痛めているうさぎ　敦子
干支は馬サラブレッドでないけれど　信子
山の端は一日諸事を呑んで暮れ　安子
育めばまだまだ伸びる木の根っ子　菜美
拡がりは無限の世界ゼロを組む　勇
はで木組む稲干す顔のすがすがし　和代
小細工はせぬライバルと四つに組む　華蓮
肩を組む思いの違い伏せながら　一眸
辰年と言う時鼻が高くなる　遊子
今日の選挙は党派を越えてしてみよう　はるお
退屈な振りしてテロを企てる　帆雀
うどん蕎麦疲れた口に丁度よい　公弘

西宮北口川柳会(兵庫)　小林　わこ報

天晴れだ転んでもなお継ぐたすき　章子
晴れ着きたママは美人だ七五三　歳子
星月夜明日は孫の晴れ姿　キヨミ
戎晴れ賽銭箱を増やします　美津子
成人の夢よ無限に雪晴れる　哲子
晴れの日を洗濯日というご親切　いたる
コンクール入賞孫の晴れ舞台　基輔
朗らかな人の心は晴れている　比ろ志
紅一点混じり白けた座が和む　折杭
紅白で歌える曲は減り続け　浩司
紅白の蜜あわき彩雛あられ　毅
紅白の幕に祝辞の長いこと　耕治
赤勝って白勝ってと愛子さま　光久
鮮やかに他人裏切る喉仏　敏夫
鮮やかなシュート決まって国が沸く　盛夫
鮮やかな夕陽に明日を期待する　武臣
稜線に夕日鮮やか冬の晴れ　光子
鮮やかな笑顔が並ぶ入社式　奮水
鮮やかな地場産並ぶ道の駅　順子
鮮やかに親跳びこえた子の笑顔　わこ
ぞろぞろに足踏まれても初詣　遠野
ぞろぞろと浮気の証拠にぎられる　朋月
ぞろぞろと福を求めてえべっさん　正和
新年会ぞろぞろ帰る閉店時　りこ
ぞろぞろと嘘が顔出す釣り自慢　文子
ぞろぞろと倖せ顔の初詣　千代
ご来光今年こそはの人の列　茂
薄口と濃い口ちょうどいい夫婦　宏造
満ち足りて今日一日を感謝する　野鶴
お正月孫の笑顔とありがとう　玲子
本年も夢のかけらを探します　直
初えびす福いただいて初句会　哲男
身の丈に合った笑いで今日も暮れ　求芽
明けて八十酒少々と川柳と　秋果
あっけらかんと済むほどこの世甘くない　美籠

あかつき川柳会(大阪)　宮﨑シマ子報

大器晩成今大空を駆け抜ける　柳弘
無人駅いまふる里の空にいる　ダン吉
青空にふわり笑っているようだ　蕉子
告白へ大空に描く愛一字　野鶴
大欠伸しても大空知らん顔　篤
おーい雲地球の悲鳴聞こえるか　いさお
黒雲が雪を孕んで急ぎ足　和雄
雲掴むような話を抱え込む　紀乃
雲に乗り会いに行きたい拉致家族　房男
春の雲優しい顔を演じてる　太郎
冬の雲なんで寂しい顔をする　克己
かくれんぼかけっこ雲は遊び好き　見清
雲の名に季節朝夕詩情有り　忠昭
茜雲明日は良い事ある予感　美智子
認知症雲の流れに似た記憶　美世子
揺るぎない柱はモンゴル製である　穏夫
壁に耳ありウィキリークスが聴いている　敏子
凶弾が自由を殺す銃社会　宏
閉塞な社会打破するまず雇用　紀雄
蔵の中あふれてその上大減税　武
えんぴつがもっと上手になれと言う　一行
スクープを追う鉛筆の二十四時　良一
鉛筆に加持祈祷する受験生　桃花
鉛筆書きの母のはがきは宝物　シマ子

ぼくは鉛筆妻はけしごむで共白髪　たもつ
HBのようなお方で他愛なし　楓楽
癌告知時を刻んで生きている　秀夫
遊行期を刻まれながら鐘を聞く　昭
破滅への時を刻んでいる地球　正
酷暑から酷寒命刻まれる　東吉

岬川柳会(大阪)　八十田洞庵報

今日限りと何度きめたか甘納豆　年子
あれこれと無駄と知りつつ話す夜　桜琴
無駄骨も長い人生糧になる　和香
無駄使い親方日の丸根が深い　貞夫
見ていろよ一票無駄にさせないぞ　蛙城
芸人は無駄馬鹿出して売れてゆき　峻史
きっと晴れる期待していても雪女　とみ
孫達に図星をされてよう言うわ　茂平
優しさをムードで包むオブラート　寛
つれ合いとデートが出来る内が花　圭子
不景気で巣ごもる家族和が生まれ　富美子
杖つくと年相応の影法師　令子
只見舞う郷は吹雪に遠く成り　洋子
知能犯追って刑事の重い足　利武
初氷散歩の子犬後ずさり　清一
霜おりて旨味いや増す菜のごとく　覚庵
不正露見驕った人の姿なし　悦子
世の波に近くのスーパー流れ去り　富美
ひしひしと仕分けの予感愛煙家　和美
霜の朝新聞配る子の出世　洞庵

米子住吉川柳会(鳥取)　渡辺多美子報

不揃いの文句が出ない川柳で　登美枝
九州っ子たまげさしたる雪に逢う　正親
マイクロで遺跡訪ねる暮れの句会　正二
のどもとを過ぎて運転荒くなり　宏之
吟行会白鳳の里雪まじり　紀の治
久し振り白鳳の里酒を酌む　欣子
此の居場所温めて余生丸く住む　すみえ
句の出来はまあまあ今日は忘年会　公一
大淀の地古代の暮らし眠ってる　多美子
紅葉も裸木に此の世は無常なり　ふみ
頂上を隠し大山怠けてる　未延子

六甲川柳会(兵庫)　伊勢田　毅報

鏡よ鏡ちょっとは嘘をついてくれ　楓楽
だんだんと小さくなった父の傘　能子
挑戦は家族の傘に守られて　忠貞
君となら雨の中でも傘要らぬ　保雄
書いたての傘出番遅しと待っている　恵子
照明に和傘を使う匠技　和恵
古希過ぎて向う旅路は喜寿傘寿　政一
蛇の目傘粋な彼女の舞姿　(山)弘子
打たれても打たれても行く挑戦者　盛夫
言えなかった打ち明けた今日日本晴れ　勤
心音を確かめ歩む車椅子　弘

そば打ちも化学目線でさじ加減　和子
メール打ち見てくれたかと直ぐ電話　武臣
手を打たず吹く風任せ日本丸　洋一
いっぱいの湯船溢れる旅の贅　浩司
熊にあげたい孫の集めたどんぐりを　利子
伸びきったゴムには無理がもうきかぬ　和郎
お飾りをいっぱい付けて飛ぶ噂　千賀子
いっぱいの思い出君にありがとう　順子
捨て切れず埃いっぱいかぶってる　寿朗
地デジより便りいっぱい待つポスト　勝
不揃いのリンゴが母の掌で光る　無限
音痴にも好き歌咽はマイク持つ　美穂
まだできる心の鐘を打ち鳴らす　孝子
妻の愚痴僕が変れば減るのかな　(飯)弘子
見上げれば満点の星夢無限　美恵子
尖閣の沖にきれいな初日の出　武彦
使い道もう決めていたジャンボくじ　茂
君もかとハローワークで友の声　基輔
青空を眺め笑顔のスキーヤー　繁義
新年を汽笛が知らす港町　芳江
弟が欲しいと嘆く雪達磨　毅
寂しいかと抱いてくれます昼の月　光久
恋をして炎になった白いばら　いわゑ
ぞろぞろとボスに従うイエスマン　みつ子

川柳大阪　長井　善純報

二日酔い記憶はあるが言えぬとこ　一歩

逃げていく記憶がとても悔しくて　芳香
辞書ばかり当てにしている記憶力　鉄心
たっぷりの愛で記憶が蘇える　笑風
こん畜生思った記憶忘れない　東吉
青春の記憶たどればボディビル　とし坊
暑かった今年の記憶忘れない　紀雄
記憶などございませんよ借りた金　勝弘
煩悩の橋を渡って来た記憶　柳弘
鮮明な記憶涙で見た知覧　まつお
配られた範囲で知恵をひねり出す　哲矢
気配りの出来る男になりました　すがお
ベテランの気配り総てそつがない　美籠
渡る時目配りせんと危ないよ　和
孫達へ気配り優しモダン婆　彦太
気配りのできる人好きありがとう　美世子
出来悪い野菜ばかりも配られず　川童
三ヶ日賀状届けて祝い膳　比呂志
配られた喪中悪友なつかしい　喜楽
やんちゃ気に見える裏の真正直　朝子
あのやんちゃ大きく成って警官に　功
やんちゃやけど気の弱いとこ好きやねん　美花
やんちゃした若いあの頃懐かしく　珠生
やんちゃくれ今は社長と同窓会　かよこ
海老蔵もやんちゃしすぎて罰当る　五月
見せかけはやんちゃ本当は優しい子　いつふみ
やんちゃした昔託びてる墓参り　義明
やんちゃでいい元気で先がたのしみだ　一風
やんちゃかて何れは分かる親ごころ　善純

翠洋会(大阪)　佐々木満作報

一期一会えにしの糸を捨て切れず　昭
渓谷の一滴森の夢繋ぐ　集一
一番でなくても彼は彼らしく　みつ子
まだ若い昭和一桁うさぎ飛び　日の出
おめでたい一も寂しい一もある　蕉子
一年の計など要らぬ歳となる　げんえい
邪気を捨て一気呵成の句をつくる　滋彦
筆太に一を書かして占師　千梢
一番と同じだけあるビリの数　すみ子
紅一点蓮舫さんが淋しそう　桃花
梅一輪ほころび春の兆しみえ　弘子
一長一短わたしの短をもてあます　志華子
一番にぴったりついてゆく野心　楓楽
一つまた一つと数え年をとる　公平
祝われる毎に年取り今白寿　舞夢
恙なく同じ顔と祝う屠蘇　理恵
金婚を祝う二人の愛の皺　照子
元旦に産声あげた宝物　満作
おめでとう母へ電話はくに訛り　正雄
祝う気になれぬ閉塞した時代　紀子
慶びの宴のかげの痩せた脛　恭昌
栄転の祝辞嫉妬もかいま見え　真澄
何事もよきにはからえ福寿草　義
ばあちゃんの思い出の味ちらしずし　善之
賀状来ぬ友の安否が気にかかる　浩二
文楽の人形の動き神の業　知之
目分量ひとりに馴れて恙なし　千歩

岩美川柳会(鳥取)　石谷美恵子報

テーブルを叩いて去った確かな目　忠良
マンネリの鈴の音熊はあほらしい　蟹郎
テーブルを囲む家族がいて楽し　一京
テーブルを賑わす釣って来た真鯛　重忠
食卓にぶら下げておくメモ用紙　幸子
門松の根元に明日が置いてある　蛍
巡礼の鈴父を呼ぶ母を呼ぶ　一瑶
時として財布の鈴は邪魔になる　節子
風鈴はやっぱり夏の風物だ　菖子
逆縁に心の鈴が鳴り止まぬ　雅女
ぐっすりと寝てから明日の策を練る　孝男
いつだって明日咲く花を信じ切る　圭一郎
散る花も明日につなぐ種子残す　たぬ
机には去年の未処理うず高く　稔
向きを替えひらき直りの明日がある　幸枝
豪雪だ兎飛躍の明日が明け　清帆
明日から歩くと決めてもう五年　幸安
リストラの匂うテーブル日が長い　美恵子

川柳さんだ(兵庫)　北野　哲男報

あれこれをご破算にして初詣　正和
初鏡心に笑みの紅を引く　キヨミ

時うつり初心忘れて色あせる　ちあき
「少年よ大志を」と今フリーター　晃
夢だけは大きく持って職さがす　忠
なぞなぞをかける子供の大きい目　聖也
絵に描いた餅で沖縄のどを詰め　茂山
鏡餅兎が鎮座跳ねる年　雅司
厳冬も明日へ続く荷を担ぐ　美和子
駅伝に故郷の選手探してる　歳子
有る人はあるんだ詐欺におうてはる　順子
年ごとに地球の回転速くなる　好文
綺麗だね紅葉の筈が振り向かれ　一泉
ばあちゃんもちゃんとあったよ淡い恋　一子
積雪は妻も動かぬ冬籠り　宣子
大寒のあき缶らしく転がって　菜々子
パパママに卒業証書ありません　章子
手と手と手孫とばあちゃん今が旬　淑子
たっぷりと墨含ませて描いた夢　彰
病床で闘っている祈ってる　祐康
好きだよと直球で来た憎いやつ　ひとみ
大病を抱えて卒業するお酒　婦美子
車押す風花舞い下り母の頬　名無子
ハートだけ持ち寄りスタートした初心　哲男

川柳塔さかい（大阪）　河内　月子報

空海も最澄も読み無信心　公誠
無神論者言うてはるけど初詣　玄也
仏滅の結婚式は五割引　としお
足痛いびんずる様を撫で回す　さくら
信仰に熱くなったらご用心　月子
核に銃悪い店子が住む地球　みつこ
住みついて家の盛衰見たやもり　俶子
一向に出て行く気配ない娘　雅明
俺の胃が大好きなのかピロリ菌　山彦
いつの日か地球も宇宙ゴミになる　千代
生きるため力のかぎり胡麻をする　唯教
住みなれていた公園を追い出され　舞夢
住みついた蜘蛛ゴキブリと対峙する　敏治
住みやすい黄泉から誰も戻らない　好
バッカスが住みつき医者もあきらめる　健吾
住みついて人の情に溶けてゆく　のん子
住み馴れて日に三本のバスを待つ　半銭
住みついて気兼ねどころか好き勝手　像山
築百年蛇もネズミも同居人　五月
温度差を我慢し合って二人住む　梓
住みついた町で両親忘れかけ　綾乃
行く先が近頃ふえてご機嫌よ　日の出
ちっぽけな恩着せ蔵へ住みつく気　冬虹
神前の誓いへ神の苦笑い　誠一
百度石神に祈った癌封じ　りつえ
始めから飲む気であぐらかいてはる　時雄
いつからか地球の自然ごねてはる　天笑
いい女乳房に深い業を秘め　愿
勇ましい父はしょっちゅう午前さま　朋月
飽き性で始める前に諦める　世紀子
母のもと居心地良くて四十年　雅子
外来種住んで不気味な池になる　竜之介
正月でも始めるものは何もない　隆男
伊達直人から広まった伊達直人　進
生きてゆく力気負わずごく自然　かりん

岬川柳会（大阪）（前月分）　八十田洞庵報

餌をねだるメダカに朝の陽が温い　茂平
落盤の救出成功世界湧く　富美子
おたいこを斜めに結びバックシャン　洋子
子を深く思い案じて頼らずに　圭子
怠け癖とれず転た寝秋日和　年子
大釣りで自分に打ちたい祝電を　峻史
草刈って山と積った牛の餌　悦子
大臣に使いこなせよ官僚を　清一
横文字が増えて情緒の誇り泣く　令子
お七夜に両家を結ぶ名で呼ばれ　和美
鉱員の救出に見る人の愛　東吉
肥満体支える方も疲れます　寛
支え来たはずの己が支えられ　桜琴
子も母も支えてくれる子沢山　蛙城
この世では老後の支えやはり金　とみ
支え合う家族の中にいる安堵　和香
不況です満員の札出ず終る　利武
外湯へと揃いの浴衣下駄の音　禮三
乾杯の後は聞く耳上の空　貞夫
どっこいしょ石段昇り神に逢う　洞庵

柳界展望

★西宮北口川柳会の平成22年度年間成績は次の通り。カップ永久保持者＝河原野折杭。一位＝小林わこ、二位＝黒田能子、三位＝長浜美籠・上垣キヨミ、四位＝河原野折杭、五位＝寺井秋果・西口いわお・亀岡哲子。

★平成22年度いずれも大賞

夫も紬私も紬年迎え　石倉芙佐子

★平成22年「川柳塔なら」年間秀句賞

頷いてそして女は華になる　大内　朝子

★山陰新報社「新年読者文芸」川柳の部・特選

新しい私をつかむまで走る　伊藤　玲子

▽同人動向△

☆小島蘭幸主幹は1月8日、第2回新春たまして川柳大会に参加した。

☆西出楓楽理事長の「友達がきっと待ってる無人駅」の色紙が、日本現代詩歌文学館の常設店に展示される。（平成23年3月6日～24年3月）

▽柳界動向△

◇岸和田川柳会会長（代表）は井伊東吉氏から岩佐ダン吉氏に交代。また投句先も左記に変更。〒596－0076岸和田市野田町2丁目13－19　中岡　香代

○川柳の会「法円」（発行人・福岡末吉氏）は、2011年1月26日「中村れんげ追悼号」を発行。

▽会と催し△

○**バックストローク第4回BSおかやま川柳大会**は4月9日(土)開催。会場＝ピュアリティまきび（まきび会館）。第一部「だし巻き柊馬」第二部　川柳大会　各題2句「数」湊圭史「アウト」丸山進「吊る」新家完司「点」草地豊子「鹿」前田芙巳代「吹く」石部明。出句締切＝13時30分、会費＝2000円、問い合わせ先＝〒709－0421岡山県和気郡和気町日室519－12　バックストローク発行所　TEL086－993－3231

▽お詫びして訂正△

▼**1月号**＝P18下段23行目、指・命する→**指・名**。P94下段10行目、大橋改良→**政**良。

▼**2月号**＝P90上段5行目、野良に行き→**生**き。P91下段17行目、故→**何故**。P110中段7行目、千・梢→**典・子**。中段8行目、典・子→**千・梢**。P114中段9行目、慈・彦→**滋**・彦。P122 2段5行目、英霊のホタルが探す妻や子よ→**妻よ**。

▼**1月号**＝裏表紙『麻生路郎読本』定価三〇〇〇円は**頒価**に訂正。遠野大八→**東**野大八。

▽御厚志御礼△

□塩満敏さん（参与・羽曳野市）から、川柳雑誌合本第17・第18・第19・第20巻及び昭和21年～24年合本、昭和25・26・27・28・29年を寄贈頂きました。

▽新誌友紹介△

米子市　紹介者　**生田　寒之**（サムユキ）

羽曳野市　紹介者　鈴木　公弘

磯本　洋一

紹介者　山﨑　武彦

神戸市　紹介者　**與水**（よすい）　**弘**

岸和田市　紹介者　山﨑　武彦

増田　隆昭　井伊　東吉

堺　市　紹介者　**増田　和幸**　西出　楓楽

常任理事会＝2月4日(金)　出席者22名。①第17回川柳塔まつりについて②川柳塔社規約・規定の一部見直し（確認）③定例確認事項④各部報告事項⑤川柳塔ホームページについて　**次回**＝3月7日(月)午前10時～

新同人紹介

柏原夕胡（かしはら ゆうこ）

―蘭幸・大輪・和香・楓楽推薦―

番傘わかくさ川柳会創立65周年記念

全国川柳大会

―田中新一句集「生きる」発刊―

日　時　平成23年5月3日(祝) 11時開場

会　場　フェイセスゲストハウス月華殿
JR環状線寺田町下車北口歩7分
〒543-0045 大阪市天王寺区寺田町1-7-7

清興事前投句
「落　語」　露の吉次　露の団姫
「生きる」　田中　新一　選
所定用紙又ははがきにて3月20日必着

宿　題
「煌めく」　赤井　花城　選
「ふわり」　赤松ますみ　選
「書　く」　住田英比古　選
「好　き」　奈倉　楽甫　選
「テスト」　西出　楓楽　選
「時　間」　森中恵美子　選

出句締め切り 12時　事前投句、宿題共　各題1句

会　費　3000円　**懇親会**　7000円

連絡先　藤原 一志　〒631-0024 奈良市百楽園2-4-17
TEL & FAX 0742-45-2537

主　催　番傘わかくさ川柳会

俳誌「船団」ホーム・ページより

坪内稔典　今日の一句（2010年12月15日）

風邪ひいて学者いよいよジジむさし

（麻生路郎）

『麻生路郎読本』（川柳塔社）から。

なんだか自分のことを言われている感じ。

「内閣が変わりゃ君まで大臣か」

「不幸にも気も狂わずに首相いる」なんて句はまさに当世の風刺。もっともこれらの句は今から40年くらい前のもの。40年くらいの歳月ではあまり変化がないのかも。

『麻生路郎読本』は近代を代表する川柳作家の主要な作品を集めたもの。著作解題などの資料も充実している。

この冬の読書が楽しくなりそうな1冊だ。

（「船団」代表・坪内稔典氏のご好意により転載）

「はなわらび」
第六回誌上投句のご案内

兼題と選者（男女共選・各題2句）

［得］小島　蘭幸 選・西村みなみ 選

［兎］廣畑　耕滋 選・山倉　洋子 選

［来］木下　草風 選・河原　千壽 選

［福］原田否可立 選・前川千津子 選

投句様式　用紙自由・句姿自由(4題8句)
郵便番号、住所、氏名、電話番号、必ず記入(何か一言、つぶやき等お寄せください)

投句料　1000円（作品発表誌、粗品進呈）

各題特選3句、佳句5句に呈賞

投句締切日　3月26日(土)

主　催　「はなわらび」

投句先　〒703-8267 岡山市中区山崎135-8
山本　美枝 宛
(tel/fax) 086-277-8354
携帯 090-4572-1408

お知らせ

従来特別常任理事会と各地代表者会議を交互に隔年で開催していましたが、昨年は一〇〇〇号記念大会を控えて各地句会代表者・役員拡大会議として各地句会の代表者と特別常任理事メンバーの相談役・参与に加えて理事の方の参加を得て開催いたしました。より多くの方々のご意見やご提案を頂く場として相応しい会議であるとの観点から、特別常任理事会を今後「各地句会代表者・役員拡大会議」に統合して隔年で開催することと致しました。従いまして、本年スケジュールに入れていました6月の特別常任理事会は取り止め、来年以降隔年で「各地句会代表者・役員拡大会議」を開催することとなりましたのでお知らせいたします。

川柳塔社常任理事会

同人名簿発行のお知らせ

七月一日に川柳塔社同人名簿を改訂発行します。

変更のある方は、五月末日までに本社事務所へご連絡下さい。尚、個人情報につきご本人からのお申出に限ります。

同人誌友部

災害お見舞

この度の豪雪災害により被災された方へお見舞い申し上げますと共に、一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

川柳塔社

第26回 国民文化祭・京都2011 川柳作品募集要項（概要）

～人・自然・ロマン むすぶ川柳 つながる心～

1、応募受付期間 平成23年4月1日（金）～6月30日（木）（当日消印有効）

2、応募規定

(1) **作品** 一人各題二句詠（未発表作品に限る）

(2) **応募料** 一人につき1000円（但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料とします。）

(3) 所定の応募用紙及び応募票に必要事項を記入し、郵便振替払込金受領証又はその写しを添えて応募してください。

(4) **応募先** 第26回国民文化祭井手町実行委員会事務局 井手町教育委員会 社会教育課内
〒610・0302 京都府綴喜郡井手町井手二本松3―1

3、宿題・選者（予定）〈事前投句〉**ジュニアの部**
「流れる」＝太田ヒロ子（千葉）「やわらかい」＝辻 嬉久子（京都）「寺」＝竹田 光柳（東京）
〈事前投句〉**高校生・一般の部**
「潰物」＝齊藤由紀子（東京）「道」＝鈴木 公弘（鳥取）
「脇役」＝二宮 秀三（新潟）「古都」＝池 森子（大阪）
〈当日投句〉
「野菜」＝やすみりえ（東京）「スイッチ」＝松本初太郎（大阪）「ガイド」＝藤山 竜骨（京都）

第二次選者
大野 風柳（新潟） 竹本瓢太郎（東京） 平山 繁夫（兵庫） 久保田元紀（大阪） 西出 楓楽（大阪）

4、賞（予定）文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・京都府知事賞・第26回国民文化祭京都府実行委員会会長賞
京都府教育委員会教育長賞・井手町長賞・第26回国民文化祭井手町実行委員会会長賞・井手町教育委員会教育長賞
㈳全日本川柳協会会長賞・京都川柳作家協会会長賞

5、発表会場 川柳の祭典（当日投句受付、入選発表、選評、表彰式）
平成23年11月6日（日）11時00分～16時00分 井手町立泉ヶ丘中学校体育館
入選作品は、「大会号」として刊行し、応募された方（小・中・高校生は入選者）に無料で配布。

6、問い合わせ先と募集要項の依頼先
〒610・0302 京都府綴喜郡井手町井手二本松3―1（井手町教育委員会 社会教育課内）
第26回国民文化祭井出町実行委員会事務局宛 TEL 0774（82）5700 FAX 0774（82）5701

7、主催者 文化庁・京都府・京都府教育委員会・井手町・井手町教育委員会・㈳全日本川柳協会・京都川柳作家協会
第26回国民文化祭京都府実行委員会・第26回国民文化祭井手町実行委員会

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 さんだ	15日(火) 午後1時から 答え・叱る・穴・こぼれる 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5—2—4　堀　正和
岸和田 川柳会	19日(土) 午後1時半締切 世紀・注ぐ・小さい ニューフェース	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川柳 ねやがわ	20日(日) 午後2時締切 パチンコ・逃げる・先手 自由吟	寝屋川市立総合センター　4F　第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
川柳 藤井寺	20日(日) 午後2時締切 別に・山葵	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 髙田美代子
岬川柳会	20日(日) 午後2時締切 スランプ・別人・人妻	淡輪17区集会所　南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	21日(月)午後1時40分締切 粘る・行儀・ギャップ・自由吟	豊中市中央公民館　阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
川柳クラブ わたの花	25日(金) 午前9時半から 虎・試験・抱く・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1—4—8　西川義明
川柳塔 すみよし	26日(土) 午後1時締切 宝・抱く・Yes(イエス)	住吉区民センター　南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三幸 川柳会	26日(土) 午後0時30分から カメラ・吹く・幸せ	和歌山商工会議所4階　第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保方 和歌山三幸川柳会事務局
はびきの 市民 川柳会	27日(日) 午後1時締切 桃・満足・シャツ・瞬間	綾南の森　公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	27日(日) 午後1時半締切 出口・リード・崖っぷち	鳥取駅　2F　シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205—45　萩原美雪
南大阪 川柳会	28日(月) 午後6時から 有り難う・笑う・サスペンス 雑詠	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	28日(月) 午後2時締切 飾る・あたふた・虫	京都ハートピア　地下鉄丸太町駅⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202　都倉求芽
松露 川柳会	28日(月) 午後7時半締切 輝く・火・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

3 月 各 地 句 会 案 内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	3日(木) 午後1時開場 担ぐ・姉・花園	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口　徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城　北 川柳会	5日(土) 午後1時開場 化粧・大切・ラスト・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	5日(土) 午後1時開場 ロマン・送る・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池　森子
倉　吉 川柳会	5日(土) 午後2時締切 酵素・薬・早い	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川　柳 あまがさき	8日(火) 午後2時締切 思案・逃げる・ピンク・自由吟	尼崎女性センター　トレピエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8　山田耕治
ほたる 川　柳 同好会	8日(火) 午後1時半締切 質・おくる・ゆうゆう	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1　水野黒兎
川柳塔 さかい	11日(金) 午後1時から そのうち・ユニーク 「ば・な・な(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3　河内天笑
あかつき 川柳会	11日(金) 午後2時締切 噛む・窓・過去	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2階） 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分 道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102　森村美花
川柳大阪	12日(土) 午後2時締切 残す・害・世界	地下鉄長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14　長井善純
川柳塔 まつえ	12日(土) 午後2時締切 鏡・動く・不覚・うきうき	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388　安達幸子
川柳塔 打　吹	12日(土) 午後2時締切 土・勝負・目標	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3　牧野芳光
川柳塔 みちのく	12日(土) 午後5時締切 胡坐・近道・もくもく	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53—1　小寺花峯
八尾市民 川柳会	13日(日) 午後1時半締切 岐路・花・移る・雑詠	八尾神社内　西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま 吟　社	13日(日) 午後1時40分締切 口(くち)・削る・くるくる・卒業	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188—14 川上大輪
西宮北口 川柳会	14日(月) 午後1時45分締切 塗る・矢印・いっぱい・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分　プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3—15　亀岡哲子

編集後記

★入学と卒業姉妹ピアノ弾く　薫風

★この間、新年を迎えたと思ったがもう三月。「老後は若き時より月日の早き事十倍なれば、一日を十日とし、十日を百日とし、一月を一年とし、喜楽してあだに日を暮らすべからず」と貝原益軒は「養生訓」に述べる。益軒自身は八十五歳の長寿を全うした。

★あだに暮らすべからず、と言えども、私の身辺から次々と消えてゆく物たち。「今、ここに置いたペンはどこへ行った」と捜し物ばかり。加齢を言い訳にしてあだに日を過ごしている。

★たまたま観たテレビのCM「勝負は還暦を過ぎてからだと思う」は、かつて豪腕で鳴らした村田兆治の言葉。還暦どころか川柳界には八十、九十歳以上で活躍されているお元気な方が多い。年を取ることも悪くはない、と背筋の伸びた後ろ姿から教わることが多い。

★題名に惹かれて「美しき身辺整理」（竹田真砂子著新潮社）を読む。本の山の埃に埋もれ、いつか整理せねばと思いながら、またもや本を増やした矛盾には目をつむる。本書は言う。「終着点で迎えてくれるもの。それは庶民でも庶民じゃない人でも同じ。『死』です」と。

★年は〔取る〕もの。五十九歳までは年を〔取りこむ〕六十歳以降は年を〔取り除く〕。年寄りは偉い。長谷川町子の漫画『いじわるばあさん』の生き方は潔いと絶賛する。先送りせず「先片付け」をするなど、美しい身辺整理の方法を説く。

★昨年末から今年にかけて日本海側の豪雪被害が甚大である。青森・島根・鳥取には同人・誌友の方も多く心を痛めている。米子の政岡未延子さんから届いたエッセイから、雪に閉ざされライフラインを絶たれた暮らしの大変さを思い知らされた。一日も早い復旧をお祈りします。（朱）

□弥生三月というと語感は柔らかいが、体感は冬の寒さだ。春を告げる二月堂の「お水取り」に、名残の雪が舞うのも珍しくはない。ただ空気の匂いが冬とは明らかに違う。

□芳しい花の香がどこからともなく漂う。水仙に梅から桃、桜と列島は花の時を迎え、冬眠から目覚めた命が一斉にうごめく・・。

□酷寒期は川柳の大会も少なく、炬燵で蜜柑を剥きながらテレビの虜になっていたりすると、川柳モードに変換しようにも頭が言うことを聞かない。あと少し、もうちょっと、等と怠けている間に投句日が迫る！これは私のお恥ずかしい現状で、事情は違え年中締切日に追われる。ただ世の中、自分が楽をした分、その皺寄せは関係者が必ず背負う。

□投句「一五日締め」とは事務所への着日で（土日祝日は事務所休日の為、前倒し）当誌を二十七日に発送する為の絶対条件なのです。必ず守って頂くよう改めてお願い申し上げます。（冨）

ひとこと

木津川先生の川柳

先生は今回「人生としての川柳」の題名で角川学芸より出版されました。題名について、著者はあとがきに「僕は若いころから人生とは何かの答えと、どう生きていくかの術をすべて川柳から学んだのである」と述べています。そうして川柳は生き方を教える〝人間大学〟に他ならないと結んでいます。

また先生は「文芸の中で川柳が正当にあつかわれていないだけでなく、川柳への誤解と軽視が今もって解消してない」と嘆いておられます。

本書は文芸評論家でもある著者が、雑誌「川柳マガジン」に八年あまりの歳月に亘って連載されていたものです。道しるべがなければ歩いていけぬ人の世であるが、私ども川柳人は川柳を人類最高の文芸と思って、この手引書でそれを学んでいきたい。（井上　桂作）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（5月号）

地名

都道府県
市

姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「にらむ」　（３月15日締切）

５月号発表

山本希久子　選 ――共選―― 三宅　保州　選

B　A

地名

市都
県道
府

姉
雅
号

切らないで下さい

B　A

地名

市都
県道
府

姉
雅
号

左右に同じ句を書いて下さい

本社3月句会

とき　3月7日(月)　午後1時開場・2時締切り
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛の間
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし「生き難い時代を言霊で」　加島由一氏

席題「　」　山田耕治選

兼題「平　行」　両川無限選
「スイーツ」　高島啓子選
「互　い」　宮西弥生選
「　恥　」　前　たもつ選
「毎　日」　小島蘭幸選
（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円（切手可）

本社4月句会
7日(木)　午後5時から

兼題「檸　檬」「遠　い」「草の芽」
「鳴　呼」「師　弟」

作品募集

5月号発表（3月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸選
水煙抄（8句）　西出楓楽選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄「にらむ」（2句）　（三宅保州　山本希久子共選）
一路集（3句）
「丸　い」　坊農柳弘選
「トリック」　榎本日の出選
「たけのこ」　山岡富美子選
初歩教室「流　す」（3句）　鈴木公弘担当

6月号

檸檬抄「時　代」
一路集「茂　る」「　川　」
「役　目」
初歩教室「　口　」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4)各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第29年度　夜市川柳募集

第10回「狙　い」　天根夢草選
ハガキに3句　**3月末日**締切

投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**川柳塔さかい**

定価　八百円（送料76円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇一一年（平成二十三年）三月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替〇〇九八〇―四―二九八四七九番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十三年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一〇〇六号 ● 川柳塔 三月号 定価 ● 百円（送料 七十六円）

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの
つきごま

長い間親しまれてきたオニザキの「すりごま」は、名称を変更し、パッケージを一新いたしました。
オニザキのすりごまは、元々すり鉢ですったゴマではなく、杵と臼を使った杵つき製法で出来た「すりごま」です。
今までと変わらぬ、風味豊かな味わいをご堪能ください。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL フリーダイヤル 0120-30-5050

医療法人社団
湯川胃腸病院
・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得
健康保険取扱 看護２A・緩和ケア病棟
・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター
診療時間
月～金 8:30～16:00
土 8:30～11:00
JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp
電話 大阪(06) 6771-4861(代)

雑誌 05703－3